円覚寺旧境内遺跡（No.434）

山之内字瑞鹿山 398 番地点

例　言

1. 本報は、鎌倉市山ノ内字瑞鹿山398番における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は2007年2月6日から3月30日、調査対象面積は40.25㎡である。出土遺物、図面・写真等、調査に係る資料は鎌倉市教育委員会が保管している。
3. 調査団の編成は以下のとおりである。

   調査の主体　　鎌倉市教育委員会
   調査担当　　森孝子
   現地調査参加者　鍛冶谷勝二・松原康子・鈴木弘太・三浦宏予・佐藤あおい
   資料整理参加者　栂岡ケイト・岡田慶子・本城裕・渡辺美佐子・赤堀祐鮫
4. 本報の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。

   遺構図　　1/50・1/40・1/30
   遺物実測図　　1/3・1/1（銭）
5. 本報の作成は以下の分担で行なった。

   遺構図版　　森・赤堀
   遺物図版　　栂岡・岡田・渡辺・赤堀
   観察表作成　　渡辺・赤堀
   写真撮影　　遺構：森　　遺物：赤堀
   原稿執筆　　第1章：森　　第2章～第5章：赤堀
   編集　　赤堀
6. 本報の作成にあたって、原廣志氏・田畑衣理氏には格別のご指導・ご協力を賜りました。御礼申し上げます。ご指導を十分に活かしきれなかった部分は報告者の力不足である。お詫び申し上げたい。また、現地調査・資料整理において以下の方々からご助言・ご協力を賜った。お名前を記して感謝致します。(順不同・敬称略)

   菊川英政・汐見一夫・馬淵和雄・伊丹まどか・押木弘巳・沖本道・平井里永子

目　次

本　文　目　次

第一章　本調査地点の位置と歴史的環境 …… 205

第１節　本調査地の立地
第２節　歴史概観
第３節　遺跡地の歴史的環境（図2）
第４節　本調査地点周辺の遺跡（図1、表1）

第二章　調査の概要 …… 212

第１節　調査の経過
第２節　グリッド設定・国土座標との合成（図3）
第３節　調査地の堆積土層（図4）

第三章　発見された遺構 …… 217

第１節　中世第1面（図5）
第２節　中世第2面（図9）
第３節　中世第3面（図14）
第４節　中世以前（図18）

第四章　発見された遺物 …… 240

第１節　表土・攪乱・表採出土遺物（図20）
第２節　中世の出土遺物（図21 ～ 29）
第３節　古代以前の遺物（図31）

第五章　まとめ …… 266

第１節　古代
第２節　中世
第３節　Ⅱ群かわらけについて

挿　図　目　次

図１　周辺の遺跡 …… 206
図２　円覚寺境内絵図 …… 209
図３　グリッド設定図 …… 213
図４　調査地の堆積土層 …… 215
図５　１面遺構配置図 …… 217
図６　土坑１、落ち込み３ …… 218
図７　溝２・３、落ち込み４ …… 219
図８　建物１～３ …… 221
図９　２面遺構配置図 …… 223
図10 落ち込み５ …… 224
図11 建物４ …… 226
図12 柱穴列１・２ …… 227
図13 かわらけ溜まり …… 230
図14 ３面遺構配置図 …… 231
図15 井戸１ …… 232
図16 溝１ …… 233
図17 溝４ …… 235
図18 中世以前遺構配置図 …… 237
図19 落ち込み１・２ …… 239
図20 表土・攪乱・表採出土遺物 …… 241
図21 １面上包含層、１面遺構出土遺物 …… 243
図22 ２面遺構出土遺物 …… 245
図23 ２面構成土出土遺物（１）…… 246
図24 ２面構成土出土遺物（２）…… 247

図25 井戸１出土遺物 …… 249
図26 溝１出土遺物（１）…… 251
図27 溝１出土遺物（２）…… 252
図28 溝１出土遺物（３）…… 253
図29 溝１出土遺物（４）…… 254
図30 ３面構成出土遺物 …… 255
図31 古代以前の遺物 …… 255
図32 Ⅱ群かわらけ出土地点 …… 267
図33 Ⅱ群かわらけ …… 269

表　目　次

表１　周辺の遺跡 …… 207
表２　１面柱穴表 …… 222
表３　１面礎板、礎石表 …… 222
表４　２面柱穴表 …… 228
表５　２小穴表 …… 229
表６　３面柱穴表 …… 234
表７　３面小穴表 …… 234
表８　中世以前柱穴表 …… 236
表９　中世以前小穴表 …… 236
表10 遺物観察表 …… 256
表11 中世遺物集計表 …… 271
表12 溝１上層・木器溜まり出土遺物 …… 272

図　版　目　次

図版１ …… 273
　A　Ⅱ区１面（南から）
　B　落ち込み４、溝２（東から）
　C　落ち込み４、溝３（東から）
図版２ …… 274
　A　Ⅱ区２面（東から）
　B　柱穴列２（北から）
　C　柱穴列２・P31（北から）
図版３ …… 275
　A　かわらけ溜まり（西から）
　B　Ⅱ区３面（北から）
　C　井戸１（東から）
図版４ …… 276
　A　木器溜まり（南から）
　B　木器溜まり・溝１（北から）
　C　Ⅰ区溝１（南から）
　D　Ⅱ区溝１（北から）
図版５ …… 277
　A　Ⅰ区落ち込み１・２（南から）
　B　Ⅱ区落ち込み１（北から）
　C　Ⅱ区最終トレンチ（南から）
図版６ …… 278
　A　Ⅰ区東壁土層（西から）
　B　Ⅰ区北壁土層（南から）
　C　Ⅱ区東壁土層（西から）
　D　Ⅱ区南壁土層（北から）
図版７　出土遺物（１）…… 279
図版８　出土遺物（２）…… 280
図版９　出土遺物（３）…… 281
図版10　出土遺物（４）…… 282
図版11　出土遺物（５）…… 283
図版12　出土遺物（６）…… 284

第一章　本調査地点の位置と歴史的環境

第１節　本調査地の立地

本調査地点は鎌倉市山之内字瑞鹿山398番地に所在する。JR北鎌倉駅西側を通る主要地方道横浜・鎌倉線を鎌倉方面に200mほど進んだ道路沿いに位置し、JR横須賀線を挟んだ対面が鎌倉五山第2位の「瑞鹿山円覚興聖禅寺」となる。また、道路を挟んだ向かい側が東慶寺山門にあたる地点である。

本遺跡地が存在する鎌倉市の地形は大きく３つに分かれ、滑川、柏尾川沿いの沖積地、市内の大部分を占める山地、大船北部の関谷方面に広がる関東ロームなどの洪積層によって作られている洪積台地である。山稜基盤は新世代、第3紀、新第3紀に形成されたもので、建長寺あたりが三浦層群逗子シルト岩層、それ以西からは上総層群となり北鎌倉駅西側の素掘りトンネル付近までが深沢凝灰質粗粒砂岩層、その西側からは野島凝灰質砂岩シルト岩層となる。本遺跡地の地形は市内の大部分を占めるといわれる山地であり、地域内には瑞鹿山、巨福山、金宝山等の標高90 ～ 120mの小山が座する。その山々が複雑に入り込んでの大小の谷戸（明月谷、西瓜ヶ谷、東瓜ヶ谷等）を形成し、丘陵頂部から湧出した小河川（明月川、瓜谷川、山之内川）が地形に沿って低地に流れ込み山ノ内の中央部を貫通する小袋谷川に合流する。その流れは鎌倉市北西部を流れる柏尾川へと続く。

本調査地点が所在する山ノ内は現在の鎌倉市の中央部やや北東寄りに位置し、東側は雪ノ下、西御門、南側は扇ガ谷、西側は山崎、台、北側は大船、今泉と７地域と行政の境界を接する。奈良時代には相模国鎌倉郡尺度郷といわれた一角に所在する。尺度郷の初見は「正倉院文書」天平７年の相模国封戸租交易帳である。また、1985年、鎌倉市「今小路西遺跡（御成小学校内）」から天平５年銘の木簡が出土しており鎌倉に関する最古の文書であるといわれている。山内荘は首藤資清の曾孫俊道が開発者であるといわれ、頼朝時代は八条院の本所となるが、実際は頼朝が本所、首藤氏が下司とはり実権を握っていたといわれている。範囲は現在の山ノ内、大船付近から横浜市戸塚区、栄区の一帯、及び藤沢市俣野の広範囲に亘った地域であったと想定されている。

第２節　歴史概観

源氏姓は皇族賜姓の１つである。嵯峨天皇が信以下の皇子女に源姓を与えて臣籍に下したのが初例であり、以後、皇室経済困窮の打開と皇族の藩屏構築をめざして仁明、文徳、清和、陽成、光孝、宇多、醍醐、村上、花山、三条の各天皇の皇子女に源氏姓が与えられ、夫々の始祖の天皇の名前を冠した源氏諸流が誕生する。一部大臣を輩出し権勢を誇った流派もあったが、大多数は下級官人、或いは途絶する。そのなかで武士化して発展していった、その最大勢力が清和源氏で平安中、後期に勢力範囲を全国に拡大していった。その流れを汲む源頼信が甲斐守在任中の長元4年（1031年）、子・頼義と共に平忠常の乱を鎮圧し、その名声により東国の源氏勢力拡大の契機をつくったといわれている。また、頼義は相模国司歴任時に東国武士の組織化を進め東国に地盤を築いてゆく。伊豆を根拠地としていた上総介平直方はこれを見込んで頼義を婿とし、頼義は直方の領地である鎌倉の地で義家を授かり以後、鎌倉が源家相伝の地となったと伝えられる。頼義が康平6年（1063）8月、由比郷に岩清水八幡宮を勧請したのもこのような背景があったからであろうと推測されている。頼義、子・義家は奥州前9年、後3年の役と2つの戦いを遂行し、「天下第１武勇の家」の名声を得て中央政界の武力権門の代表者とされるようになるが、保元、平治の乱後、一時中央舞台から姿を消す。義家から数えて4代後の源頼朝が鎌倉に武士政権である鎌倉幕府を開き、武士による政権都市を築いた。鎌倉幕府は鎌倉九代の将軍の居所で、大倉御所、宇

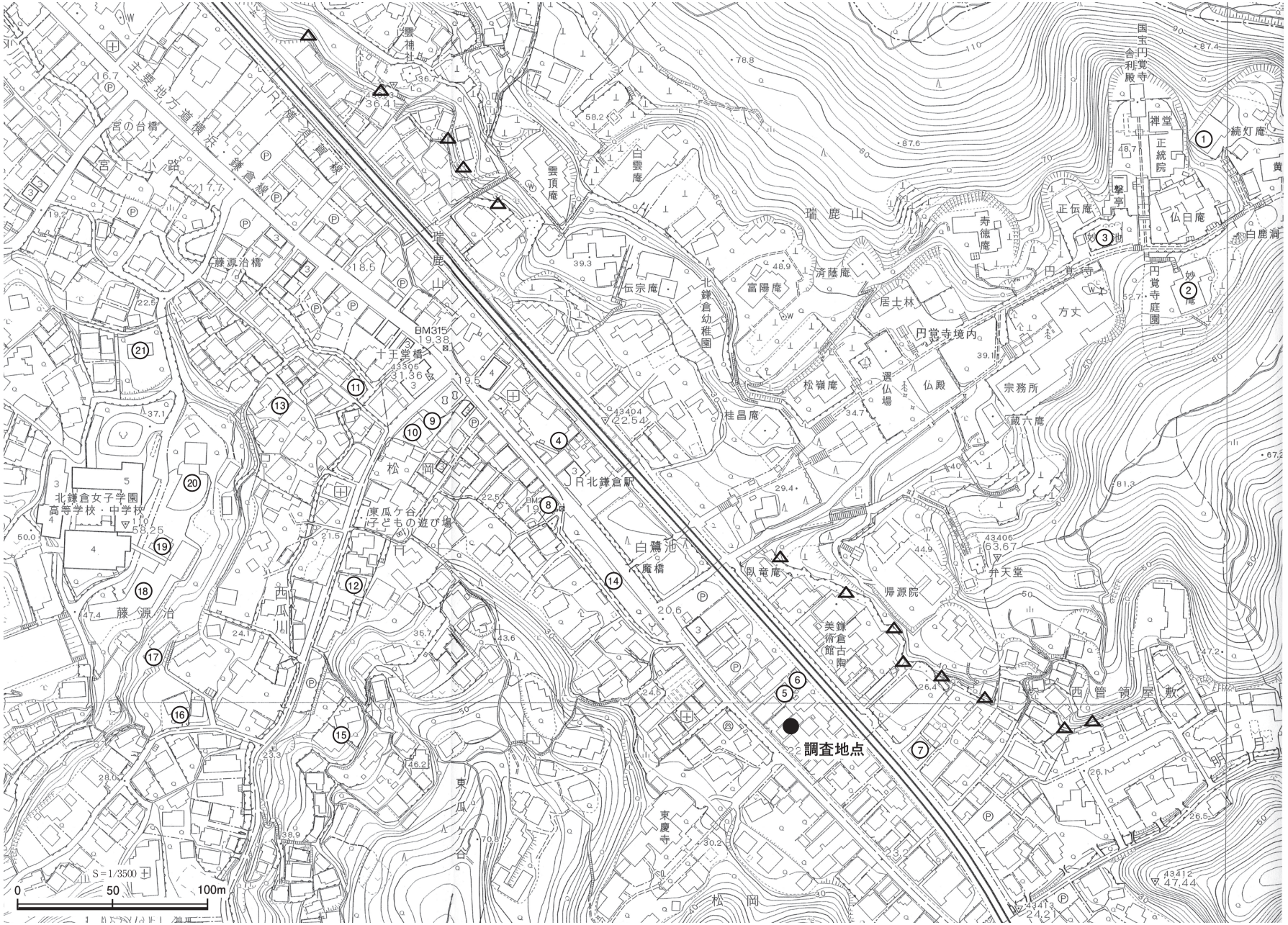

調査地点
北鎌倉駅
JR横須賀線
県道鎌倉逗子線
瑞鹿山
白鷺池
北鎌倉女子学園高等学校・中学校
東瓜ケ谷子どもの遊び場
藤源治橋
十王堂橋
宮の台橋
宮下小路
雲頂庵
白雲庵
伝宗庵
北鎌倉幼稚園
富陽庵
済蔭庵
寿徳庵
居士林
円覚寺境内
円覚寺
円覚寺庭園
正伝庵
仏日庵
続灯庵
白鹿洞
国宝円覚寺舎利殿
禅堂
正統院
撃亭
方丈
宗務所
仏殿
選仏場
松嶺庵
桂昌庵
蔵六庵
臥竜庵
帰源院
弁天堂
美術館
鎌倉古陶
西管領屋敷
東慶寺
雲神社
S=1/3500
0
50
100m

図１　周辺の遺跡

表１　周辺の遺跡

	遺跡名	調査地点	報告書（調査報告収録文献）
1	円覚寺続燈庵	山ノ内字端鹿山 431 番	1990「円覚寺続燈庵」 続燈庵境内遺跡発掘調査団
2	円覚寺如意庵	山ノ内字端鹿山 425 番	1990「如意庵　円覚寺境内如意庵遺跡発掘調査報告書」 円覚寺如意庵遺跡発掘調査団
3	円覚寺境内（明香池）	山ノ内字端鹿山 438 番	1983「円覚寺境内（明香池）」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ　昭和46 年度～52 年度』 鎌倉市教育委員会
4	円覚寺旧境内遺跡 (No.434)	山ノ内字端鹿山 509 番 1	1998『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14　平成 9 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
5		山ノ内字端鹿山 393 番 3	2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23　平成 18 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
6		山ノ内字端鹿山 393 番	2010『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26　平成 21 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
7		山ノ内字西管領屋敷 377 番 1	2010『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26　平成 21 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
8	円覚寺門前遺跡 (No.287)	山ノ内字松岡 1344 番2005	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21　平成 16 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
9		山ノ内字松岡 1337 番 1・6	2008『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 24　平成 19 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
10		山ノ内字松岡 1377 番 6	2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23　平成 18 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
11		山ノ内藤源治 951 番 2	1998『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14　平成 9 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
12		山ノ内東瓜ヶ谷 1229 番 1・5	2000『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16　平成 11 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
13		山ノ内字藤源治 947 番 8	2010『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26　平成 21 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
14	円覚寺門前馬道土墨地点		2001～2002 年調査・未報告
15	西瓜ヶ谷遺跡 (No.213)	山ノ内東瓜ヶ谷 1294 番 4・5	2006『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 22　平成 17 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
16		山ノ内藤源治 930 番 5 他	2002 年調査・未報告
17		山ノ内藤源治 928 番 1 他	1991 年調査・未報告
18	台山藤源治遺跡 (No.29) （第 1 次調査）	台字藤源治 914 番	1985「台山藤源治遺跡」台山藤源治遺跡発掘調査団
19	台山藤源治遺跡 （第 3 次調査）		1993「台山藤源治遺跡」台山藤源治遺跡発掘調査団
20	台山藤源治遺跡 （第 2 次調査）		1996「台山藤源治遺跡」台山藤源治遺跡発掘調査団
21	台山遺跡		2002「台山遺跡発掘調査報告書 」 有限会社（現株式） 博通
△	過去に調査が行われているやぐらが所在する地点		

津宮辻子御所、若宮大路御所と３箇所に移居しながら140年余り存続した。

鎌倉幕府が滅び南北朝、室町時代には関東を控制するため鎌倉府がおかれた。公方足利基氏は補佐として管領職をおいたが、その管領職の屋敷が本遺跡地内にあったといわれてる。現在も本調査地点内に管領屋敷の地名が残る。また、他に扇ガ谷、犬懸ヶ谷、宅間ヶ谷の３箇所にも管領屋敷があったと推測されている。また、五山制度により大寺院は幕府から庇護され衰退の様相はない。また、戦国時代に突入し、鎌倉は小田原北条氏の支配になる。北条長氏は玉縄に永正９年（1512）、相模国東部一帯の押さえとして玉縄城を築城した。玉縄城は現在の山ノ内地域から北西方向3000ｍに位置する。北条氏支配下、氏綱は永正17年（1520）、氏康は天文16年（1547）と２回の検地を実施し、禄高制による年貢、さらに棟別銭を課している。また、氏政が天正２年（1574）の検地で棟別銭の外、段銭も課したとある。北条氏は天文元～９年（1532 ～ 40）、鶴岡八幡宮再建を実施し、各地域から多数の職人を呼び寄せてこれに

当たらせたといわれる。小田原衆所領役帳永禄２年(1559)によれば相当数の職人の所領が書かれており、職人が定着し、鎌倉の様相が一変した一因になると推測されている。また、戦国期には鎌倉郡に代わって小坂郡との名称となる。天正18年（1580)、小田原北条氏の旧領を与えられた徳川家康は翌年、北条氏を踏襲した検地を実施し、禄高制、棟別銭、段銭を課した。また、建長寺、円覚寺、浄智寺、東慶寺、光照寺の５寺に領地を寄付したが、寺社領も検地の対象となっていたため税を徴収されている。

江戸幕府は鶴岡八幡宮、光明寺、英勝寺には保護を与えたが、ほかの寺社は顧みられず衰退の一途を辿ってゆく。一方、江戸時代のはやりとして、古都の寺社参詣、名所遊覧が盛んになり鎌倉もその対象とはなってはいたものの、その当時の鎌倉は辺鄙な農村という風情であったといわれている。戦国期に引き続き家康の時代も鎌倉は「小坂郡鎌倉の内」といわれ、鎌倉時代には四境の外であった極楽寺と山ノ内もその範囲内になっている。それ以外は東郡と呼ばれていた。家光の慶安の頃より鎌倉郡の名前が復活し、小坂郡の名前が消える。

幕末頃、外国船の接近が多くなり三浦半島沿岸の警備強化対策が行われ、この海防策のために鎌倉地域は文化７年～文政３年（1810 ～ 1820）は会津藩、文政３年～弘化４年（1820 ～ 1847）は川越藩、文政３年～嘉永６年（1847 ～ 1853）は川越藩・彦根藩、嘉永６年～安政５年（1853 ～ 1858）萩藩の預地となり外国船到来の際の人夫、人足等に徴発された。文久３年（1863)、佐倉候堀田鴻之丞、慶応３年（1867)、代官江川太郎左衛門、明治元年、韮山県に属し、「同年12月本年本県の所轄となる、建長寺、円覚寺、浄智寺、東慶寺、光照寺の領地は､「明治４年にいたりて上知し本県に属せり」とある。

第３節　遺跡地の歴史的環境（図２）

本遺跡地が所在する山ノ内には古跡、旧跡、寺院等が多く存在する。奥州後３年の役の際の義家の従者に藤原資道という名前がある。資道は山内首藤７代目で、その孫の俊道が義朝の家人として山之内荘に家居したといわれている。現在の長寿寺南方の白黒小路あたりに比定される。白黒小路とは首藤家の徽号とされる白一文字、黒一文字から由来されたと言われている。義朝は現在の寿福寺に邸宅を構えていたといわれており首藤家とは至近距離にある。また、現在、明月院の南西方向の地域に管領屋敷という地名が残る。『相模国鎌倉郡村誌』には「管領屋敷は明月院の馬場先東隣の畠なり」とあり、正平18年（貞治２年、1363年）上杉憲顕が足利基氏の執事（関東管領）となり、家居した場所がこの地域であると想定される。また､管領屋敷向かいの谷戸は尾藤ガ谷といわれ､北条泰時の家令の尾藤影綱の屋敷があったといわれている。また､「亀ガ谷の傍らに足利尊氏の屋敷跡があった」とある。現在、亀が谷坂の入口に長寿寺という寺があり､長寿寺は現在建長寺の塔頭となっているが開創年暦は不明である。延文の頃、足利基氏が父尊氏追福のためにこれを修営したこと、長寿寺境内の岩窟祠内には尊氏の遺髪を祀った五輪塔があること、尊氏を「長寿寺殿妙義仁山大居士」というなど、長寿寺とは非常に関係が深いことから推定して屋敷址はおそらくこの近辺であったと想定されている。

本調査地点西側を走る主要地方道横浜・鎌倉線は鎌倉街道といわれ、また、山ノ内を通るあたりを特に山ノ内道と呼ぶ。山ノ内道は山ノ内から巨福呂坂を通って鎌倉八幡宮前に至る道で、鎌倉への防御として北條氏関連のもので固められる。巨福呂坂の道は仁治元年（1240)、10月、北条泰時が被官の安東藤内左衛尉を奉行として山ノ内道をつくらせたとあり、それ以前の道は亀が谷坂を越えて武蔵大路に合流している。山ノ内荘は健保１年（1213）の和田義盛の乱の行賞として義時に与えられ、以後北条氏との関係が密接となり、泰時邸、時頼邸、時宗邸があり、また、北條氏関係の大寺院も建立される。

鎌倉八幡宮より巨福呂坂を越え、山ノ内道を300ｍ北方向に進むと北側に臨済宗建長寺派総本山巨福

図２　円覚寺境内絵図

山建長興国禅寺がある。この地は地獄谷といわれ、当寺は建長5年（1253）北条時頼が蘭渓道隆を開山として創建したものである。創建以前は心平寺が在ったといわれている。延慶元年（1308）12月太政官符宣降し勅願寺とし、至徳３年（1386）関東五山の位次が定められ五山の第1位となる。往時は塔頭49個院あったといわれるが、数回に及ぶ大火を受け、現在は外門、山門（県指定文化財）、仏殿（国指定重要文化財）、法堂（県指定文化財）、唐門（国指定重要文化財）、方丈、宝蔵、鐘楼などからなる。

建長寺より北西700ｍの明月谷には明月院がある。臨済宗建長寺派である。この地は北条時頼が私邸の傍らに建立した最明寺の旧址であるともいわれている。また、文永５、６年（1268、69）頃、北条時宗が蘭渓道隆を開山とし創建した福源山禅興寺があったとされる。明月院はその塔頭であるといわれる。

明月院の北西方向３00ｍに臨済宗円覚寺派総本山瑞鹿山円覚興聖禅寺がある。弘安5年（1282）、北

条時宗が仏光禅師（無学祖元）を開山として創建した。延慶元年（1308）12月太政官符宣降し勅願の道場とし、至徳３年（1386）関東五山の位次が定められ五山の第２位となる。応安７年（1374）11月23日火災を受け伽藍が全焼し、義堂周信、此山妙在、関東公方足利満氏、鎌倉府管轄下諸国の棟別銭等で永和4年（1378）仏殿が完成した。足利義満の書いた梁牌銘が伝わる。現在は総門、山門、仏殿、方丈、庫裏、書院、選仏場、鐘楼などからなる。

また、山ノ内道南側の金宝山内に臨済宗円覚寺派金峰山浄智寺がある。弘安４年（1281）、北条宗政没後、菩提を弔うために夫人、子師時が創建した。開山兀庵普寧、請待開山大休正念、準開山南州宏海である。正安元年（1299）、北条貞時が五山に列し、至徳３年（1386）関東五山の位次が定められ、五山の第４位となる。明治以降、円覚寺境外塔頭的要素を持つ。往時の塔頭等は江戸末期にはすべて廃絶し、現在境内には総門、山門、仏殿、庫裏、鐘楼などが建ち、また、鎌倉十井の「甘露ノ井」がある。

浄智寺より北方300ｍ松岡に「縁切り寺」で知られている円覚寺派東慶寺がある。円覚寺の対面に建つ。「松岡山東慶総持禅寺」と号し、創立年暦は不詳であるが、頼朝時代、その叔母が起居していたとの伝承がある。弘安8年（1283）、北条時宗の死去後、時宗夫人が潮音院覚山尼と称して開山、子の貞時が開基と伝える。その後、後醍醐天皇の皇女が尼となり用堂尼と称して当寺に住み以来、松岡御所と称せられたという。また、江戸時代、徳川家康が豊臣秀頼遺子を当寺に置き尼僧（20世　天秀法泰尼）として住持させ、以後、住持は黄連川家から迎えられたが22世玉淵法盤尼後、無住となり、塔頭の１つである蔭涼軒主が代行して住職している。寛永11年（1634）、天樹院（徳川秀忠娘、豊臣秀頼室）を檀那とし仏殿が建立された。現在は横浜市三渓園に移築されている。「縁切寺」「駆込寺」といわれるが、当寺に現存する最古の縁切状は元文３年（1738）である。

本調査地点は円覚寺旧境内遺跡といわれ、その範囲は貞治２年（1363）４月の「円覚寺文書目録」にある『円覚寺境内絵図』（一帖　寺山并門前新御寄進絵図）に当ると言われている（図2）。この絵図は円覚寺境内を朱線で表し、絵図の四方には足利直義の執事であった上杉重憲の花押が描かれたもので、元亨３年（1323）～建武２年（1335）に描かれたものであるといわれている。絵図には総門の南前面に白鷺池があり、その東側に新寄進と書かれた2区域、絵図左下に「薩摩掃部大夫入道跡」「飯嶋孫次郎入道跡」と書かれている。絵図に調査地点を合わせてみると本調査地は寄進地と書かれたその2区域の東方の一角に所在している。

また、山之内円覚寺門前町図（黄梅院蔵）がある。作成年は不詳であるが、貞享2年（1685）刊『鎌倉志』に「此比まで十王堂有が、今亡たり」と書かれている。また、絵図中の浄智寺境内に吉川惟足の屋敷が注記されているが、彼が浄智寺に隠居したのは慶安４年（1651）である。以上からこの絵図の作成年代は1651年～ 1685年の間と想定され、江戸時代前期の様相を理解できる良好な資料となっている。絵図は上を南として中央に山ノ内道を描き、「下馬之内五十二間」を真ん中に、その下に馬道を弓状に描き、道の両側に人名が隙間なく記載されている。そこに黒線でくっきりと円覚寺の寺域の範囲を示しており、この絵図から想定すると本調査地点は境内に位置する。その地点には久兵衛、与三右衛門、拾右衛門、長三郎等の名前がみられ、境内前面の土地を細分して使用していた様相が伺える。借地として貸していたのではないだろうか。また、絵図で東慶寺対面、「与三右衛門」と記載された場所があるが、その場所に現在も住んでいる子孫の方から江戸時代は飛脚を生業としていたと伺った。明治22年（1889）２月国鉄横須賀線が開通し、その際白鷺池の北西側に線路を通し境内を分断した。本遺跡地は現在この線路の南東側となっている。昭和2年に「北鎌倉駅」が建てられ以後、この近辺の宅地化が始まった。

第４節　本調査地点周辺の遺跡（図１、表１）

本調査地周辺では過去に発掘調査を実施した遺跡が点在する。周辺の各遺跡の位置と所在地は図1、及び表1の通りである。ここでは円覚寺旧境内遺跡内の調査について概略を述べる。

①、②地点ともに円覚寺の塔頭である。①地点では調査地点が円覚寺という大規模寺院の塔頭という利点から中世から現代まで各時期の遺構、遺物が確認され連綿と宗教活動を引き継いできた様相が確認できた。また、鎌倉では検出例の少ない「地下式坑」が検出された。貯蔵穴の用途等を想定しているが実際は不明な点が多いといったところが実態である。②地点では19世紀中頃と想定される堂址が検出された。③地点の調査は円覚寺境内妙香池の改修工事と平行して行った確認調査である。過去に５～６回の改修工事が実施され、少なくとも2回は江戸期のものであることが確認された。また、池の形状が改修して方形になったことは確認出来たが、造成時の様相は解明されないままである。④地点では円覚寺の総門外の建物と創建前後の遺構群が検出された。創建前は水田、その後は円覚寺に関わる雑舎が建てられていたのではないかと、遺構群の様相、または文献、絵図等より推察している。⑤地点では13世紀後葉～14世紀前半に想定される遺構群が確認され、調査地点が耕作地から門前の町屋域に変化して行く様相であると推定している。地点⑥では13世紀後半～14世紀前半とされる3期の生活面で、山ノ内道と軸方向を同じくする地割りがあったと推測されている。地点⑦では13世紀第4四半期～15世紀代とされる4時期の生活面で継続的に、現在の山ノ内道と近い軸方向を持つ遺構群が展開する。14世紀前半とされる第2面では規格性の高い木組み構造を残した箱溝や、道路と考えられる硬化面が検出されている。

また、周辺域のやぐらでは帰源院下やぐら群、円覚寺境内西やぐら群、西管領屋敷やぐら群、西管領屋敷南やぐら群などで調査が行なわれている。

参考文献

鎌倉市史編纂委員会　1959年「鎌倉市史総説編」
鎌倉市　鎌倉市史編纂委員会　1959年「鎌倉市史考古編」　鎌倉市
鎌倉市教育委員会　1998年「鎌倉の自然」　鎌倉市教育委員会
関幸彦　2006年　戦争の日本史５「東北の戦争と奥州合戦」吉川弘文館
下中邦彦　1984年「神奈川県の地名」平凡社
神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会
1999年「神奈川県皇国地誌相模国鎌倉郡村誌」神奈川県図書館協会
三浦勝男　1992年　鎌倉国宝館図録第15集「鎌倉の古絵図１」鎌倉市教育委員会　鎌倉国宝館
日本史広辞典編集委員会　1997年「日本史広辞典」山川出版社
今小路西遺跡発掘調査団　1990年「今小路西遺跡」鎌倉市教育委員会

第二章　調査の概要

第１節　調査の経過

調査は廃土置場を確保するため、調査区を北東半（Ⅰ区）と南西半（Ⅱ区）に分割し、2回に分けて実施した。調査実施日はⅠ区が2007年2月6日～2月23日、Ⅱ区が2007年2月26日～3月30日である。確認調査の結果に基づき近現代の堆積土（現地表下40～60cmまで）は重機による掘削を行ない除去、以下は人力による作業とした。その結果、中世の遺構面を3枚確認し、井戸、溝、板壁構造の竪穴（落ち込み4)、建物・列を構成する柱穴、土坑、ピット等を検出した。中世期の地形層下では、河川近くの堆積とみられる土層を確認し、性格不明の落ち込みが検出された他、最終の深堀トレンチでは小袋谷川の氾濫により運ばれたと思われる流木が発見されている。出土遺物は整理箱6箱である。
以下に作業経過を記した。

2007年2月　6日　　Ⅰ区調査開始。重機による表土掘削後、人力による遺構確認作業。
2月　6日　　鎌倉市3級基準点（43404）より調査区内に海抜高を移動。
2月　7日　　調査グリッドの設定及び測量基準杭の設置。遺構掘削開始。
2月13日　　中世面の全景写真撮影と平面図の作成。
2月15日　　中世地形面下の調査開始。
2月16日　　鎌倉市4級基準点より国土座標の移動。
2月21日　　最終確認面の全景写真撮影と平面図の作成。
2月22日　　調査区堆積土層の記録作業。
2月23日　　Ⅰ区調査終了。
2月26日　　Ⅰ区の埋め戻し、及びⅡ区の表土掘削。
2月27日　　Ⅱ区の遺構調査開始。
3月　1日　　1面（土坑・ピット等完堀時）の全景写真撮影と平面図の作成。
3月　5日　　1面（溝・落ち込み等完堀時）の全景写真撮影と平面図の作成。
3月　6日　　2面調査開始。
3月　8日　　2面の全景写真撮影と平面図の作成。2面構成土の掘下げ。
3月　9日　　3面検出。遺構調査開始。
3月14日　　3面の全景写真撮影と平面図の作成。
3月15日　　3面下の調査。写真、図面等記録作業。
3月18日　　中世地形面下の調査開始。
3月26日　　最終確認面の写真、図面等記録作業。深堀トレンチの設定・掘削。
3月28日　　調査区堆積土層の記録作業。
3月30日　　調査終了。機材撤収。

第２節　グリッド設定・国土座標との合成（図３）

測量は任意の調査グリッドを設定して行った。調査地内の北東隅に基準点（A1グリッド）を置き、南側・西側に向かい4mごとに数値を増すこととした。グリッドの南北軸にはアルファベット、東西軸には算用数字をあてている。国土座標との関係は調査グリッドのB2（合成①）が国土座標のX＝－73652.6947，Y＝－26068.5795と、B軸上でB3より南に2.773ｍの地点（合成②）が国土座標のX＝－73657.3732，Y＝－26073.4736と一致し、調査グリッドの南北軸（アルファベット）は国土座標のY軸より43°41′19″東へ振れている。国土座標値は、鎌倉市4級基準点（標識番号D 63 Q 055・D 63 Q 056）を使用して、調査グリッド上に移動した。

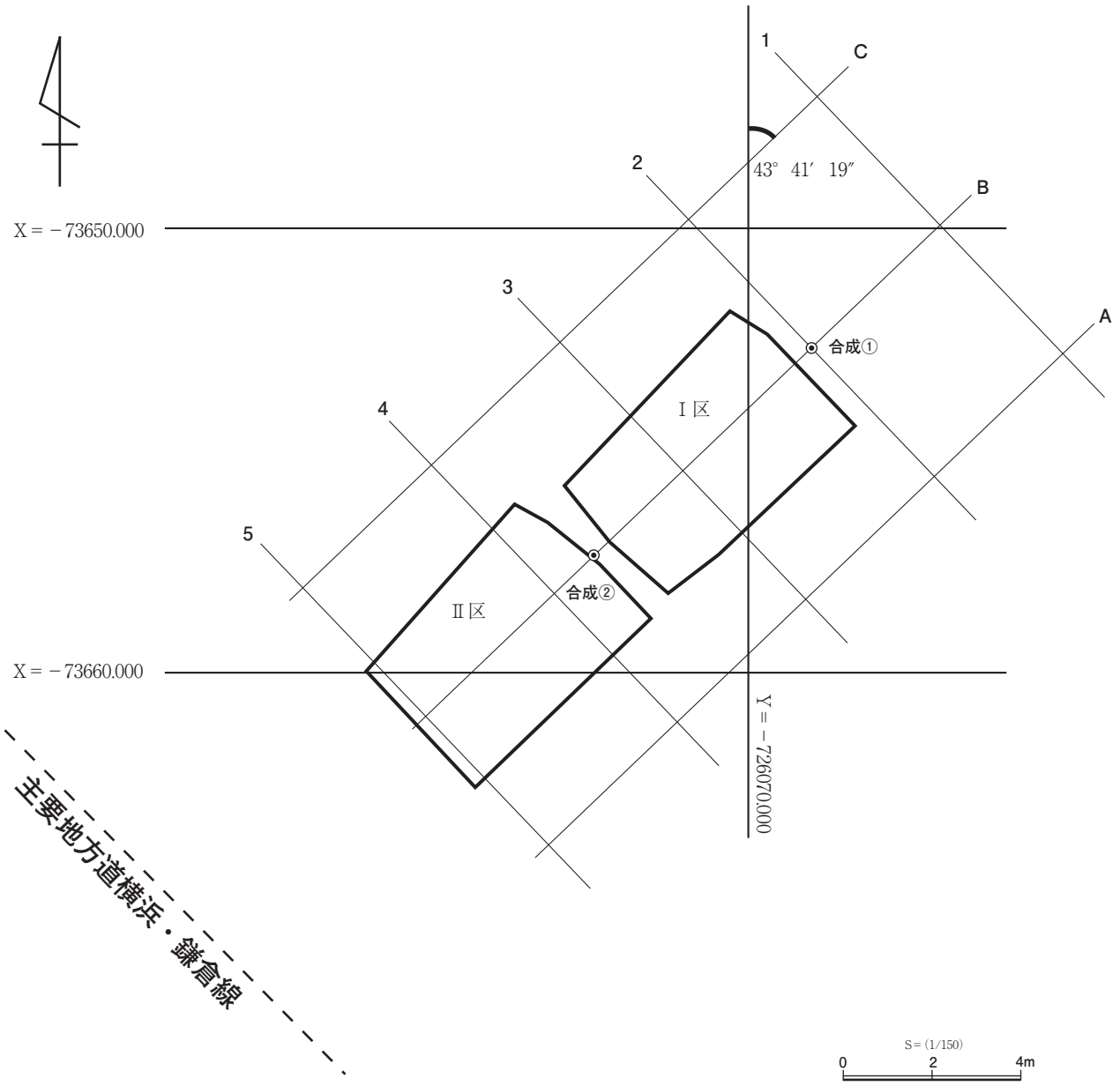


図３　グリッド設定図

第３節　調査地の堆積土層（図４）

堆積土層はⅠ区・Ⅱ区を分けて提示している。Ⅰ区土層はアルファベットを、Ⅱ区については算用数字を付した。遺構覆土はⅠ区①～②、Ⅱ区①～⑲としている。

A層・0層は現代の盛り土層である。1層は中世以降の遺物包含層としているが近世まで下る層かもしれない。B層が対応するものと思われる。2層は中世の遺物を混じえており、1面より新しい時期の生活面を構成する地形層と思われる。C層・3層は第1面の構成土である。第2面はE層、6～11層により構成される。Ⅱ区は3面井戸1（⑮）廃絶後の窪地に土丹塊、鎌倉石塊を投げ込んで根固めし（10・11層）、東側は井戸1根固めに連続して土丹を敷き詰めて（9層）生活面としている。北西側は攪乱の影響などで面の把握に混乱があり判然としないが、井戸1根固めに連続する土丹・鎌倉石塊が稀薄となった部分へ6～8層を盛り土し整地したものと思われる。第3面はG層、21・25層上が生活面と考えられる。それ以前の堆積土を見ると、Ⅰ区はG層以下落ち込み2覆土（I～M層）を含めて自然堆積層と考えて矛盾しない。Ⅱ区も3面を自然堆積層を基盤とする生活面と考えているが、1部土層に混乱が見られるため、説明を加える。3面は21・25層が基盤となる他、溝4覆土（13～24層・25'層・26層）上層の14・15層が3面を整地するために貼付けられた土と思われる。溝4については一応、3面下の遺構として扱っているが、覆土の堆積状況や掘り込み面に整合性が得られず、プランも曖昧で、3面検出の溝1と直交関係にあるという意外に人為的な遺構と考えられる材料が見つからない。また、西壁土層の溝4北側の堆積（27～31層）は複数のピットが重複するように分層され不自然な堆積状況を示しているが、層中にシミ状、ブロック状部分も見受けられ、その傾向は溝4覆土下層（16～20層）にまで及んでいる。これら16～24・26～31層の状況は、異なる土塊が乱雑に投げ込まれた人為的な造成ともとれるため断定はできないものの、自然的な要因による不整合と考えている。溝4については自然的な要因で生じてしまった軟弱な窪地部分であったかもしれず、その上を生活面とする為に粘土（14・15層）を貼付け補強したものと思われる。32層以下は落ち込み1の覆土(31～34層)を含めて自然堆積層と考えて矛盾しない。35～38層は黒茶～暗茶色の粘質土で安定した地盤と言える。39層以下は木片を含みしまりに欠けるシルト層が主体となり、小袋谷川の影響を強く受ける堆積土層と思われる。43層中には小袋谷川と平行して横たわる流木が存在している。

なお、本調査地の堆積土のうち、中世第2面から3面頃の何れかの土に変わった質のものが含まれている。写真図版でわかるように、その時期の層から出土したかわらけの多くに黒い斑状のシミが見られる。灯明皿などに付着している油煙に似た質のものに見えるのだが、使用時の痕跡ではなく、廃棄後に土中でなんらの成分が浸透したもののように思われる。考えられる理由としては（油煙に近い質の成分であるならば）、中世期の造成土中に、火事場などから排出されたカーボンが多く含まれていた。あるいは、近隣でカーボンを多く排出するような作業が行われていた。などあげられる。現地調査では別段特記するような土質は見受けられなかったため、細かく土層を特定することはできない。

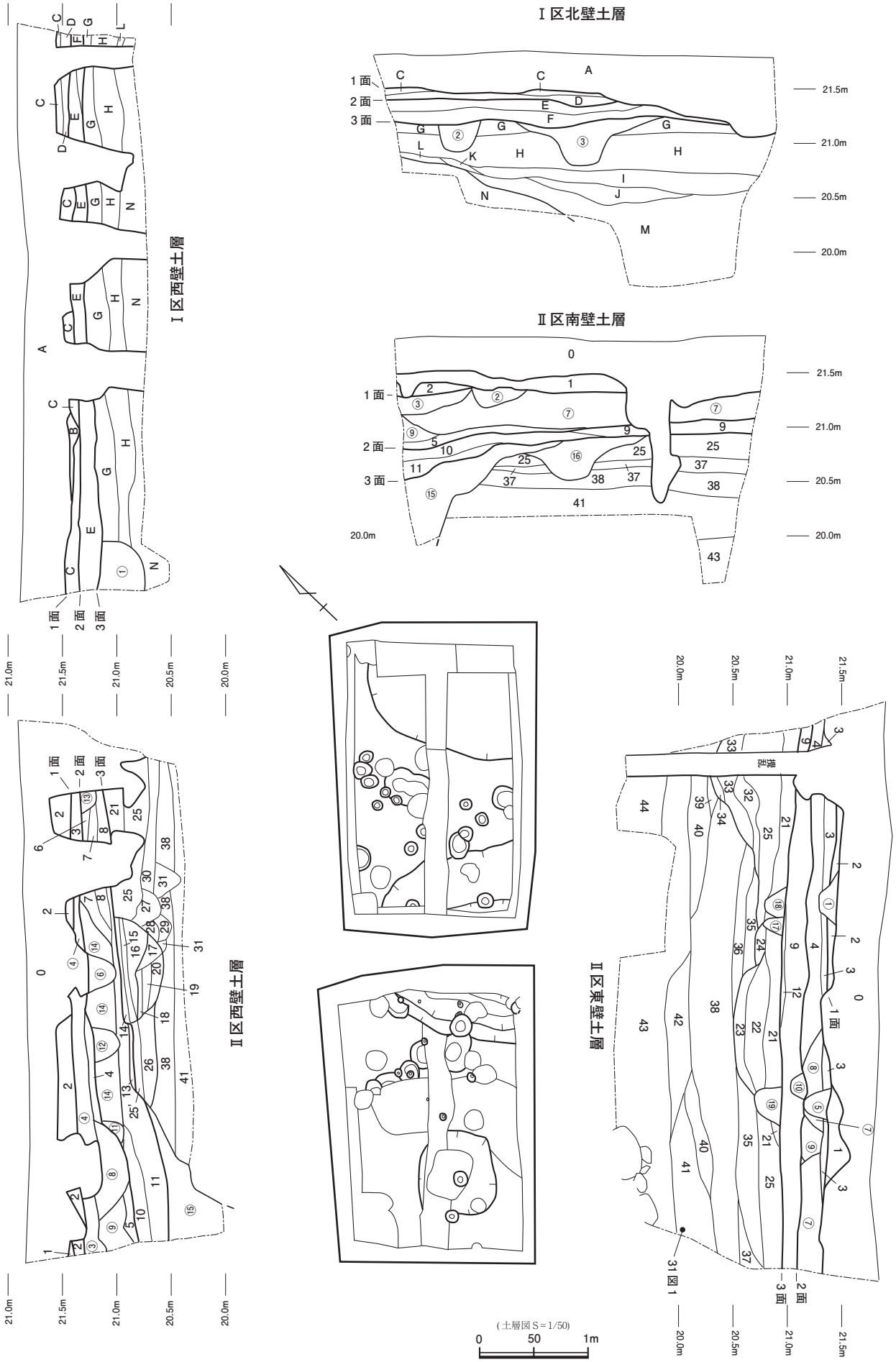

Ⅰ区北壁土層
Ⅱ区南壁土層
Ⅰ区西壁土層
Ⅱ区西壁土層
Ⅱ区東壁土層
1面
2面
3面
21.5m
21.0m
20.5m
20.0m
撹乱
31図1
(土層図S＝1/50)
0
50
1m

図４　調査地の堆積土層

Ⅰ区　土層説明

A層	表土・攪乱層	現代の盛り土。
B層	茶色砂質土層	かわらけ細片・木片を多く混入する。
C層	灰黄色土層	灰黄色石粒と茶色土を混合する。かわらけ片を少量含む。ややしまる。(1面構成土)
D層	炭層＋かわらけ細片・木片を多く含む。(2面上包含層) 茶褐色粘質土層	
E層	茶色粘質土層	5～10㎝大の鎌倉石片を混入する。粘性あり。良くしまる。(2面構成土)
F層	暗茶褐色粘質土層	鎌倉石粒子・かわらけ細片・炭化物を多く混入する。粘性弱い。しまりなし。(3面上包含層)
G層	暗茶褐色粘質土層	粘性が非常に強く、良くしまる。(3面構成土)
H層	黒茶褐色粘質土層	層中に薄茶色部分が点在する腐食土層。粘性あり。軟質。
I層	黒茶色粘質土層	緑青粗砂を混入する。炭化物・少量の木片を含む。しまりなし。
J層	黒茶色粘質土層	8層より木片を多く含み、炭化物の粒子が大きい。しまりなし。
K層	黒茶色粘質土層	緑青粗砂を多く混入する。炭化物を少量含む。ややしまる。
L層	黒茶色粘質土層	緑青粗砂を混入する。
M層	茶褐色粘質土層	木片を多く含む腐植土層。軟質でしまりに欠ける。
N層	緑灰色シルト層	混入物を含まない。しまりややあり。

① 3面ピット（P103）
② 3面ピット（P102）

Ⅱ区　土層説明

0層	表土・攪乱層	現代の盛り土。
1層	茶色粘質土層	鎌倉石塊・土丹粒子・かわらけ片・炭化物を混入する。(中世以降遺物包含層)
2層	暗灰褐色粘土層	鎌倉石粉砕片を多く混入する。しまりあり。(中世遺物包含層)
3層	暗灰褐色粘土層	鎌倉石粉砕片を多く混入する。しまり強い。(1面構成土)
4層	茶灰色粘質土層	土丹粒子・炭化物を混入する。粘性あり。しまりなし。(2面上包含層)
5層	暗茶色粘質土層	黄色砂を混入する。しまりなし。(2面上包含層)
6層	黒茶色粘質土層	木片・炭化物を含む。(2面構成土)
7層	黒茶色粘質土層	かわらけを多く含む。木片少量混入。しまりなし。(2面構成土)
8層	黒茶色粘質土層	かわらけ・炭化物を多く含む。(2面構成土)
9層	土丹地形層	南側は茶色シルトを混入し、しまりがやや弱い。(2面構成土)
10層	鎌倉石塊層	井戸1廃絶後の窪地埋め土。(2面構成土)
11層	黒褐色粘質土層	大型土丹・鎌倉石塊を主体とする井戸1廃絶後の窪地埋め土。(2面構成土)
12層		かわらけを多く含む。(3面上包含層)
13層	茶褐色粘土層	木片を含む。粘性あり。(溝4)
14層	灰茶色粘土層	混入物を含まない。粘性強い。(溝4)
15層	黒茶色粘質土層	粘性強い。良くしまる。(溝4)
16層	黒茶色粘質土層	炭化物を少量含む。しまりなし。(溝4)
17層	茶黒色粘質土層	炭化物・白色粒子を含む。(溝4)
18層	黒茶色粘質土層	白色粒子を含む。しまりなし。(溝4)
19層	黒茶色粘質土層	混入物を含まない。しまりややあり。(溝4)
20層	黒茶色粘質土層	19層よりしまりがある。(溝4)
21層	茶色粘質土層	炭化物を少量含む。粘性非常に強く、良くしまる。
22層	暗茶色粘質土層	灰褐色粘土塊を少量、炭化物を多く含む。粘性強い。しまりややあり。(溝4)
23層	暗茶色粘質土層	22層と同質。下位に灰白色シルトを混入する。22層より粘性に欠ける。(溝4)
24層	暗茶色粘質土層	灰褐色粘土塊を含む。粘性ややあり。しまり弱い。(溝4)
25層	暗茶色粘質土層	灰白色シルトを混入する。炭化物を少量含む。粘性弱い。 ※25’層は25層と同質。(溝4)
26層	暗黄茶色粘質土層	粘性強い。良くしまる。(溝4)
27層	灰褐色粘土層	炭化物を含む。しまりなし。
28層	灰褐色粘土層	炭化物を含む。
29層	灰褐色粘土層	鎌倉石片を含む。しまりなし。
30層	茶黒色粘質土層	白色粒子・炭化物を含む。
31層	茶黒色粘質土層	混入物を含まない。しまりややあり。
32層	茶灰色粘質土層	青色粗砂・木片を混入する。しまりなし。(落ち込み1)
33層		木片を多く含む腐植土層。(落ち込み1)
34層	青色粗砂層	(落ち込み1)
35層	黒茶色粘質土層	粘性強い。しまりあり。
36層	黒茶色粘質土層	35層と同質。下位に灰白色シルトを混入し、粘性やや弱い。
37層	暗茶褐色粘質土層	炭化物を少量含む。粘性弱い。
38層	暗茶褐色粘質土層	灰褐色シルトを多く混入する。粘性強い。しまりあり。
39層	緑灰色シルト層	炭化物・木片を少量含む。
40層	緑灰色シルト層	炭化物・木片を少量含む。やや粗く、しまりに欠ける。
41層	茶色粘質土層	炭化物・木片を少量含む。粘性強い。
42層	緑灰色シルト層	炭化物・木片を少量含む。やや粗く、しまりに欠ける。
43層	緑灰色シルト層	炭化物・木片を少量含む。ややしまる。
44層	緑灰色粘質土層	炭化物・木片を少量含む。ややしまる。

① 1面ピット（P53）
② 1面ピット（P61）
③ 1面（土坑1）
④ 1面（落ち込み3）
⑤ 1面ピット（P54）
⑥ 1面ピット（P57）
⑦ 1面（板囲建物1）
⑧ 1面（溝2）
⑨ 1面（溝3）
⑩ 2面ピット（P84）
⑪ 2面ピット（P80）
⑫ 2面ピット（P79）
⑬ 2面ピット（P未定）
⑭ 2面（落ち込み5）
⑮ 3面（井戸1）
⑯ 3面（溝1）
⑰ 3面ピット（P100）
⑱ 3面ピット（P101）
⑲ 3面ピット（P99）

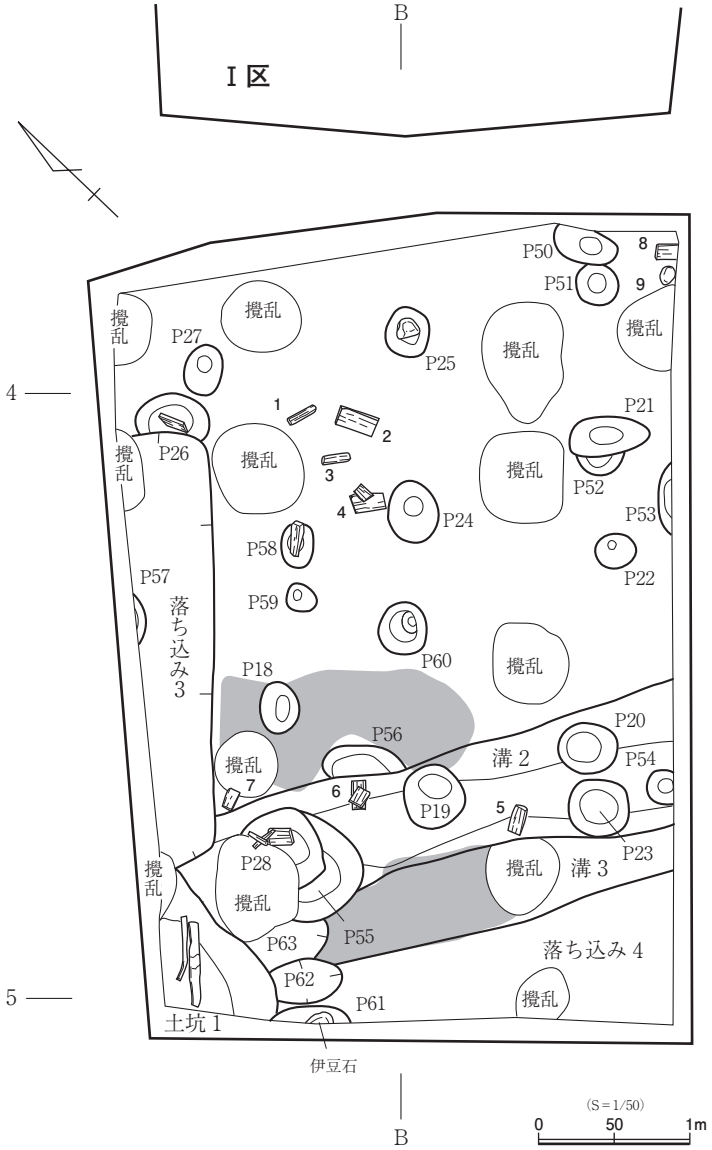
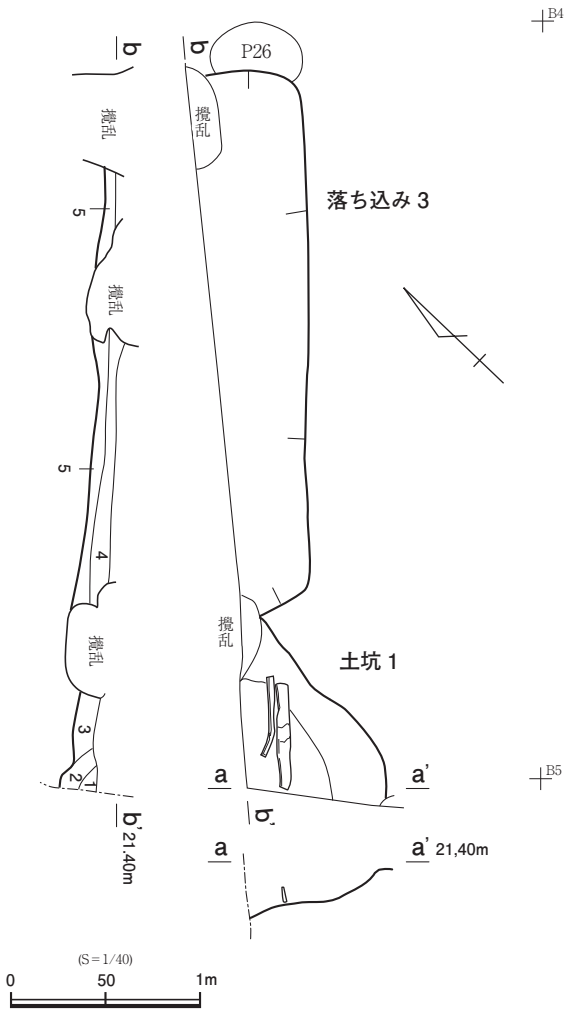


図５　１面遺構配置図

第１節　中世第１面（図５）

1面は鎌倉石粉砕片ないし石粒を混じえる粘質土（調査区壁土層C層・3層）により構成される生活面である。Ⅰ区では調査区北壁・西壁土層の土層断面（海抜21.4m ～ 21.6m付近）で確認できるものの、現代の削平により調査区内の大部分で失われており、平面的には検出されていない。Ⅱ区では海抜21.3m ～ 21.4m付近に位置し、検出された遺構は土坑1基、不明遺構（落ち込み3）1基、板囲建物か（落ち込み4）1基、溝2条、柱穴25口である。その他、後世の削平により掘り方を失った柱跡と思われる礎板・礎石が9箇所に遺存している。トーンは人頭大の土丹が敷き詰められている範囲である。溝2の構築に伴い貼り増しされたものと思われる。



土坑１　土層説明

１層	灰黒色粘質土	木片・炭化物を含む。しまりなし。
２層	灰黒色粘質土	炭化物・土丹粒子を含む。しまりなし。
３層	灰黒色粘質土	炭化物・土丹粒子を含む。ややしまる。

落ち込み３　土層説明

４層	黒茶色粘質土	木片・炭化物・かわらけ片を多く含む。しまりなし。
５層	黒茶色粘質土	青灰色砂を混じえる。 木片・土丹粒子を多く含む。しまりなし。

図６　土坑１、落ち込み３

土坑１（図６）

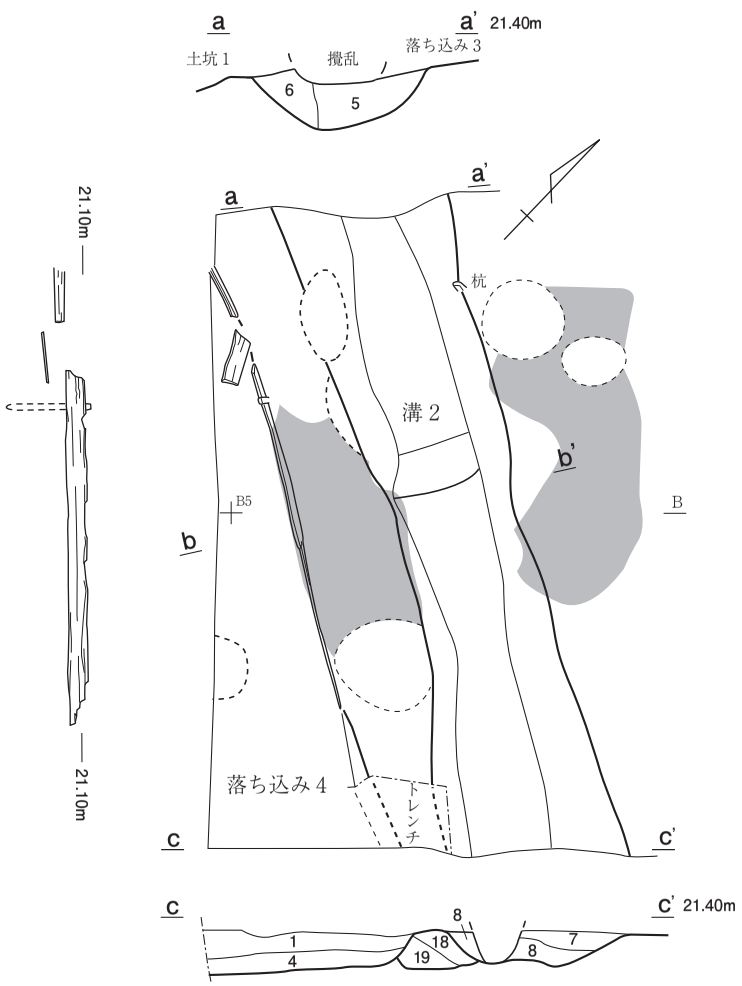
Ⅱ区南西角に位置する。北側で重複する落ち込み3との新旧関係は、切り合い部分を攪乱されるため不明である。P61に切られる。P62・63は本址よりも新しい可能性が高い。落ち込み4、溝2・3を切っている。検出された規模は90×75cmまで。深さは23cm、最深部の標高は21.14mである。底面に接する状態で板材が2本並んで検出されている。材の寸法は長い方が幅7cm程で長さは54cm、短い方が幅3cm程で長さは45cm程である。設置されたと見える痕跡は確認されておらず、本址に付帯するものか覆土とともに流入したものかは判断できない。

落ち込み３（図６）

Ⅱ区西壁際に位置する。溝2を切る。土坑1、P26・57との新旧関係は不明である。本址より下層に存在する別遺構まで掘り抜いてしまったため、当初プランの上端のみを図示した。東上端での軸方向はN－45°－Eである。検出された規模は長軸が287cm、短軸が57cmまで。調査区壁に残る土層断面で確認出来る深さは18cm、底面高は北側で21.35m、南側で21.17mと北から南へ緩く傾斜している。調査時の名称は落ち込みとしているが、遺構の全容が掴めないため性格は不明と言える。建物１～３、および上端南側に隣接する土坑1内で検出された板材と軸方向がほぼ一致する点に注意をしておく。

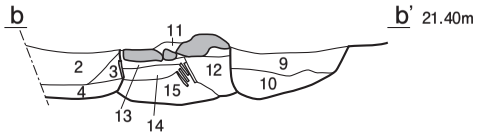
落ち込み４（図７）

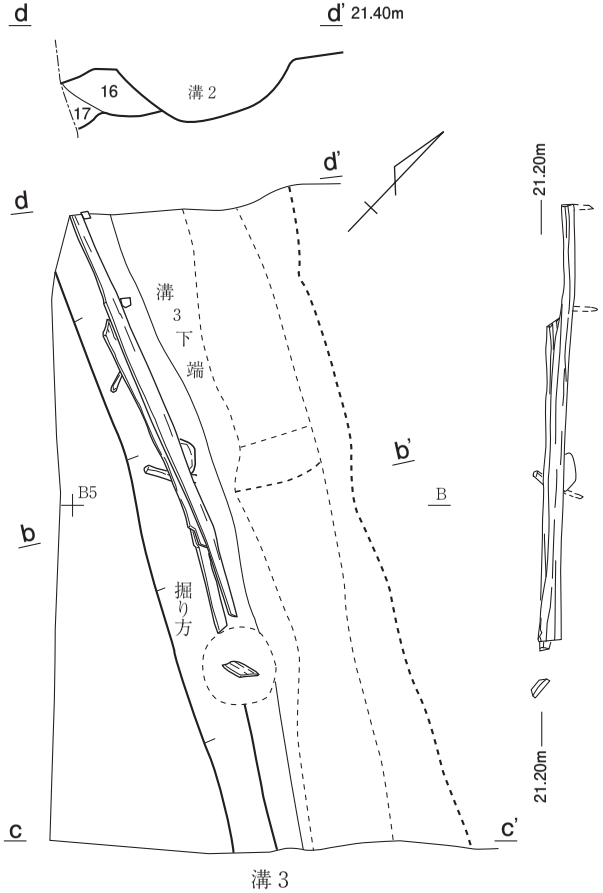
Ⅱ区南壁際に位置する。壁板を付帯する竪穴である。土坑1、P61・62に切られる。溝3を切る。軸方向はN－60°－Wである。検出された規模は北壁が320cmまで、北壁直交方向で95cmまで。本址は掘り方を有する構造と思われ、土丹を含む埋め土（4層）上が使用面レベルと考えられる。壁板は掘り方埋め土上に設置されており、途中28cmの破損部分を経て長さ247cmまでを検出、西側は調査区外に延びている。板材の寸法は遺存状態の良い部分で幅8～10cm、厚さは0.5～0.7cmである。壁板を支える杭材は1箇所で検出、杭頭2.5×1.5cm、長さは43cmで壁板外側に使用面レベル下33cm（20.80m）まで打ち込まれている。掘り方底の深さは22～33cmで、標高21.00～21.07mを測る。



溝2　土層説明

5層	暗茶黄色粘質土	土丹塊・玉石を多く混入する。粘性あり。しまりなし。
6層	暗茶色粘質土	黄色粘土を混入する。炭化物・かわらけ細片・木片を含む。しまりなし。
7層	灰黒茶色粘質土	鎌倉石の細粒子を少量混入する。粘性ややあり。
8層	灰黒茶色粘質土	かわらけ細片・炭化物を多く含む。粘性あり。しまりややあり。
9層	暗茶褐色粘質土	土丹粒子・かわらけ片・炭化物・木片を含む。粘性弱い。
10層	暗茶褐色粘質土	9層と同質。ややしまる。





落ち込み4　土層説明

1層	茶褐色粘質土	2～3㎝大の鎌倉石片、少量の土丹を混入する。粘性弱く、しまりなし。
2層	暗茶褐色粘質土	炭化物・かわらけ片・土丹粒子・木片を含む。
3層	暗茶褐色粘質土	2層と同質。ややしまる。木片を含まない。
4層	暗茶褐色粘質土	大小の土丹を混入する。炭化物を含む。粘性弱く、しまりなし。

溝3　土層説明

11層		土丹塊を主体とする。
12層		溝3覆土
13層	暗茶褐色粘質土	1～3㎝大の土丹を多く混入する。かわらけ片をやや多く含む。粘性弱い。しまりなし。
14層	暗茶褐色粘質土	1～3㎝大の土丹を多く混入する。粘性弱い。しまりなし。
15層	暗灰褐色砂質土	少量のかわらけ・木片を含む。
16層	黒褐色粘土	鎌倉石を混入する。炭化物を含む。しまりなし。
17層	黒褐色粘土	混入物を含まない。粘性・しまりあり。
18層	暗茶褐色粘質土	かわらけ片・炭化物・木片を含む。ややしまる。
19層	暗茶褐色粘質土	5㎝大の土丹を混入する。炭化物を多く含む。粘性弱い。

(S＝1/40)
0　50　1m

図7　溝2・3、落ち込み4

溝２・溝３（図７）

Ⅱ南側に並んで位置する２条の溝である。覆土の状態から（土層断面ｂ－ｂ’）溝３→溝２へ作り替えられた様子が伺われる。トーンで示した人頭大土丹の範囲は11層に対応しており、溝３を埋め立て後に土丹を盛って溝２の護岸としたものと思われる。他遺構との新旧関係は、土坑１、落ち込み３・４、P19・20・23・28・54・55・62・63、材５・６に切られ、P56も人頭大土丹を切っていると思われる。

溝２は軸方向がＮ－58°－Ｗ、規模は長さ363㎝まで、上端幅は63～93㎝、下端幅は28～47㎝である。深さは19～35㎝で、底面高は東側が21.14m、西側が20.89m、途中16㎝の段差を経て東から西へ傾斜している。覆土は西側調査区壁土層（ａ－ａ’）６層が掘り方部分であったかもしれない。断面形はほぼ逆台形を呈するが、不整に広がる部分を見受けられる。側板を抜き取った痕跡かもしれない。北上端沿いで検出されている杭と本址の関連は不明である。

溝３は軸方向がＮ－61°－Ｗ、規模は長さ354㎝までを確認した。北側の大半が溝２に壊され失われている。南側は溝２護岸下で側板が検出されている。残存する部分での溝底の深さは20～26㎝で、底面高は東側21.14m、西側21.00m。掘り方部分の深さは22～28㎝で、底面高は東側21.10、西側20.88mで東から西へ傾斜している。

ピット・材（図５・８、表２・３）

25口のピットと9箇所の材（礎板・礎石）が検出されている。ピットの多くは確認し得た掘り込みが浅く、または掘り方を失っており（材１～９）、１面より新しい時期の所産と考えられる。建物を構成すると思われる組み合わせは３組を摘出した。掘り方の柱間に多少のばらつきが見られるが、概ね１間200㎝を規格として掘削されたものと思われる。建物1・2の柱穴底面の標高が南にいく程、低い傾向にあるのは、生活面が緩く傾斜していたためと思われる。

組み合わせを明確にできないものも含めて個々のピット・材の詳細は１面柱穴表、礎板・礎石表を参照されたい。

建物１（図８）

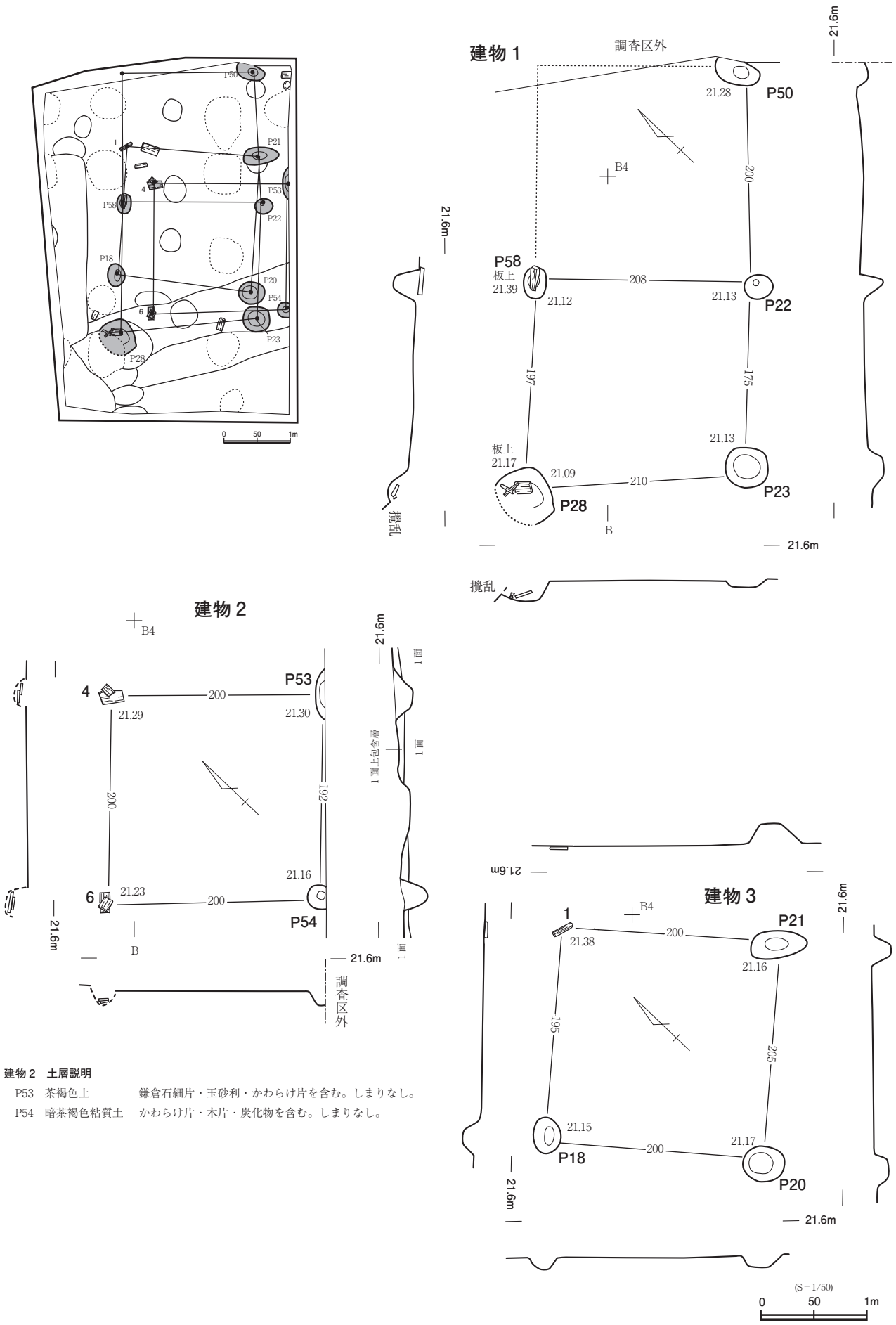
南北２間・東西１間の組み合わせ。P23・28が溝２を切っている。軸方向はＮ－45°－Ｅで、柱間は掘り方で175～210㎝である。配置に不安がある穴は、上屋組の部分で合わせたものと判断した。P58・28の礎板の向きが建物２の構成と異なる点に注目しておく。

建物２（図８）

南北１間・東西１間の組み合わせ。P53・54は調査区東壁の土層断面で１面上包含層以前の掘り込みであることを確認できる。P54・材６が溝２を切っている。軸方向はＮ－46°－Ｅで、柱間は掘り方で192～200㎝である。西列の材４・６の上に重ねられた板の方向を見ると、高さ合わせの目的で建物外側から柱下へ押し込まれたように思われる。現在でも簡易な小屋掛けをする場合、咄嗟に行われる方法である。

建物３（図８）

南北１間・東西１間の組み合わせ。P20・18が溝２を切っている。軸方向はＮ－49°－Ｅで、柱間は掘り方で195～205㎝である。北西の材１の標高が高く、建物１のP58に似ている。P58の例をとれば、掘り方に据えられていた柱下部が腐食したため、その部分を切り取って再度使用したものかもしれない。高さ合わせのため、掘り方を埋め戻し根固めした上に礎板を据えたと想定される。本址・材１については、板下の掘り方を見逃している可能性がある。



建物２　土層説明

P53	茶褐色土	鎌倉石細片・玉砂利・かわらけ片を含む。しまりなし。
P54	暗茶褐色粘質土	かわらけ片・木片・炭化物を含む。しまりなし。

図８　建物１～３

表２　１面柱穴表

遺構名	長径 × 短径 × 深さ（cm）	底面標高（m）	備考　　礎板等規模：長さ × 幅 × 厚さ（cm）
P22（建物 1）	27×22×22	21.13	
P23（建物 1）	40×37×13	21.17	溝 2 を切る。
P28（建物 1）	54×40～×18	21.09（礎板上 21.17）	礎板：15×9×3.5　他棒状板材 2 本。　溝 2 を切る。P55 との新旧不明。
P58（建物 1）	30×20×26	21.13（礎板上 21.39）	礎板：22×10×　？
P50（建物 1）	45×32×13	21.28	P51 との新旧不明。
P53（建物 2）	49×　？　×17	21.30	土層より復元。
P54（建物 2）	28×　？　×22	21.16	土層より復元。
P18（建物 3）	35×25×21	21.15	
P20（建物 3）	38×34×13	21.17	溝 2 を切る。
P21（建物 3）	53×31×18	21.16	P52 との新旧不明。
P19	43×38×16	21.15	溝 2 を切る。
P24	41×34×27	21.10	
P25	32×27×25	21.13（礫上 21.16）	礫：16×13×3
P26	47×30～×28	21.16（礎板上 21.39）	落ち込み 3 との新旧不明。
P27	34×23×26	21.09	
P51	30×27×9	21.29	P50 との新旧不明。
P52	32～×13～×17	21.17	P21 との新旧不明。
P55	60～×60～×14	21.18	P28 との新旧不明。
P56	52×22～×20	21.13	溝 2 との新旧不明。
P57	36×　？　×24	21.00	土層より復元。落ち込み 3 との新旧不明。
P59	20×18×12	21.23	
P60	33×31×29	21.04	
P61	52×　？　×17	21.10（礎石上 21.36）	掘り方は土層より復元。
P62	46～×30×5	21.22	土坑 1 との新旧不明。1 面確認の浅い窪み。柱穴？
P63	60～×25～×3	21.25	1 面確認の浅い窪み。柱穴？

表３　１面礎板・礎石表

遺構名	長さ × 幅 × 厚さ（cm）	材上標高（m）	備考
材 1	18.5×3.5×0.7	21.38	礎板（建物 1）
材 2	26×12×7	21.38	礎板
材 3	17×7×0.5	21.30	礎板
材 4	11×7×1・21×11×4	21.29	礎板（建物 2）
材 5	17×8×3	21.24	礎板　　溝 2 より新
材 6	12×11×1.5・18×9×3	21.23	礎板（建物 2）　　溝 2 より新
材 7	12×7×　？	21.27	礎板
材 8	13×10×1.5	21.42	礎板
材 9	12×8×　？	21.42	礫（礎石？）

第２節　中世第２面（図９）

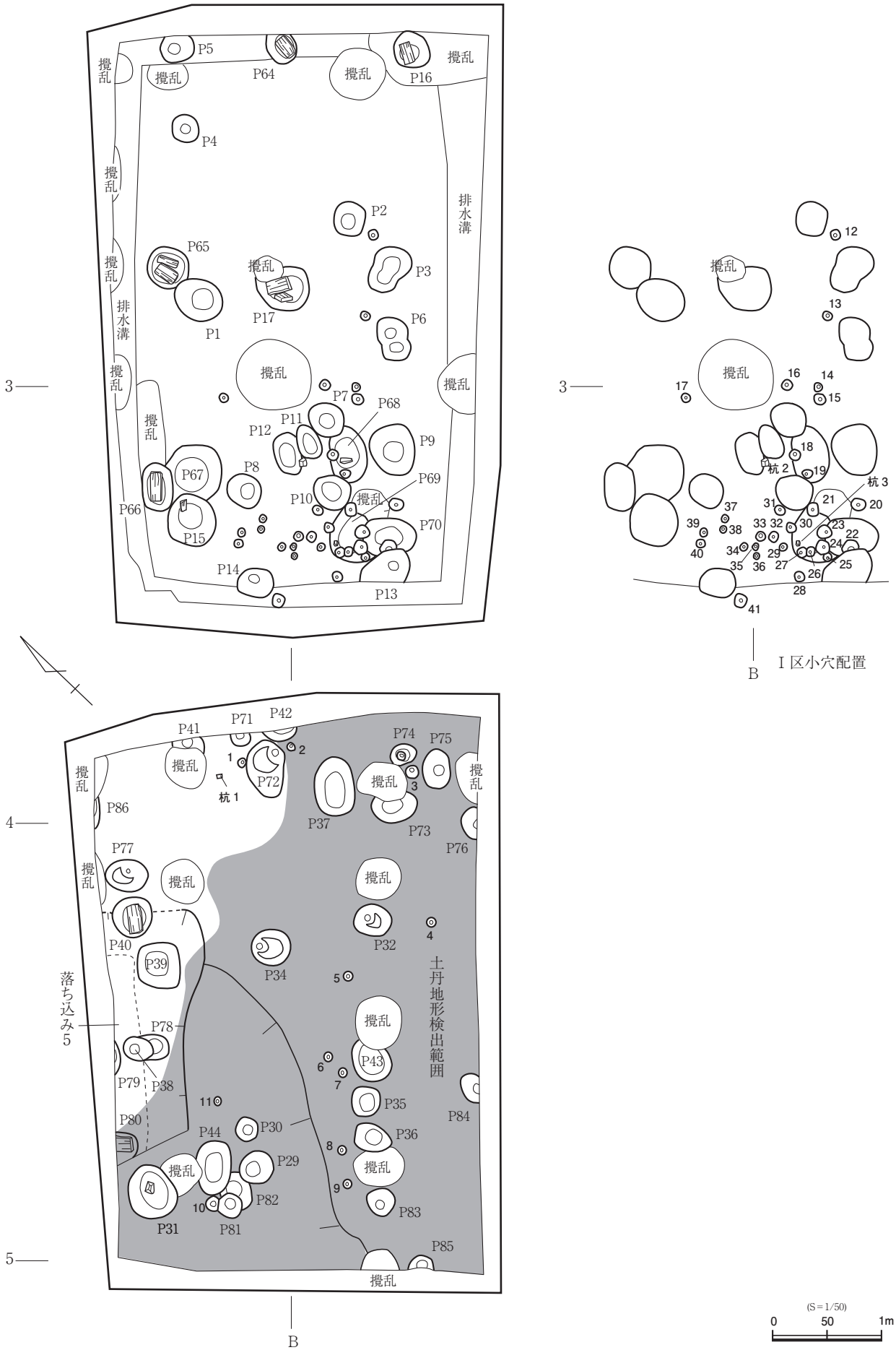


図９　２面遺構配置図

2面は土丹塊および黒茶色粘質土（調査区壁土層6～11層）、鎌倉石片を混じえる茶褐色粘質土（調査区壁土層D層）により構成される生活面である。Ⅰ区では調査区北壁・西壁土層の土層断面（海抜21.4m付近）で確認できるものの、現代の削平により調査区内の大部分で生活面が失われている。Ⅰ区の3面相当のレベルで検出された遺構のうち、他遺構との切り合いなどから、2面の所産と考えられるものを摘出し提示した。Ⅱ区では海抜21.1m～21.3m付近に位置する。構成土中の土丹地形の範囲をトーンで示した。東半は土丹地形上を生活面とし、西側では土丹地形の上に更に盛り土・整地し生活面としている。調査ではⅡ区の全面を土丹地形まで掘り下げてしまったため、西側は面の把握に多少の混乱が生じている点をおことわりしとく。検出された遺構は落ち込み（不明遺構）1基、建物1棟、柱穴列2列、ピット52口、杭3箇所及び杭穴と思われる小穴41口である。その他、2面構成土中の土丹地形直上でかわらけ溜りが1箇所検出されている。

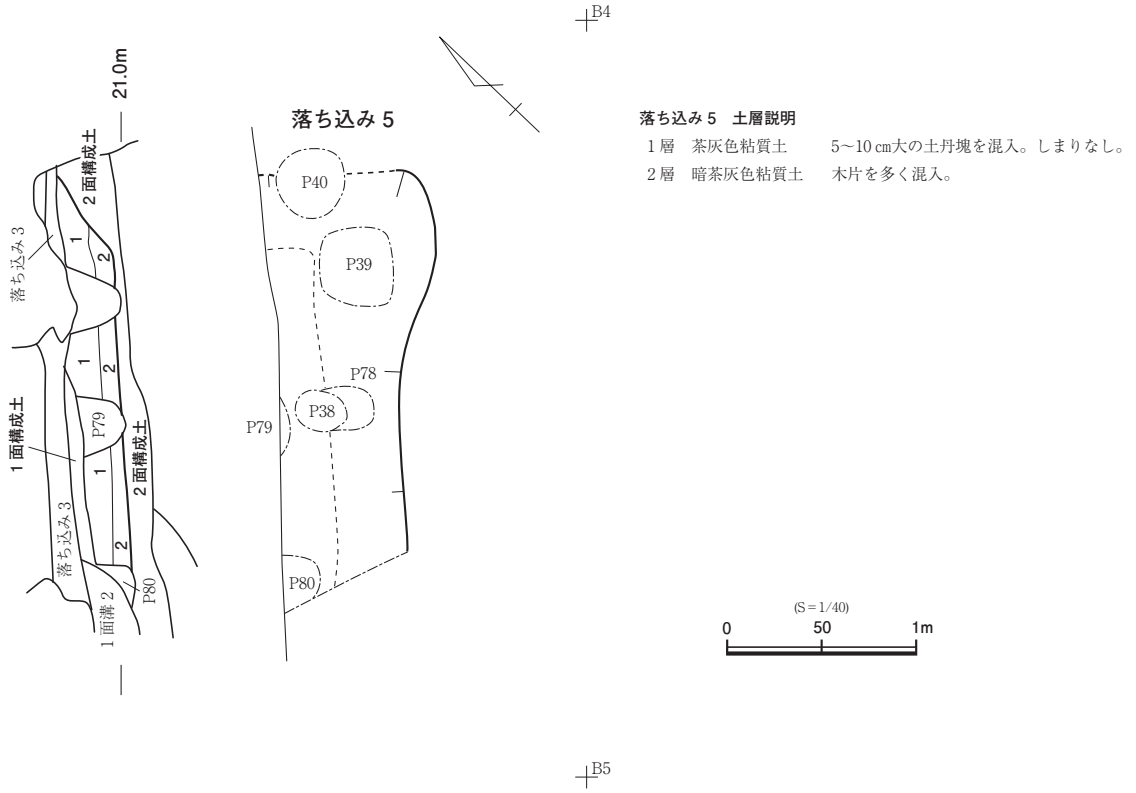


図10　落ち込み5

落ち込み5（図10）

Ⅱ区西壁際に位置する。南側は1面遺構・溝2に削平され失われている。建物4（P80・38・40）、P79に切られる他、P39（柱穴列2）も本址に先行する可能性が高い。P78との新旧関係は不明である。本址は1面遺構・落ち込み3の調査時に西壁際の覆土を掘り上げてしまい、また2面検出時に誤って掘り込み面を除去してしまったため、平面プランを明確にできなかった。図示した平面形は2面構成土中の土丹地形直上で確認された浅い落ち込みを東側の上端とし、その他の点線部分は西壁の土層断面に合わせ復元した。推定される規模は長軸が230㎝以上、短軸が91㎝まで。西壁土層で確認できる深さは28㎝で、底面標高は20.94～21.00mである。軸方向はN－40°－Eあたりを指すと思われる。調査時の名称は落ち込みとしているが、性格は不明である。

ピット・小穴（図９・11・12、表４・５）

52口のピットが検出され、建物を構成する組み合わせを1組、建物の一部と考えられる並び2列を摘出した。掘り方の柱間に多少のばらつきが見られるが、概ね1間200cmを規格として掘削されたものと思われる。他遺構との重複関係を明らかにできなかったピットも多いが、摘出した建物・柱穴列の組み合わせ通りであれば、旧い順に、落ち込み5→建物4→柱穴列2の関係が成り立つ。その他、杭3箇所及び、杭穴と思われる小穴が41口検出されている。小穴は径10cm内外の円形を呈し、深さは10cm以下の浅いものが多いが、底面に向かい先細るために掘りきれていない可能性が高い。杭を含めた配置に規則性は見出せず、性格は不明である。

組み合わせを明確にできないものを含めた個々のピット、杭・小穴の詳細は2面柱穴表・小穴表を参照されたい。

建物４（図11）

南北5間・東西1間の組み合わせ。P80・38・40が落ち込み5を切る。P65・66がそれぞれ柱穴列2のP1・15に切られる。軸方向はN－49°－Eで、柱間は掘り方で197～220cmである。北から順に1間・2間…として説明する。3間めの柱は調査区外のため検出されていない。東側の2間めは現代の削平により失われたものと思われる。1間め東側のP3は2口のピットが重複、西側のP65は礎板が2枚並んで検出されており、この位置での傷んだ柱の建て替え、ないし間取りの変更を意図した建て替えが行なわれている可能性、あるいは束柱を従える強固な基礎構造を備えていた可能性を想定できる。また、礎板の向きに注目するとP16・40・66が南北方向を向いているのに対し、P65、南西端P80の礎板は東西方向を向いて設置されている。5間めP36・80の掘り方柱間は220cmと他より広く、80～90cm奥に補助的な役割を担うと思われるP43・38配している。これらピットの配置や、形態・付帯物のわずかな違いが本址建物の構造・性格を推側する手がかりになるかもしれない。

柱穴列１（図12）

南北方向に5間の並びである。軸方向はN－47°－Eで、柱間は掘り方で198～210cmである。北から2間めの検出されない柱穴は掘り方を見逃し、より旧い時期の遺構と共に掘ってしまったものと思われる。北端のP64、1間めP17の礎板の数や向きなどが建物4の東列北端P16、西列1間めP65と似通う点に注目しておく。

柱穴列２（図12）

南北方向に4間の並びである。P1・15が建物4のP65・66を切る。P39と落ち込み5の新旧関係は未確認であるが、本址が先行する可能性が高い。軸方向はN－48°－Eで、柱間は掘り方で200～203cmである。北から1間めP15から板が検出されているが、1枚で礎板となり得る寸法を持たない。南側の2口（P39・31）は北側の柱穴より規模が大きく、軸もずれ加減ではあるが、建物4でも南側ピットの構成に変化が見られること、この辺が寺社域の南端となることを考慮して柱穴列に含めた。

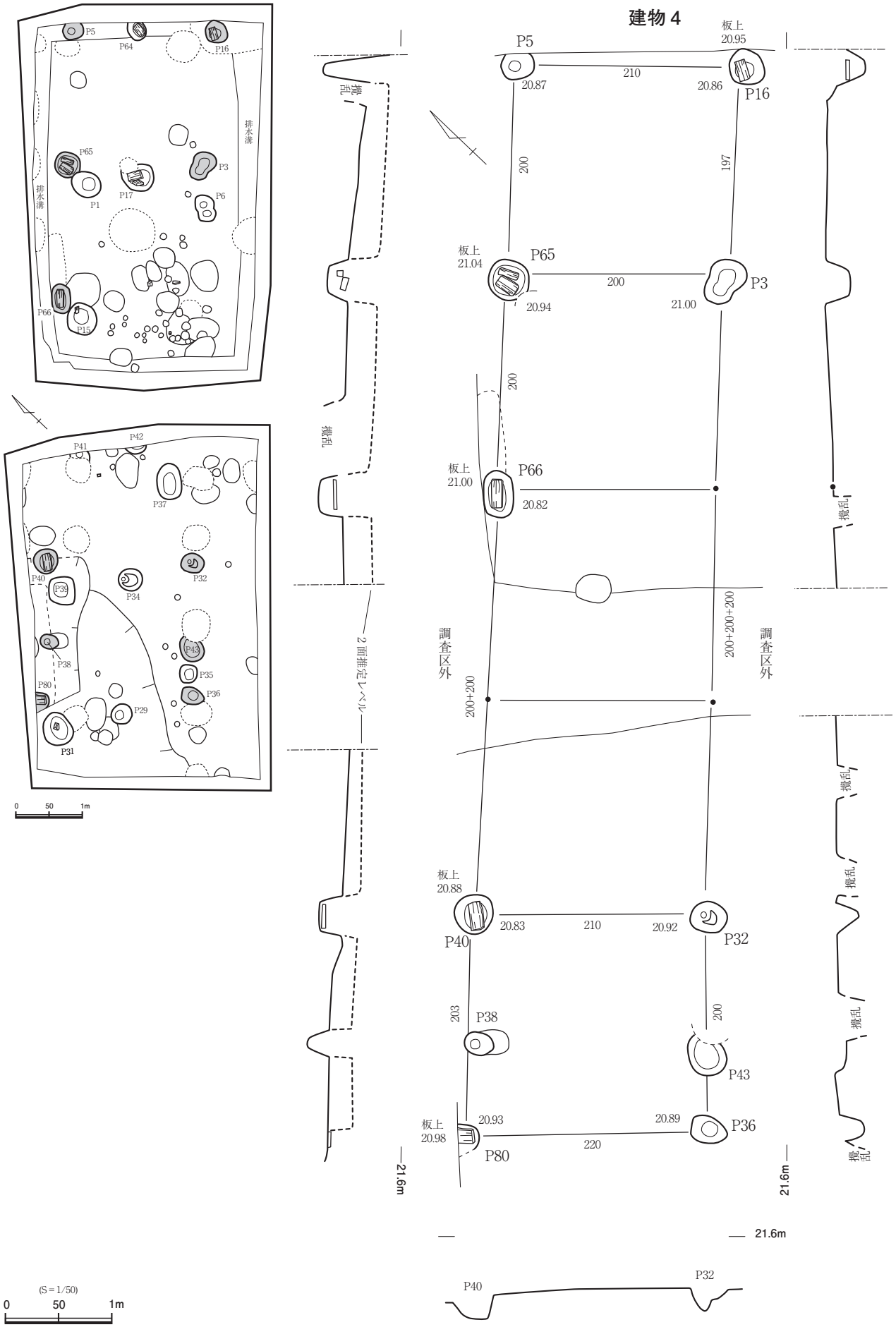

建物４
P5
P64
P16
P65
P3
P17
P6
P1
P66
P15
排水溝
P41
P42
P37
P40
P39
P34
P32
P38
P43
P35
P36
P80
P29
P31
0 50 1m
撹乱
ベルト排土
板上 20.95
P5
20.87
210
20.86
P16
200
197
板上 21.04
P65
200
P3
20.94
21.00
200
板上 21.00
P66
20.82
調査区外
200+200+200
調査区外
200+200
板上 20.88
P40
20.83
210
20.92
P32
203
P38
200
P43
板上 20.98
20.93
20.89
P36
P80
220
21.6m
21.6m
21.6m
(S＝1/50)
0 50 1m
P40
P32

図11　建物４

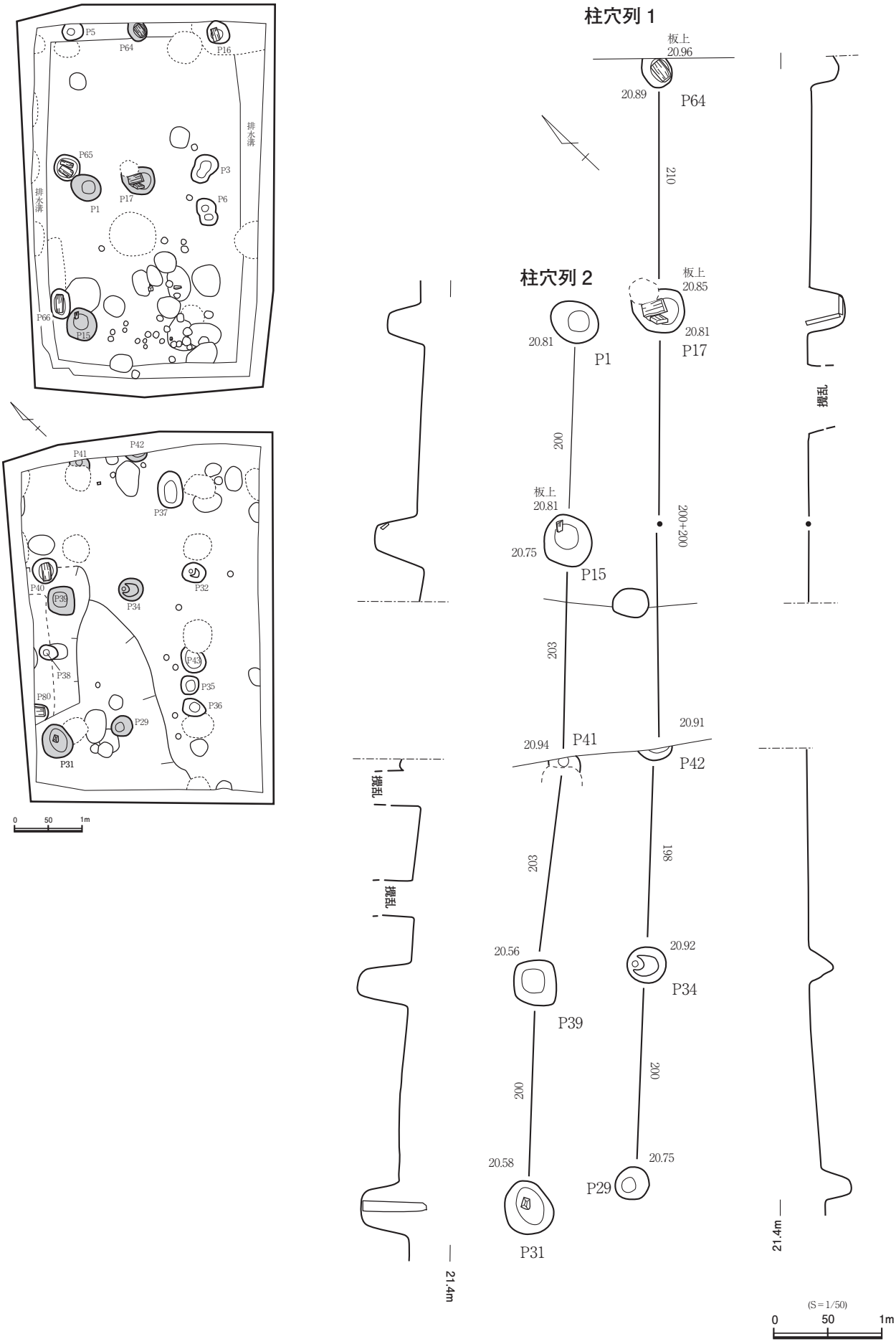

柱穴列 1
柱穴列 2
板上
20.96
20.89
P64
210
板上
20.85
20.81
P17
20.81
P1
200
板上
20.81
20.75
P15
200+200
203
20.94
P41
20.91
P42
203
198
20.56
P39
20.92
P34
200
200
20.58
P31
20.75
P29
撹乱
21.4m
P5
P64
P16
排水溝
P65
P3
P17
P6
P1
P66
P15
P41
P42
P37
P40
P39
P32
P34
P43
P38
P35
P36
P80
P29
P31
0
50
1m
(S＝1/50)

図12　柱穴列1・2

表４　２面柱穴表

遺構名	長径 × 短径 × 深さ（cm）	底面標高（m）	備考　　礎板等規模：長さ × 幅 × 厚さ（cm）
P 5（建物 4）	33×24×44	20.87	
P65（建物 4）	38×37×22	20.94（礎板上 21.04）	P1 に切られる。礎板：18×7×3.5（北）・17.5×8×6（南）
P66（建物 4）	43×28×38	20.82（礎板上 21.00）	P67 を切る。礎板：26×9× ？
P40（建物 4）	37×35×23	20.83（礎板上 20.88）	落ち込み 5 を切る。礎板：24×13× ？
P80（建物 4）	30～×20 ？ ×20	20.93（礎板上 20.98）	落ち込み 5 を切る。掘り方は土層より復元。礎板：15～×11× ？
P36（建物 4）	34×25×25	20.83	
P32（建物 4）	35×29×22	20.92	
P 3（建物 4）	35×（25）×22（北） 26×（20）×22（南）	21.00	2 口。南北の新旧は不明。
P16（建物 4）	34×31×35	20.86（礎板上 20.95）	礎板：19×9.5× ？
P38（建物 4）	27×21×35	20.72	落ち込み 5 を切る。P78 との新旧不明。
P43（建物 4）	43×35×16	21.04	
P64（柱穴列 1）	30～×25×30	20.89（礎板上 20.96）	礎板：21.5×13.5×4.5
P17（柱穴列 1）	50×40×33	20.81（礎板上 20.85 北） （礎板上 21.18 南）	礎板：19×11×4（北）・？ ×9×3（南）
P42（柱穴列 1）	32×11～×14	20.92	
P34（柱穴列 1）	36×32×27	20.92	
P29（柱穴列 1）	33×31×24	20.75	P82 を切る。
P 1（柱穴列 2）	45×36×32	20.81	P65 を切る。
P15（柱穴列 2）	49×45×32	20.75（板上 20.81）	P67 を切る。板：9×6× ？
P39（柱穴列 2）	41×40×48	20.56	落ち込み 5 と重複。
P31（柱穴列 2）	51×45×42	20.58（柱上 21.18）	柱：60×10×7
P 2	30×28×29	20.94	
P 4	25×25×23	20.97	
P 6	28×（24）×24（北） 28×（18）×22（南）	20.95（北） 20.97（南）	2 口。南北の新旧は不明。
P 7	35×30×25	20.90	P68 を切る。
P 8	34×29×12	21.04	
P 9	47×38×30	20.89	
P10	35×30×29	20.86	P68 を切る。
P11	33×21×12	21.04	P12 との新旧不明。
P12	38×23～×17	20.98	P11 との新旧不明。
P13	49～×32×34	20.77	P70 との新旧不明。
P14	33×27×46	20.65	
P30	21×20×14	20.80	
P35	29×27×18	20.93	
P37	53×37×14	21.03	
P44	49×32×24	20.70	P82 を切る。
P70	47～×30～×18	20.98	P69 を切る。P13 との新旧不明。
P71	18×12～×14	20.94	
P72	51×35×23	20.88	
P73	41×（30）×22	20.97	
P74	25×18×11	21.05	
P75	36×25×15	21.05	
P76	30×16～×8	21.12	
P77	38×30×12	20.77	
P78	29～×25×11	20.97	P38 との新旧不明。
P79	31× ？ ×23	20.98	土層より復元。落ち込み 5 を切る。
P81	20×20×26	20.74	P82 を切る。小穴 10 との新旧不明。
P82	36×30×37	20.63	P44・29・82 に切られる。
P83	26×23×15	20.90	

遺構名	長径 × 短径 × 深さ（cm）	底面標高（m）	備考　　礎板等規模：長さ × 幅 × 厚さ（cm）
P84	25×18～×10	21.04	
P85	22×13～×10	20.96	
P86	28～× ？ ×13	21.10	土層より復元。

表５　２面小穴表

遺構名	深さ（cm）	底面標高（m）	遺構名	深さ（cm）	底面標高（m）	遺構名	深さ（cm）	底面標高（m）
小穴　1	8	20.98	小穴 16	9	21.06	小穴 31	?	?
小穴　2	8	21.06	小穴 17	7	21.06	小穴 32	10	21.02
小穴　3	27	20.92	小穴 18	15	21.01	小穴 33	?	?
小穴　4	8	21.06	小穴 19	14	21.01	小穴 34	7	21.05
小穴　5	9	21.01	小穴 20	12	21.02	小穴 35	3	21.09
小穴　6	6	21.04	小穴 21	6	21.08	小穴 36	4	21.07
小穴　7	3	21.05	小穴 22	?	?	小穴 37	6	21.06
小穴　8	4	21.00	小穴 23	19	20.94	小穴 38	9	21.02
小穴　9	11	20.96	小穴 24	19	20.93	小穴 39	3	21.09
小穴 10	23	20.77	小穴 25	6	21.04	小穴 40	3	21.08
小穴 11	3	20.95	小穴 26	?	?	小穴 41	3	21.42
小穴 12	13	21.07	小穴 27	6	21.06	杭　1	長さ 6～	20.88（杭上）
小穴 13	4	21.14	小穴 28	6	21.06	杭　2	長さ 4～	21.20（杭上）
小穴 14	4	21.13	小穴 29	7	21.05	杭　3	長さ 2～	21.17（杭上）
小穴 15	8	21.09	小穴 30	?	?			

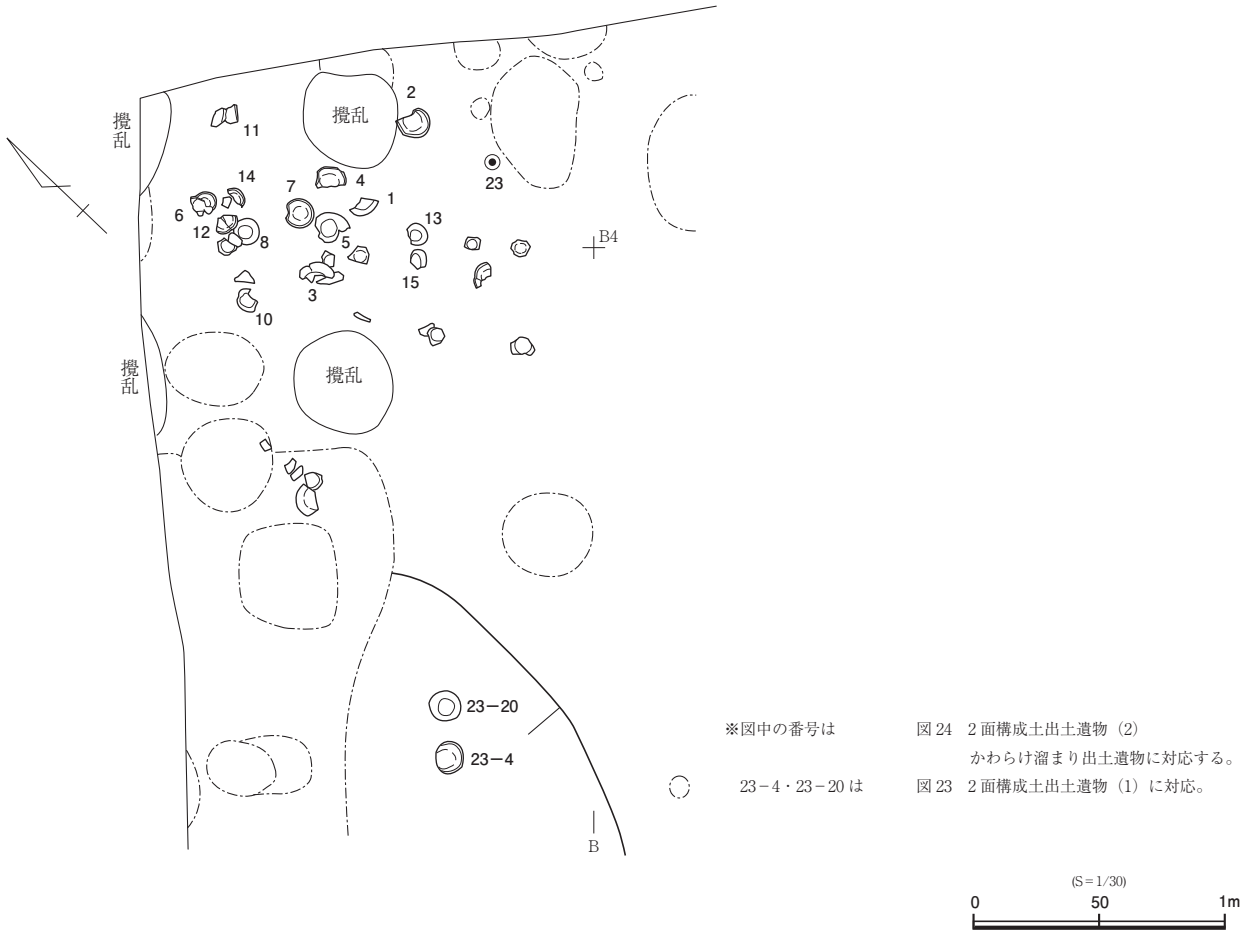


図13　かわらけ溜まり

かわらけ溜まり（図13・24）

Ⅱ区北西側、2面構成土下層の土丹地形直上で検出されている。このレベルである程度のまとまりが確認されたため、「かわらけ溜まり」として扱っているが、付近の2面構成土上層にも相当量のかわらけが含まれており、周辺の2面遺構の覆土中にも多くのかわらけが混入している。ここでは「かわらけ溜まり」として出土遺物もいちおう独立させて報告するが、周辺出土のかわらけと時間的・空間的に連続性を持っている可能性が高い。かわらけは2面構成土下層・土丹地形施行後に土丹地形上の盛り土（調査区壁土層7・8層）と共に流入・廃棄されたものと思われる。図中23－4・20の遺物は本址「かわらけ溜まり」とした範囲から外れるが、流入・廃棄の広がりを示すものとして図に加えた。

第３節　中世第３面（図 14）

3面は概ね自然堆積層と考えられる暗茶色～暗茶褐色を呈する粘質土（調査区壁土層G層・25層）を基盤とする生活面である。目立った地形は行なわれておらず、Ⅱ区の一部のみ、しまりの強い粘質土を貼って整地している。生活面の標高は海抜20.9m～21.2m付近である。検出された遺構は井戸1基、溝1条、柱穴18口、杭2箇所及び杭穴と思われる小穴17口である。Ⅰ区は1面・2面を現代の削平で失っていたため、この面から平面的な調査が始まっている。

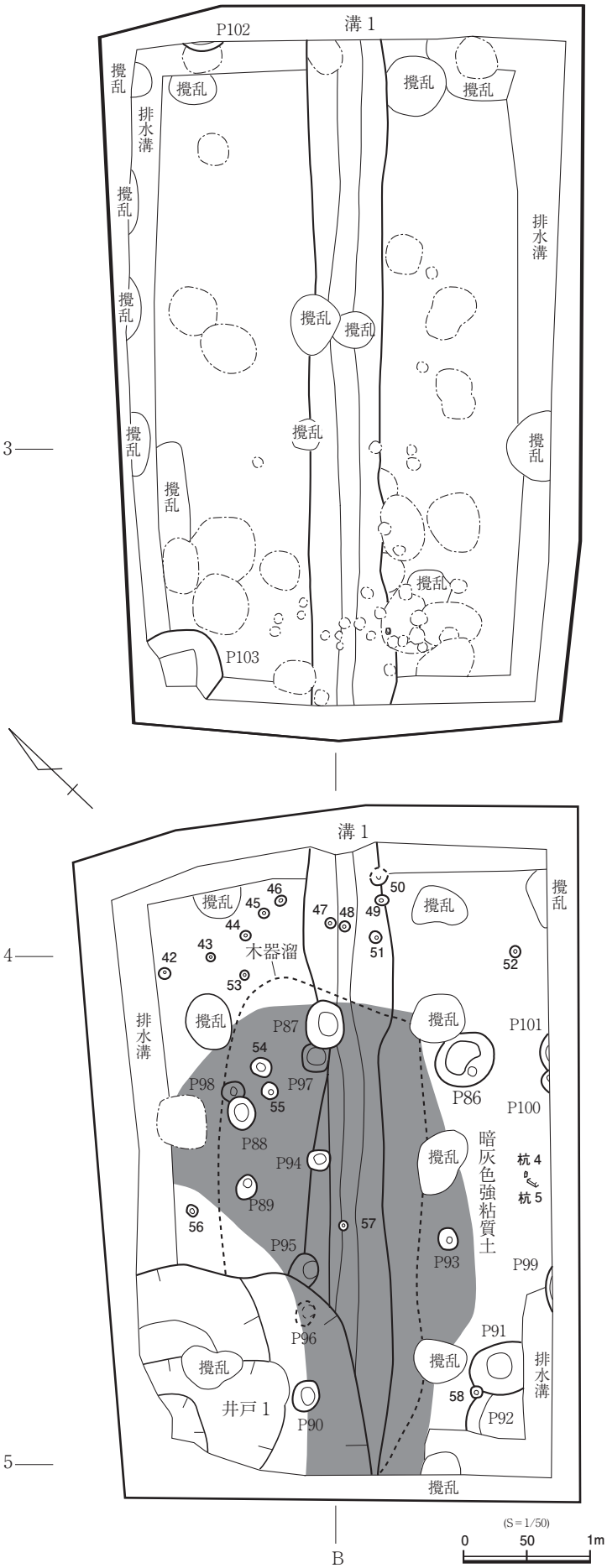


図14　３面遺構配置図

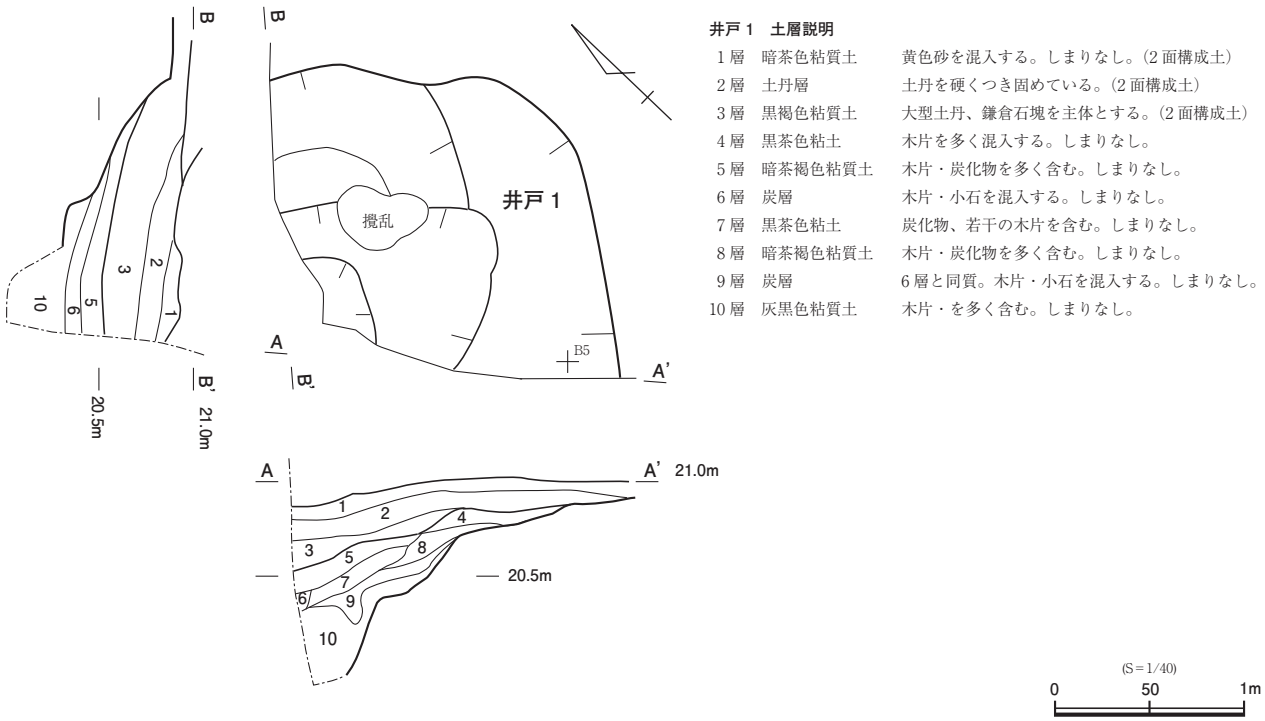


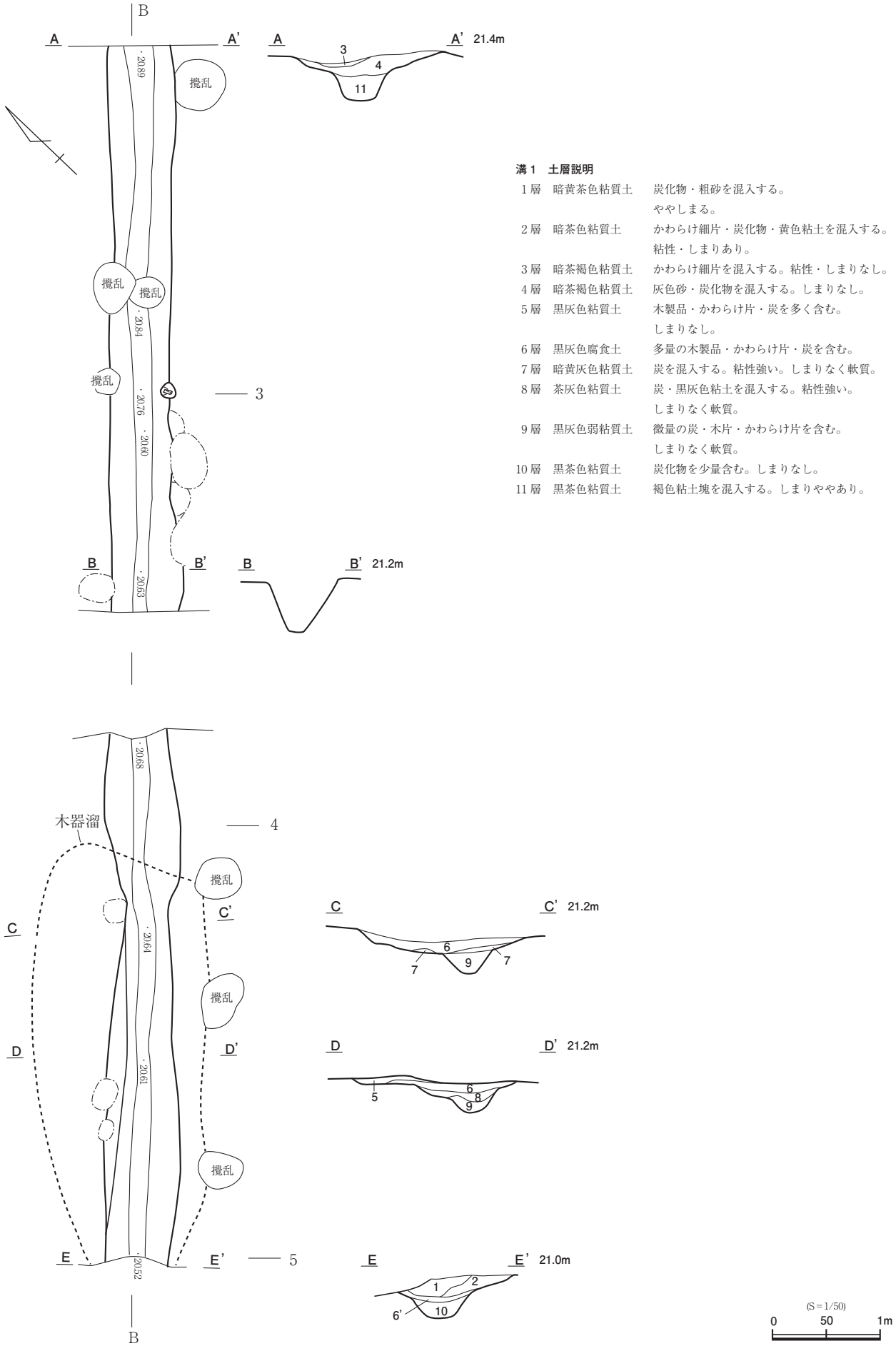
図15　井戸１

井戸１（図15）

Ⅱ区南西角に位置する。安全確保のため完掘はしていない。東側で重複する溝１よりも新しい。P90・96に切られる。P95との新旧関係は不明である。検出された上端の規模は南北方向が157cmまで、東西方向が176cmまで。深さは確認面から88cm・標高20.00mまでを掘削し、以下の調査は断念した。土層断面の１～３層は本址廃絶後に根固めを目的として充塡された２面構成土である。４層以下の覆土は木片を混入するしまりのない粘質土を主体としている。覆土中に炭が帯状に溜まる部分（６・９層）が見受けられることから、ある程度湧水する状態で埋没していると思われる。また、掘り方埋め土となり得る土層が見られないことから、井戸廃絶時に断面20.3～20.4m付近の段差まで掘り込んで井戸枠等の施設を抜き取ったものと思われる。

溝１（図16）

Ⅰ区・Ⅱ区にわたり検出された。調査区を南北に縦断し、北側・南側とも調査区外へ延びている。井戸1、P87に切られる。P94～97との新旧関係は不明である。断面形は溝本体と思われる一段低い掘り込み部分は逆台形を呈し、両岸に浅い窪地状の緩傾斜を従えている。両岸の緩傾斜は増水などの理由により自然に削り取られたもの。あるいは溝本体に水を集めることを目的として人為的に掘削されたものと推測される。この緩傾斜はⅠ区北壁・Ⅱ区南壁の土層から本址に含まれると判断されたもので、後述する木器が集中して出土した箇所を除き平面的には調査されていない。図示した上端プランは溝本体にあたる一段低い部分である。検出された溝本体の規模は、長さが11.30m以上、上端幅が29～70cm、下端幅が10～28cmである。確認面からの深さは24～44cmで、底面の高さは北側で20.89m、南側で20.52mと南へ傾斜している。Ⅱ区では、溝本体が埋まりきった段階の窪地に大量の木器を廃棄したものが検出されている（土層Ｃ～Ｅ　５・６層）。溝１上層・「木器溜り」として点線で範囲を示した。検出された範囲は南北に391cmまで、東西に163cmである。深さは最深で15cmを測る。



溝1　土層説明

1層	暗黄茶色粘質土	炭化物・粗砂を混入する。 ややしまる。
2層	暗茶色粘質土	かわらけ細片・炭化物・黄色粘土を混入する。 粘性・しまりあり。
3層	暗茶褐色粘質土	かわらけ細片を混入する。粘性・しまりなし。
4層	暗茶褐色粘質土	灰色砂・炭化物を混入する。しまりなし。
5層	黒灰色粘質土	木製品・かわらけ片・炭を多く含む。 しまりなし。
6層	黒灰色腐食土	多量の木製品・かわらけ片・炭を含む。
7層	暗黄灰色粘質土	炭を混入する。粘性強い。しまりなく軟質。
8層	茶灰色粘質土	炭・黒灰色粘土を混入する。粘性強い。 しまりなく軟質。
9層	黒灰色弱粘質土	微量の炭・木片・かわらけ片を含む。 しまりなく軟質。
10層	黒茶色粘質土	炭化物を少量含む。しまりなし。
11層	黒茶色粘質土	褐色粘土塊を混入する。しまりややあり。

図16　溝1

ピット・小穴（図14、表6・7）

18口のピットと、杭2箇所及び杭穴と思われる小穴17口が検出されている。明確なセット関係が成り立つものは見当たらない。小穴は2面で見逃されたものかもしれない。個々のピット・小穴の詳細は3面柱穴表・小穴表を参照されたい。

表6　3面柱穴表

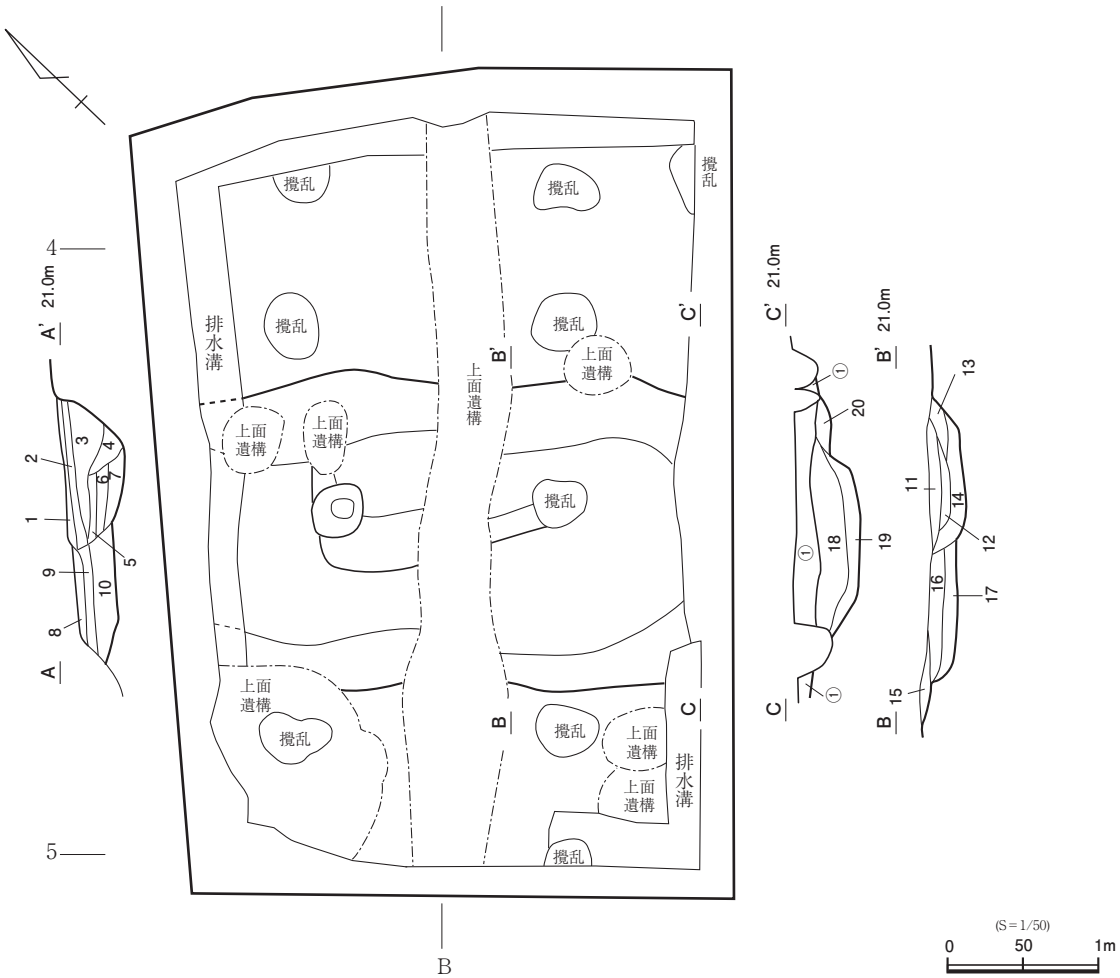
遺構名	長径 × 短径 × 深さ（cm）	底面標高（m）	備考　　礎板等規模：長さ × 幅 × 厚さ（cm）
P 86	50×39×41	20.58	
P 87	36×29×7	20.90	溝1、P97を切る。
P 88	25×20×3	20.91	P98を切る。
P 89	19×15×6	20.87	
P 90	25×21×16	20.75	井戸1を切る。
P 91	44～×40×16	20.76	P92、小穴58との新旧不明。
P 92	48～×37～×11	20.81	P91、小穴58との新旧不明。
P 93	22×14×4	20.90	
P 94	19×15×7	20.81	溝1を切る。
P 95	30×24×（34）	20.57	溝1掘削中に検出。溝1との新旧不明。
P 96	20×13×（31）	20.60	溝1掘削中に検出。井戸1に切られる。溝1との新旧不明。
P 97	25×23×（31）	20.64	溝1掘削中に検出。P87に切られる。溝1との新旧不明。
P 98	22×15×（25）	20.70	溝1掘削中に検出。P88に切られる。溝1との新旧不明。
P 99	23×？×22	20.70	土層より復元。
P100	18×？×20	20.78	土層より復元。
P101	28×？×18	20.80	土層より復元。
P102	37×？×28	20.93	土層より復元。
P103	61～×54～×58	20.52	

表7　3面小穴表

遺構名	深さ（cm）	底面標高（m）	遺構名	深さ（cm）	底面標高（m）	遺構名	深さ（cm）	底面標高（m）
小穴42	4	21.00	小穴49	12	20.90	小穴56	5	20.86
小穴43	3	21.00	小穴50	13	20.89	小穴57	3	21.02
小穴44	4	21.02	小穴51	12	20.90	小穴58	15	20.77
小穴45	2	21.02	小穴52	4	20.98	杭　4	長さ7.5～	20.68（杭上）
小穴46	9	20.95	小穴53	4	20.99	杭　5	長さ7.5～	20.85（杭上）
小穴47	2	20.98	小穴54	6	20.90	※杭4は溝4底面で確認。		
小穴48	2	20.98	小穴55	11	20.85			

3面下・溝4（図17）

Ⅱ区で検出された溝状の窪地である。切り合いを持つ複数の遺構が存在するように分層してしまったが、土のわずかな差を遺構風に分層してしまったにすぎない。平面プランは地盤が緩んで、基盤層と色調や土質、混入される粒子に変化の感じられる範囲を掘り上げたものである。堆積土層の項でも触れているが、本址周辺の堆積にはシミ状・ブロック状部分が見受けられるなど、自然的な要因によると思われる不整合が生じている。本址は人為的な掘り込みではなく、何らの理由により地盤が緩んでできた窪地の可能性が高いものと思われる。本址については、あえて整合しない状況を現地調査で記録された事実として報告しておく。掘り込み面が場所により異なる他、覆土の状況も平面プランと整合していない。東壁際（C－C’）の①層は図4の21層で、3面の基盤となる自然堆積土である。1・2層については3面を



溝４　土層説明

1層	灰褐色粘質土	混入物を含まない。粘性強い。
2層	黒褐色粘質土	混入物を含まない。粘性・しまりとも強い。
3層	黒褐色粘質土	炭化物を少量含む。しまりなし。
4層	茶褐色粘質土	炭化物・白色粒子を含む。
5層	黒褐色粘質土	白色粒子を含む。しまりなし。
6層	黒褐色粘質土	混入物を含まない。ややしまる。
7層	黒褐色粘質土	6層よりしまりがある。
8層	茶褐色粘質土	木片を含む。粘性あり。
9層	暗茶色粘質土	炭化物を少量含む。灰白色シルトを混入する。粘性弱い。
10層	暗茶褐色粘質土	粘性・しまりあり。
11層	黒茶色粘質土	粘性あり。しまりなし。
12層	黒茶色粘質土	白色粘土塊を斑状に混入する。ややしまる。
13層	黒茶色粘質土	色調黒味強く、シルト気味。青灰色粘土を含む。
14層	黒茶色粘質土	シルト気味。木片を含む。しまりなし。
15層	黒灰色粘質土	木片を含む。粘性あり。しまりなし。
16層	黒灰色粘質土	白色粒子を含む。粘性あり。しまり強い。
17層	黒褐色粘質土	白色粘土をブロック状に含む。粘性・しまり弱い。
18層	黒茶色粘質土	炭化物を多く、灰褐色粘土塊を少量含む。粘性強い。しまりややあり。
19層	黒茶色粘質土	16層と同質だが、下位に灰白色シルトが含まれ、16層より粘性に欠ける。
20層	暗黒茶色粘質土	灰褐色粘土塊が16層より多い。粘性ややあり。しまり弱い。
①層	茶色粘質土	炭化物を少量含む。粘性非常に強く、よくしまる。

図17　溝４

生活面にするにあたり緩んだ地盤を補強するために貼付けられた整地層と思われる。堀上がりの規模は東西に323cmまで、上端幅は最大で221cm。確認面からの深さは16～44cmで、底面高は20.50～20.64cmで安定しない。本址は3面下の遺構として扱ったが、確実に伴う遺物が出土しておらず時期は不明である。

第４節　中世以前（図 18）

中世の生活面より下層で検出されたものをまとめた。落ち込み2基、ピット21口、杭1箇所及び、杭穴と思われる小穴8口が検出されている。ピットには中世の生活面で見逃された掘り込みも含まれているかもしれない。大方はわずかな土質の違いで曖昧なプランを掘り上げたもので、遺物も出土しておらず、積極的に遺構とし得る理由が見つからない。杭・小穴は2面（3面）で見逃されたものと思われる。ピット・小穴の詳細は中世以前柱穴表・小穴表を参照されたい。

Ⅱ区は調査区壁土層38層相当（20.45m）を最終確認面とし、更に南東壁際に深堀トレンチを設定した。最終確認面では倒木痕が、深堀トレンチでは海抜19.8mで小袋谷川に運ばれたと思われる流木が検出されている。検出された倒木痕の規模は150×144㎝、確認面からの深さは20㎝で、底面高は20.35mである。

表８　中世以前柱穴表

遺構名	長径 × 短径 × 深さ（㎝）	底面標高（m）	備考　　礎板等規模：長さ × 幅 × 厚さ（㎝）
P104	18×18×12	20.77	P107 との新旧不明。
P105	19×18×12	20.77	
P106	20×17×11	20.78	P107 との新旧不明。
P107	61×40～×20（西） 63×42～×18（東）	20.80（西） 20.82（東）	2 口。東西の新旧、P104・106 との新旧は不明。
P108	42×36～×9	20.85	
P109	22×19×25	20.76	
P110	24×22×18	20.83	
P111	24×24×20	20.66	
P112	27～×22×13	20.79	P113 との新旧不明。
P113	33×31×17	20.75	P112 との新旧不明。
P114	25×17～×13	20.77	
P115	27×23～×14	20.76	
P116	38×34～×10	20.62	P121、小穴 64・65 との新旧不明。
P117	45～×21～×12	20.62	P116・118、小穴 64 との新旧不明。
P118	27×22～×11	20.63	P117 との新旧不明。
P119	22×21×23	20.47	
P120	27×24×10	20.55	
P121	53×28～×10	20.63	P116、小穴 63 との新旧不明。
P122	42×39×9	20.66	落ち込み 1 を切る。P123 との新旧不明。
P123	73～×46～×14	20.62	落ち込み 1 を切る。P122 との新旧不明。
P124	53～×32～×8	20.64	落ち込み 1、小穴 59 との新旧不明。

表９　中世以前小穴表

遺構名	深さ（㎝）	底面標高（m）	備考
小穴 59	11	20.40	調査区壁土層 35～36 層相当で確認。
小穴 60	11	20.21	落ち込み 1 底面で確認。
小穴 61	1	20.31	落ち込み 1 底面で確認。
小穴 62	26	20.44	調査区壁土層 35～36 層相当で確認。
小穴 63	12	20.52	調査区壁土層 35～36 層相当で確認。
小穴 64	12	20.59	調査区壁土層 25 層～35 層上面相当で確認。
小穴 65	24	20.67	調査区壁土層 25 層～35 層上面相当で確認。
小穴 66	5	20.36	調査区壁土層 38 層相当で確認。杭と思われる木質遺存。
杭　6	0	20.34（杭上）	落ち込み 1 底面で確認。

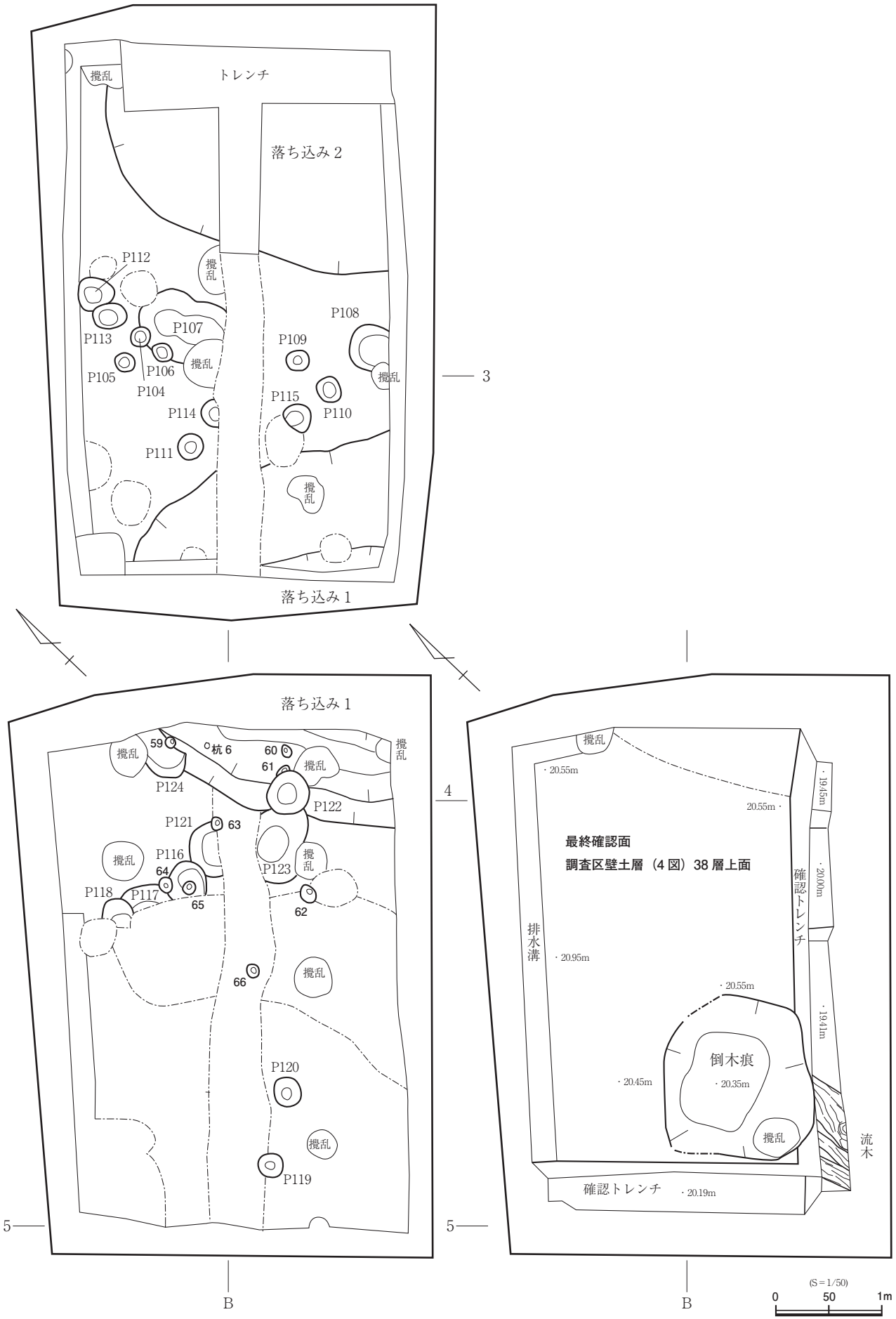
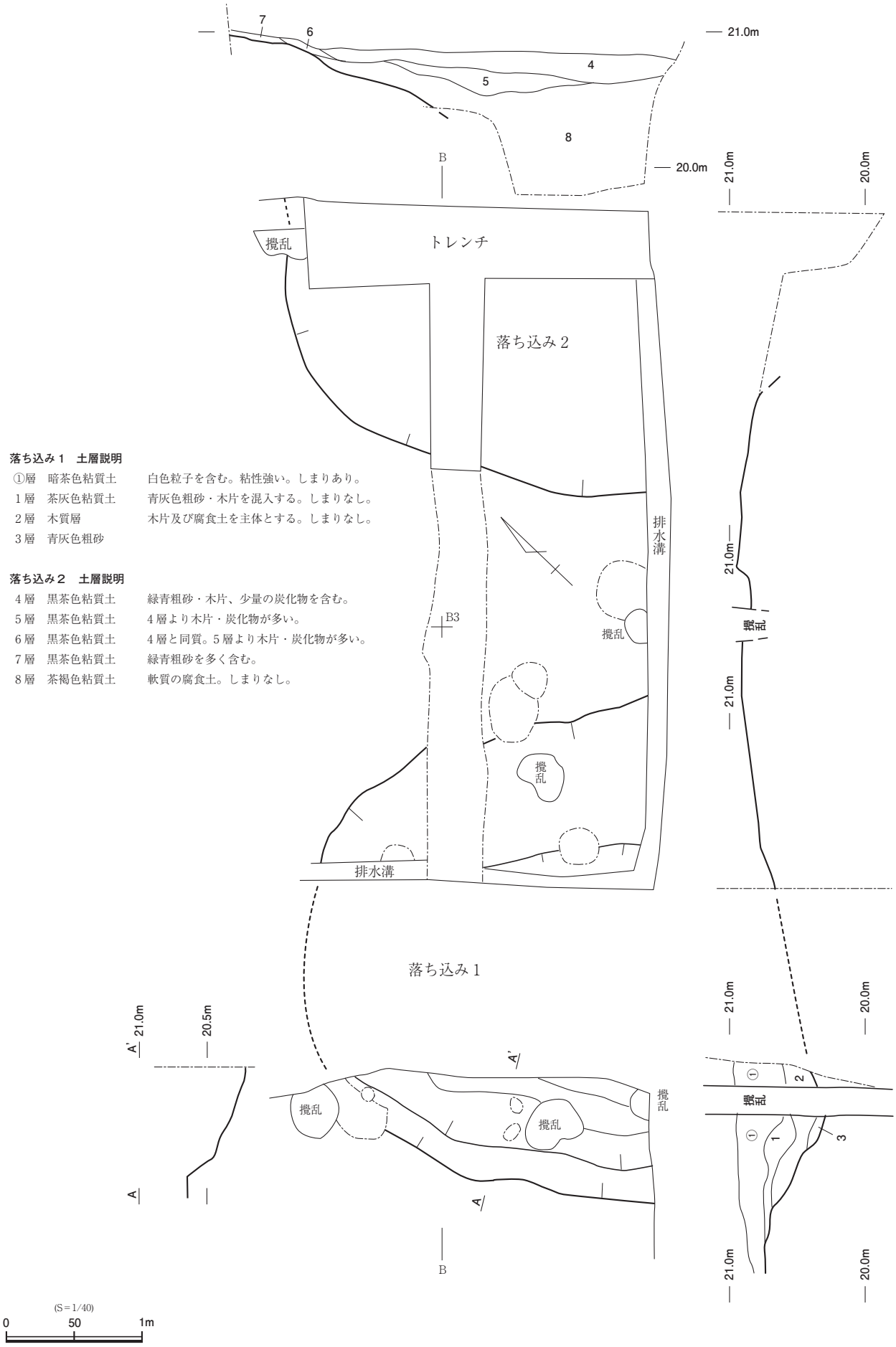


図 18　中世以前遺構配置図

落ち込み１・２（図19）

調査区東壁際で150㎝の距離をおいて南北に並んで検出されている。検出された規模は、落ち込み1が東西方向に240㎝まで、南北方向に376㎝まで。落ち込み2が東西方向に273㎝まで、南北方向に210㎝まで。深さは、落ち込み1が48㎝で、底面高が20.19m。落ち込み2は安全確保のため完掘せず、115㎝（19.80m）の深さで調査を断念した。覆土の堆積状況を見ると、本址は自然に埋没しているものと思われる。また、木片を含む腐食土層を主体としており、落ち込み1の底面に粗砂が溜まる様子が確認できることから、開口時から埋没過程のある時期までは、浸水していたものと推測される。2基の性格については類例を知らず判断できない。



落ち込み１　土層説明

①層	暗茶色粘質土	白色粒子を含む。粘性強い。しまりあり。
１層	茶灰色粘質土	青灰色粗砂・木片を混入する。しまりなし。
２層	木質層	木片及び腐食土を主体とする。しまりなし。
３層	青灰色粗砂	

落ち込み２　土層説明

４層	黒茶色粘質土	緑青粗砂・木片、少量の炭化物を含む。
５層	黒茶色粘質土	４層より木片・炭化物が多い。
６層	黒茶色粘質土	４層と同質。５層より木片・炭化物が多い。
７層	黒茶色粘質土	緑青粗砂を多く含む。
８層	茶褐色粘質土	軟質の腐食土。しまりなし。

図19　落ち込み１・２

第四章　発見された遺物

今回の調査で発見された遺物には、鎌倉遺跡群で通常出土するものとは異なる特徴を持ったかわらけが含まれている。そのかわらけはロクロ成形で器壁が薄く、胎土は混入物を含まず精良で比較的硬質。内底面のナデ調整がないか、あっても１～２回軽くナデる程度、外底面に糸切り後の板状圧痕が見られない、などの特徴を持ち、また糸切りの糸幅が通常よりも広いものが見受けられる。これまでの鎌倉市内の調査では今小路西遺跡の御成町200番２地点・御成町171番１地点の２ヶ所で近しい特徴を持つかわらけが、まとまって検出されており、御成町200番２地点では出土したかわらけのうち、本遺跡出土のものと近しい特徴を持つものを「A類」として報告している。御成町200番2地点でA類とされるものには、御成町171番1地点や本遺跡で出土したものと相違する部分も見られるため、便宜上、本報告書では「A類」を含む、通常のロクロ成形かわらけと胎土や内外底面の調整技法などが異なるものの総称として「Ⅱ群」の名称を与え、他と区別して扱うこととする。なお、「Ⅱ群」の名称は通常のロクロ成形のかわらけを「Ⅰ群」とした分類に対するもので、その上位に更に手づくね成形のものと、ロクロ成形のものとの種別が定義されるものである。本文中では煩雑さを避けるため「Ⅱ群」の名称のみを用いることとし、観察表の記載も、「Ⅱ群」のみを表記、調整等も特記すべき事のみにとどめた。

第１節　表土・攪乱・表採出土遺物（図 20）

１～５はロクロ成形のかわらけで、１・２は大皿、３～５は小皿である。１は緩く内湾する器形、２は体部中位に弱い稜を持ち、口縁部は外反する。３は背低で見込みの立ち上がりが深く直立気味。４は背高で体部中位に弱い稜を持っている。口唇部にタールの付着が見られる。５はⅡ群で、内底が広く、見込みは折れて立ち上がる。外底周縁の一部に細い簾状の圧痕が見られる。６は龍泉窯系青磁の蓋で、酒会壺に合わせられるものと思われる。素地は緻密、釉調は薄緑色を呈し光沢があり、施釉は薄めで体部外面の回転削り痕が透かし見える。口縁部から縁の下面にかけては露胎で赤茶色を呈する。７・８は肥前伊万里の染付け碗で、18世紀後葉以降の所産である。７は筒型、８は広東型。８の内底中央部は欠損するが、染付け文の端をわずかに確認できる。高台畳付は露胎である。９は瀬戸窯の折縁深皿の口縁部片で、薄緑色を呈する灰釉が漬け掛けされている。10・11は瀬戸・美濃系の陶器で、10は灯明皿、11は小壺である。10は外面に回転ヘラ削り痕が明瞭に残る。11の口唇部から内面肩部にかけては露胎である。12は常滑窯の甕口縁部片で縁帯部のみ遺存する。縁帯幅が5.8㎝と広く14世紀後半代の所産である。13は備前窯の甕で16世紀後葉から17世紀前葉頃の所産と思われる。14は堺系の擂鉢で、９本組の櫛歯状工具による沈線が内面体部と内底の一部に引かれている。底部はわずかに反って上げ底気味で、周縁の設置部分は摩滅している。15・16は丸瓦、17は平瓦でいずれも18世紀代か、それより新しい時期の所産と思われる。15は凸面ナデ、凹面もナデ調整されるが粗い縄編み痕が残る。側端側の縁辺・側端・側端凸面側角は面取りされている。また、凹面には留め具痕と思われる針金状の鉄分が付着している。16は凸面ナデ。凹面は粗い縄編み痕が残り、先端はナデ落とされて下端へ、凹面側端側の縁辺もナデ落とされて側端に至る。側端はわずかに角度を違える２段の面取りが施されている。17の凹面から側端にかけては丁寧なナデ調整が施され、平滑でやや光沢を持っている。凸面は縄か何らのものを編んだと思われるブツブツとした粒子の痕跡が残る。側端・側端凹面側角は面取りされている。18～23は木製品である。18は箸、19は円盤状の品の残欠と思われる。20・21は草履芯で藁状の繊維と、繊維の圧痕が残っている。22は板目採り、23は柾目採りされた板材。

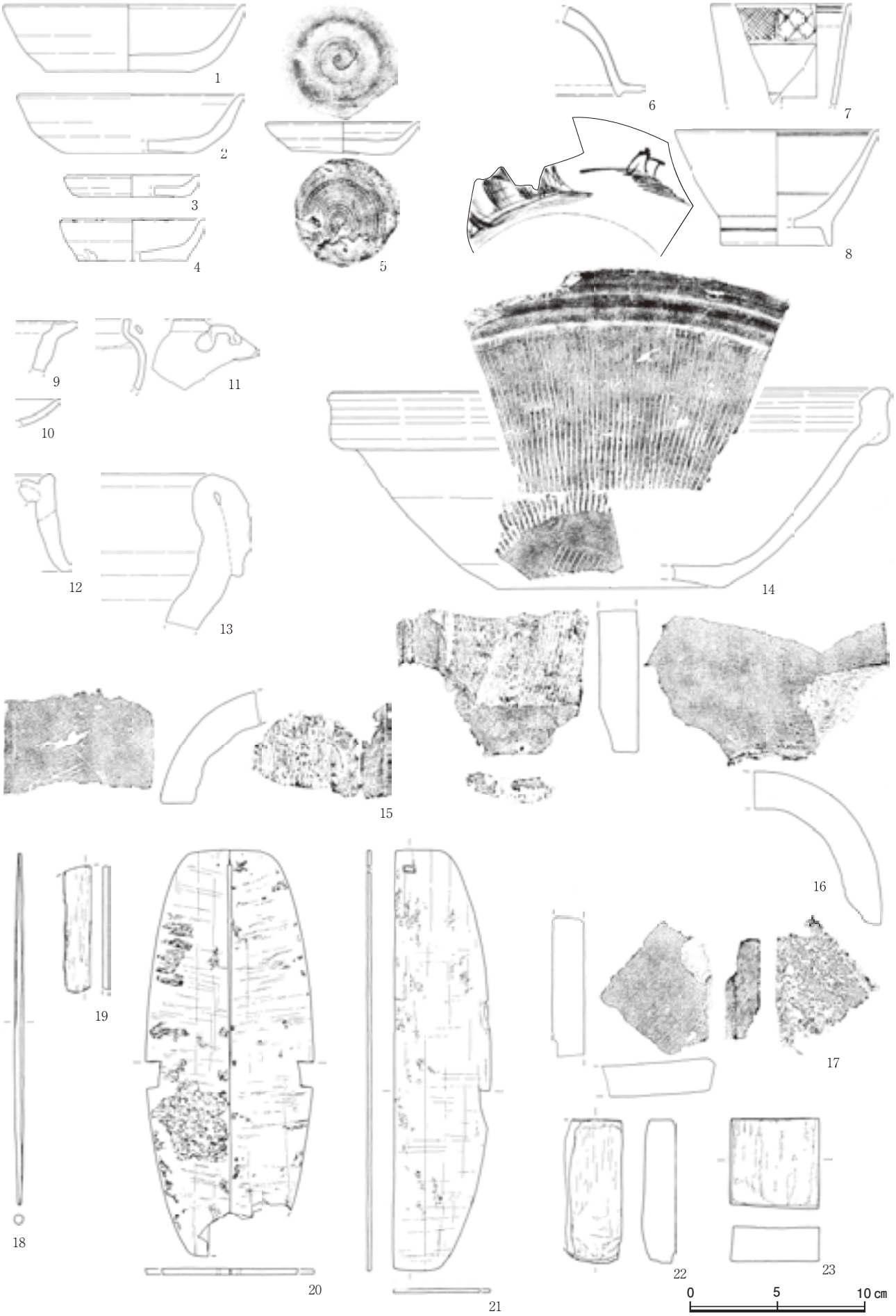


図20　表土・攪乱・表採出土遺物

第２節　中世の出土遺物（図 21 ～ 29）

１面上包含層出土遺物（図２１）

1はロクロ成形のかわらけの大皿。外反して立ち上がり、体部中位上の弱い稜を経て口縁部は内湾気味に収まる。2は龍泉窯系青磁の双魚文鉢である。

１面遺構出土遺物（図２１）

3・4は土坑1から出土した。3は平瓦で永福寺Ⅲ期瓦である。凹面・凸面ともナデ調整が施されるが、粒子の細かい離れ砂がよく残る。凸面には糸切り痕が見受けられる。4は寛永通宝で混入品。

5 ～ 7は溝2から出土した。5・6はロクロ成形のかわらけで、器壁薄く、深い器形をとるが、胎土中に混入物をわずかに含んでいる。5は中皿と思われる。底径広めで、深く内湾して立ち上がる。6は直線的に立ち上がって口縁部はわずかに内湾する。7は断面の丸い棒状の木製品で、遺存する一端は斜めに加工されているが、先端は尖らずに丸みを持って収まっている。

8 ～ 12は溝3から出土したロクロ成形のかわらけである。8・9は大皿で底径広く背低気味、器壁が薄く内湾する器形をとる。10は極小かわらけ。11･12はⅡ群の小皿で、共に内底が広い。11は器壁厚めで、外面中位に稜を持って開いている。12は緻密胎土で焼き上がり硬質。器壁が薄く、見込みの立ち上がりは深い。外面下位のナデが強く底部は突出気味である。底部は糸切り後に細い簾状の圧痕を残している。

13 ～ 16は落ち込み4から出土した。13・14はロクロ成形のかわらけでⅡ群の小皿である。13は緻密胎土で焼き上がり硬質。器壁が薄く、見込みの立ち上がりは深い。外面下位のナデが強く底部が突出して見える。外面中位で屈曲して口縁部は肥厚、内湾している。内底は幅の狭いロクロ目が強く残る。何らの工具が使用されているかも知れない。14は器壁が非常に薄い。底径が狭く、外面下半は底部とほとんど角度を変えずに開くため、連動する内底は広い。外面中位で折れて口縁部は外反しながら開いている。15は丸瓦で永福寺Ⅲ期瓦と思われる。凸面は縦位のヘラナデ調整、凹面は布目痕が残る。16は木製の篦と思われる。角の丸い長方形断面を呈する棒の一端を斜めに切り落として尖らせている。

17 ～ 20は建物を構成するピットから、21・22は単独のピットから出土している。17はロクロ成形のかわらけ小皿で、薄手で深い形態をとるが、胎土中に混入物がわずかに含まれている。見込みの立ち上がりは深く、口縁部はわずかに外反している。18は鳴滝･向田産の仕上げ砥で、表裏の面を砥面とする。表面には褐色を呈する鉄分が付着している。鉄分は欠損面にも及んでおり、比較的新しい時期に付着したものと思われる。19は瀬戸窯の入子で、内底中央を1回ナデ、底部は回転糸切り無調整である。20は尾張型の山茶碗で常滑窯の製品。外面のロクロ目が強く、口唇部は内面側が摘み上がるような形態をとる。13世紀中葉頃の所産。21･22はロクロ成形のかわらけ小皿である。21は混入物を含む弱砂質胎土で、器壁は厚め、外形は椀型に近い。22はⅡ群で、内底が広く、見込みは折れて、わずかに外反しながら直線的に立ち上がる。外面は底部の範囲が判然としない。広い底部を持つと見えるが、狭い底部から角度をほとんど変えずに極端に開く体部下半にまで、糸が切り上がってしまったものかも知れない。その場合の底径は4.4cmである。

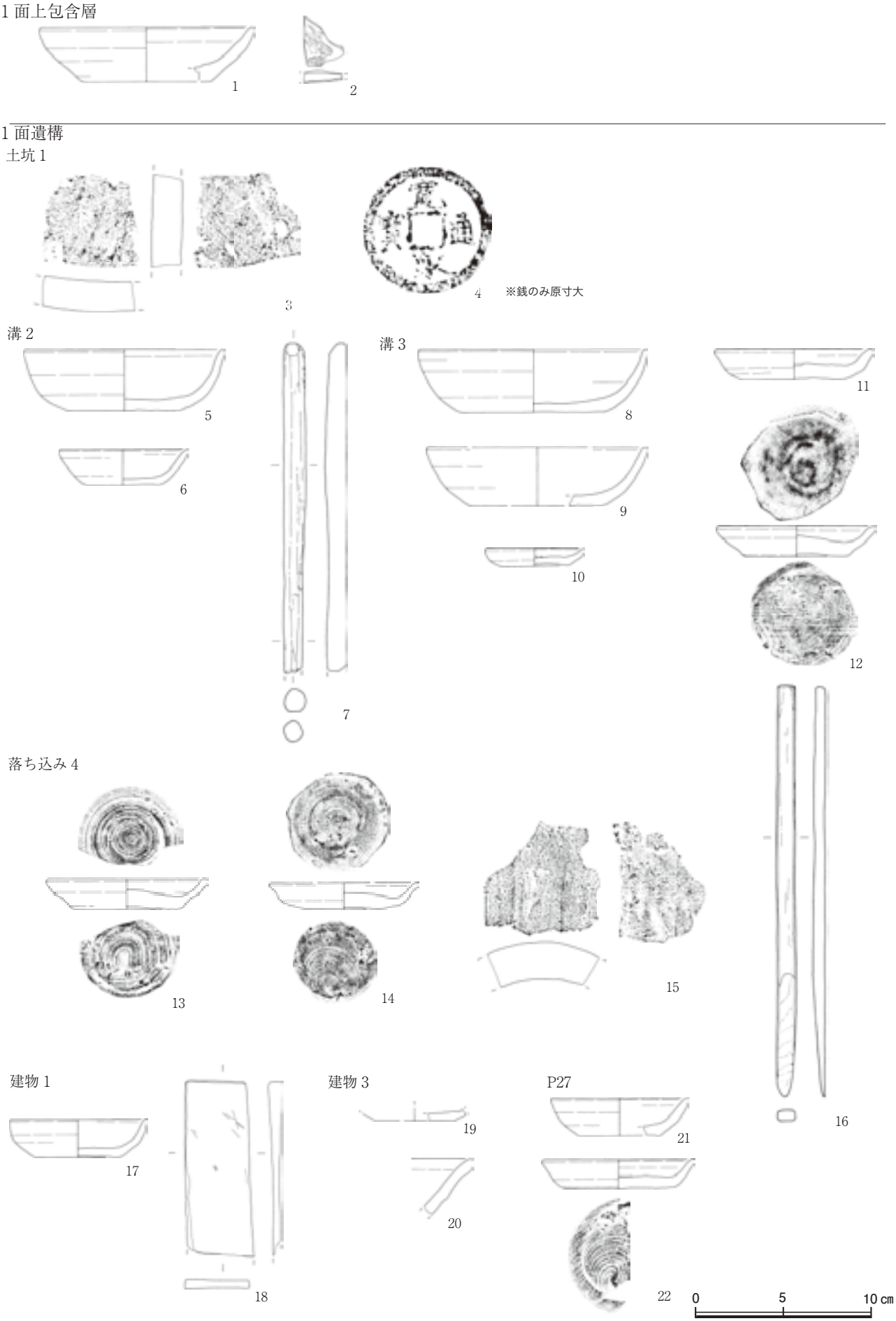


図21　1面上包含層、1面遺構出土遺物

２面遺構出土遺物（図22）

１～８は1面・落ち込み3の調査時に取り上げてしまったものだが、落ち込み5の覆土に含まれていた可能性がきわめて高い。１～３はロクロ成形のかわらけで、2・3はⅡ群である。1は大皿で、見込みの立ち上がりが深く内湾気味。2は底径が狭く背高で、見込みの立ち上がりは深い。体部は内湾して、口縁部下に括れを持って外反している。底部には糸切り後に指頭でナデられた跡が見られるが、調整を目的とした技法上のものとは思われない。3は底径が狭く、体部中位で折れて外反している。4・5は鉄製品で、4は鍋の取手部分と思われる。5.5㎜の孔が穿たれている。5は形態ドーナツ状で、断面は円形を呈するものと思われる。遺存状態が悪く詳細不明、用途を特定できない。6～8は木製品で、6は円盤、7・8は箸である。6の上下の刻みと見える部分は欠損部である。

9～13は建物・柱穴列を構成するピットから、14～20は単独のピットから出土している。9は平瓦で凹面は粒子の細かい離れ砂がよく残る。乾燥時の重ね置きにより、斜格子叩きが転写されている。側端・側端凹面側角は面取りされ、側端にはミガキ気味の丁寧なナデ調整が施されている。永福寺Ⅰ期・Ⅱ期に比定される水殿瓦窯の製品と思われる。10・11・13は木製品で、10は角柱状のものの端部を削り尖らせたもの。11は板の端部を丸鑿のような工具で5～6度彫り込み、斜めに落としている。側縁は先端寄りの一箇所が丸く穿たれている。12は漆器碗で、黒色の総漆塗りが施された製品である。13は板目に採った材を加工したもので径1.5～2㎜の穴が貫通している。裏面は剥離面である。用途は不明。14はロクロ成形のかわらけ大皿で、見込みは深く立ち上がり、口縁部は摘まれて尖り気味に収まる。15は常滑窯の片口鉢Ⅰ類である。丁寧なナデ整形が施され、口縁部は肥厚している。16～20は木製品で、17は箸、それ以外は柾目採りされた薄い板状を呈するもので、いずれも用途を明確にできない。16は板折敷の残欠かもしれない。斜位の刃物痕が1箇所、木目に直交する横方向の細い圧痕が無数に見られる。18は経木折敷の残欠か。19･20は右側縁に刻みが入っている。表面には斜位の刃物痕がわずかに見られる。

２面構成土出土遺物（図22・23）

現地調査での検出順に従い、層位・出土位置ごとに、構成土上層・下層（土丹地形）直上・かわらけ溜まりに分けて提示している。23図1～10は上層から出土したロクロ成形のかわらけである。1は背低で内湾気味に開いて立ち上がる。2は底径が大きく背低、直立気味に立ち上がる。3～10はⅡ群に分類されるもの。3は粉質精良土で焼き上がり硬質、器壁が薄く、見込みは深く内湾して立ち上がる。4は底径が小さく背高で、体部中位下で折れて直線的に開いている。3･4ともに大皿に分類される法量を持っている。5～9は小皿。5は軟質気味胎土で内底中央が突出して厚い。体部に丸みがあり口縁部は外面直下を摘んで外反している。6～8は器壁が薄く、浅く開いて立ち上がるもので、6・7は緻密胎土で焼き上がり硬質。6は体部中位に弱い稜を持っている。8の底面は細い簾状の圧痕がわずかに見える。9は軟質気味で体部に丸みがある。10は胎土、調整にⅡ群かわらけと分類し得る特徴を持つが、全体の器形がつかめない。

23図11～29は構成土下層・土丹地形直上から出土したもの。11はてづくね成形で、口縁部と底部の境の稜が弱い。底部の指頭はナデ気味にはいる。12～14はロクロ成形の大皿で、いずれも底径が広く背低の器形をとる。12・13は体部に丸みがあり、14は直線的に開いている。14の内外面にはタール・ススが付着している。内底はべったり広く付着、外面は底部に2箇所熱の当たったと見える部分があり、周囲にススが拡散している。15・16はロクロ成形の小皿で、底径が大きく背低で体部中位に稜を持って外反している。17～20はⅡ群の大皿で、概ね浅い碗型を呈する。19は器壁が薄く、外面下位のロク

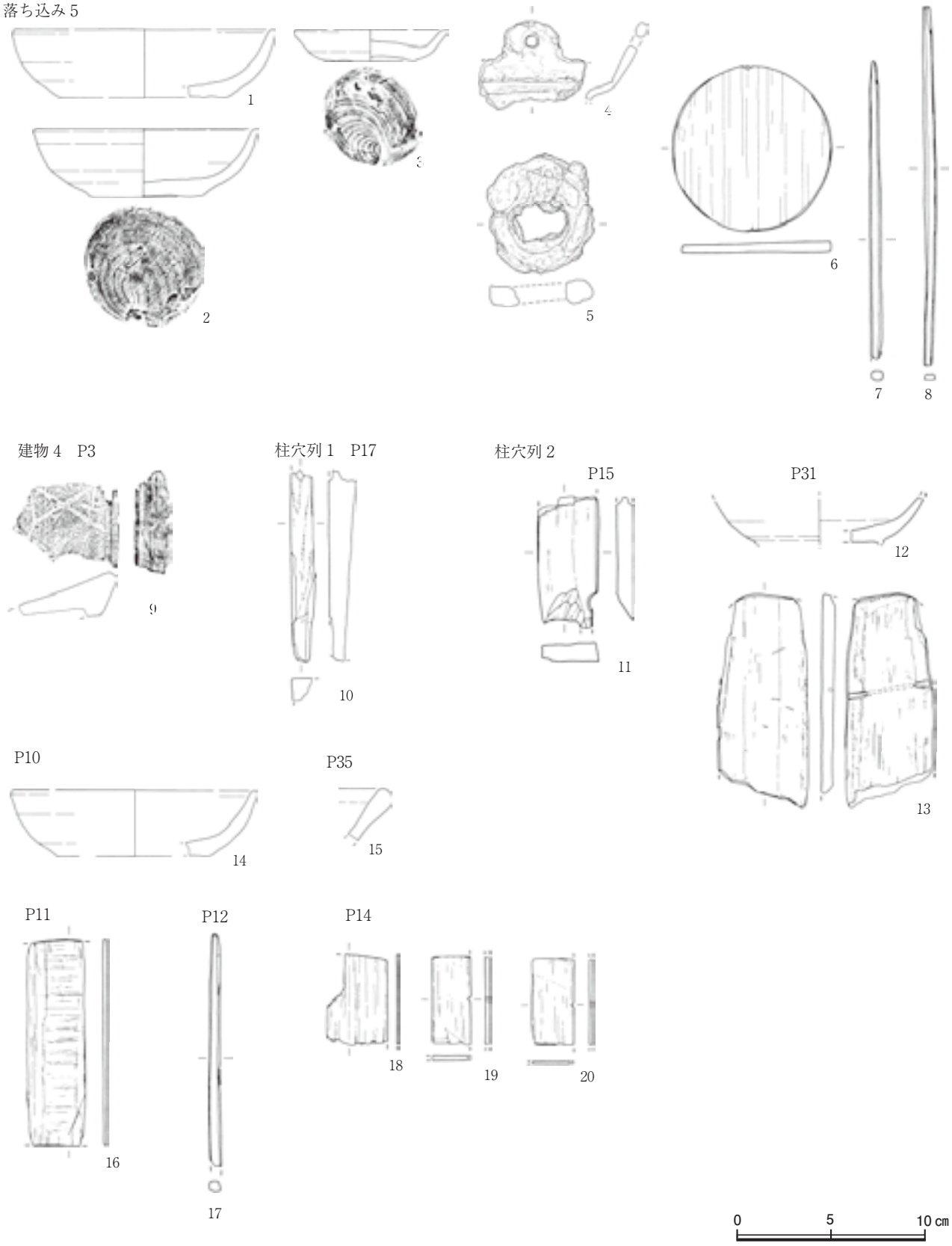


図22　２面遺構出土遺物

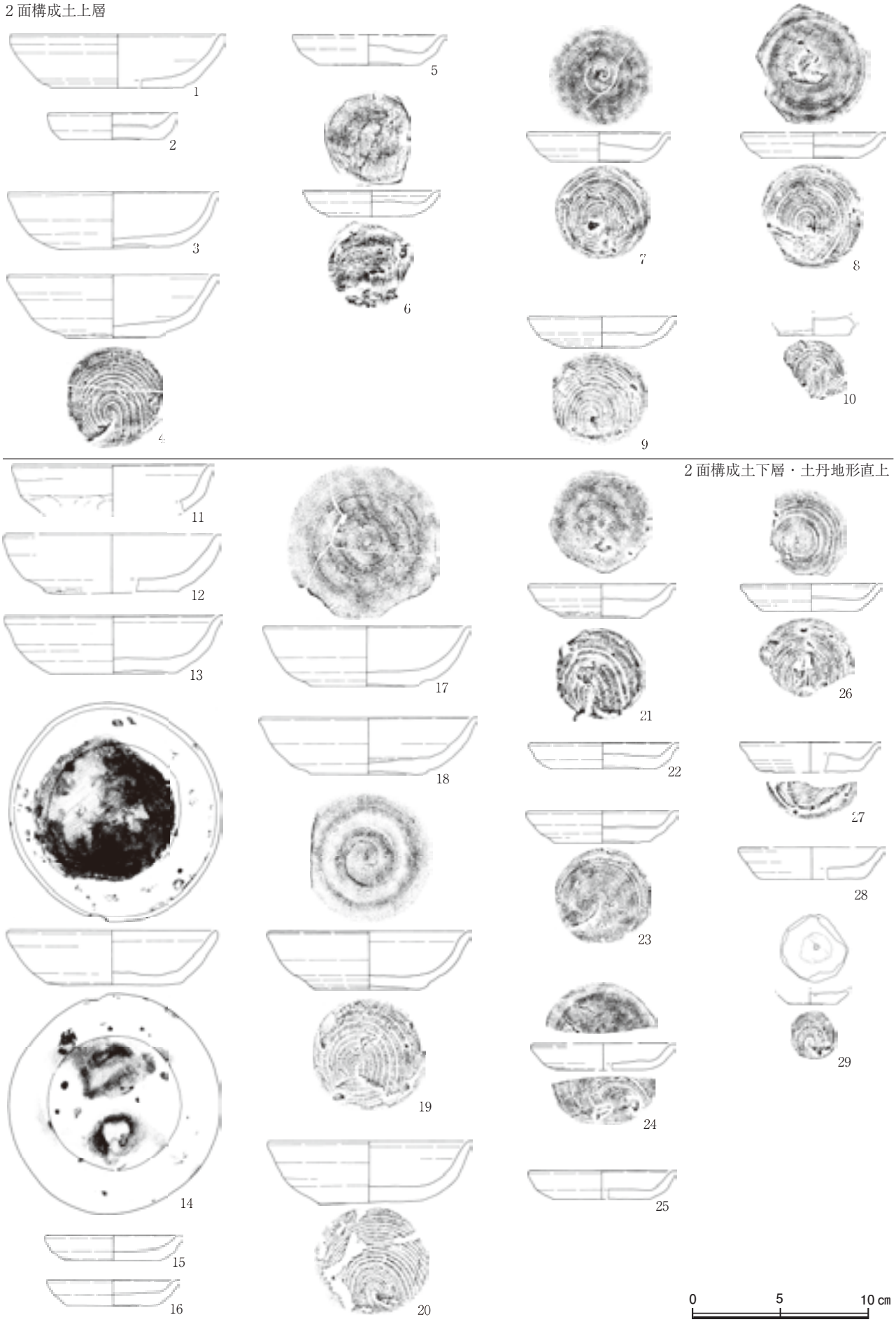
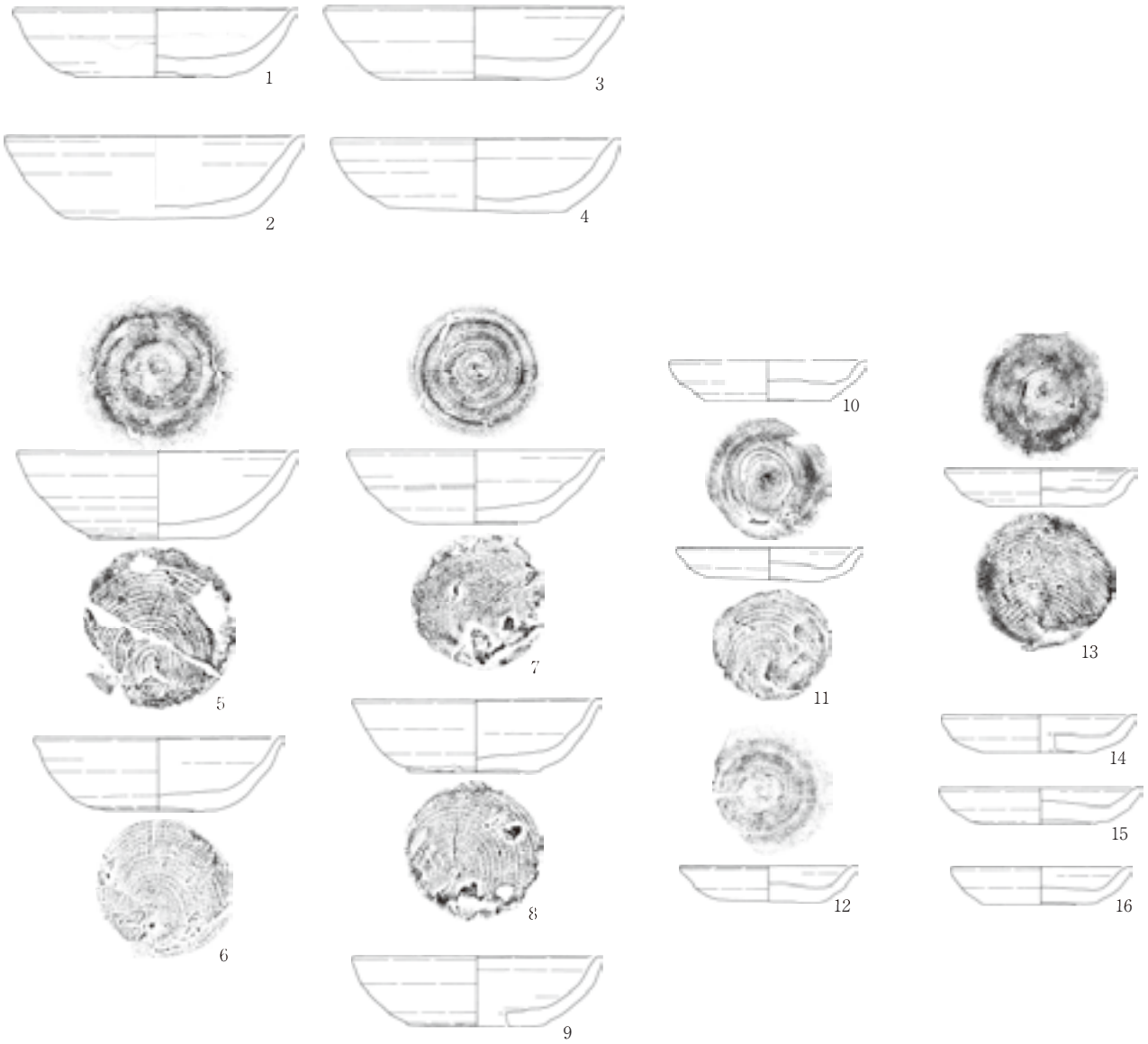
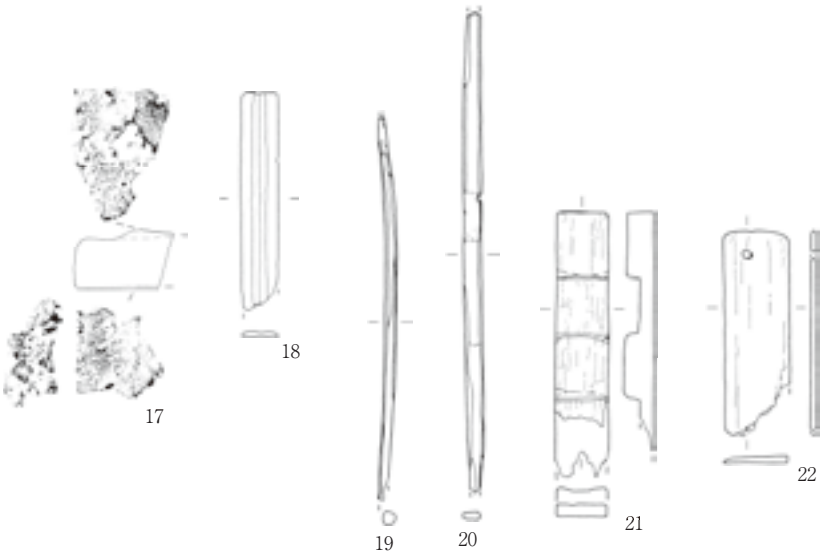


図23　2面構成土出土遺物（1）

２面構成土下層・かわらけ溜まり



２面構成土上層



２面構成土下層・土丹地形直上

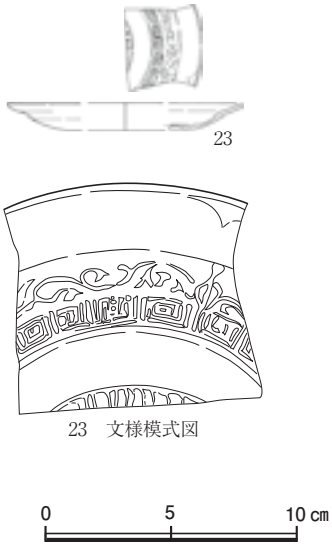


図24　２面構成土出土遺物（２）

ロナデが強いため、底部は突出気味。見込みは深く内湾して立ち上がり、口縁部は外反している。20は器壁厚めで側面はきれいな碗型を呈する。21～28はⅡ群の小皿。21は外面下位のロクロナデが強いため、底部が突出気味である。外面中位は強く張って、口縁部は直下を摘んで外反している。22～25は丸みがあって浅く開くもの。23は見込みの立ち上がりが深く口縁部が肥厚している。24は器壁が非常に薄い。25は欠損のため内外底部の調整が明らかでなく、器形も鎌倉で一般的な小皿に似ているが、残存底部に板状圧痕が見られないこと、胎土中の含有物の類似から一応Ⅱ群に含めた。26～28は直線的に開くもので、27は内底中央が突出して厚い。29は胎土の特徴からⅡ群と考えているが、全体の器形がつかめない。焼成後に内底中央に小穴を穿ち、周囲を削る加工がなされている。

24図1～16は構成土下層・土丹地形直上のかわらけ溜まりから出土したもの。1～4はロクロ整形のかわらけ大皿である。底径が大きく背低で、1・4は丸みがあり、2・3は直線的に開く。1は口縁部の内外表面が黒変しているが焼成時の焼きムラと思われる。5はⅡ群の大皿である。口径･底径比が大きく、深い碗型を呈する。外面はロクロ目がよく残る。6～9はⅡ群の中皿で、碗型を呈するもの。法量・器形に共通する点が多く、同じ規格で作られたものと思われる。10～16はⅡ群の小皿である。10・11は内底が広く、外面中位で屈曲して立ち上がる。12～16は体部に丸みがあって浅く開くもの。体部中位に弱い稜を持ち、12・13は口縁部が外反気味になる。

24図17～22は構成土上層から出土したもの。17は軒丸瓦で永福寺Ⅲ期瓦と思われる。瓦当部分は剥がれて欠損。凸面ナデ調整、凹面は剥離部分に細かい布目痕が残っている。18は骨製の笄である。19～22は木製品で、19・20は箸、21は格子子で、凸部・凹部は2.5㎝間隔で作り出され、凸部の高さは0.5～0.6㎝である。22は板目採りされた薄い板材で、径2㎜の孔が1箇所穿たれている。

23は構成土下層・土丹地形直上で出土した白磁の印花文皿である。内底中央の円形区画凸線内は条線で放射状に埋められるように見える。内底縁周の凸線から折り縁部までの区画は唐草の中心文が円周を分割、区画内は連続する雷文と唐草文が巡っている。口縁部内面は文様帯の分割線と同心円状の位置に花弁をあしらった小飾りが配されている。口唇部は露胎、底部外周には沈線が巡っている。

3面上包含層出土遺物（図25）

2面構成土下層の土丹地形層中、及び3面検出までに出土した遺物である。1は吉備系土師器碗で、外面口縁部から体部を横ナデ、底部は高台貼付け後ナデ調整が施されている。2は漆器碗で、黒色の総漆塗りが施された製品である。器壁が非常に薄く、体部下位は木部が腐食し変形している。3･4は鉄製品･釘である。

3面・井戸1出土遺物（図25）

5はロクロ成形のかわらけ大皿で､内底の一部にタールのような物質が付着している（写真図版10）が、灯明皿の使用痕としては、付着位置に不安がある。器壁が厚く、背低で外面中位に張りを持つ。口縁部は弱く外反している。6は漆器皿で、黒色の総漆塗りが施された製品である。体部にはロクロを使用しない面取り部分が4箇所確認される。底部中央に2次加工と見られる四角い孔が穿たれている。7～21は木製品で、7は経木折敷の残欠、8～20は箸、21は草履芯である。箸は断面が正方形に近いものと、扁平で長方形に近いものとに分けられそうである。20は断面長方形を呈する材の側縁角を丁寧に落として加工している。21は表面に藁状繊維の圧痕が残る。

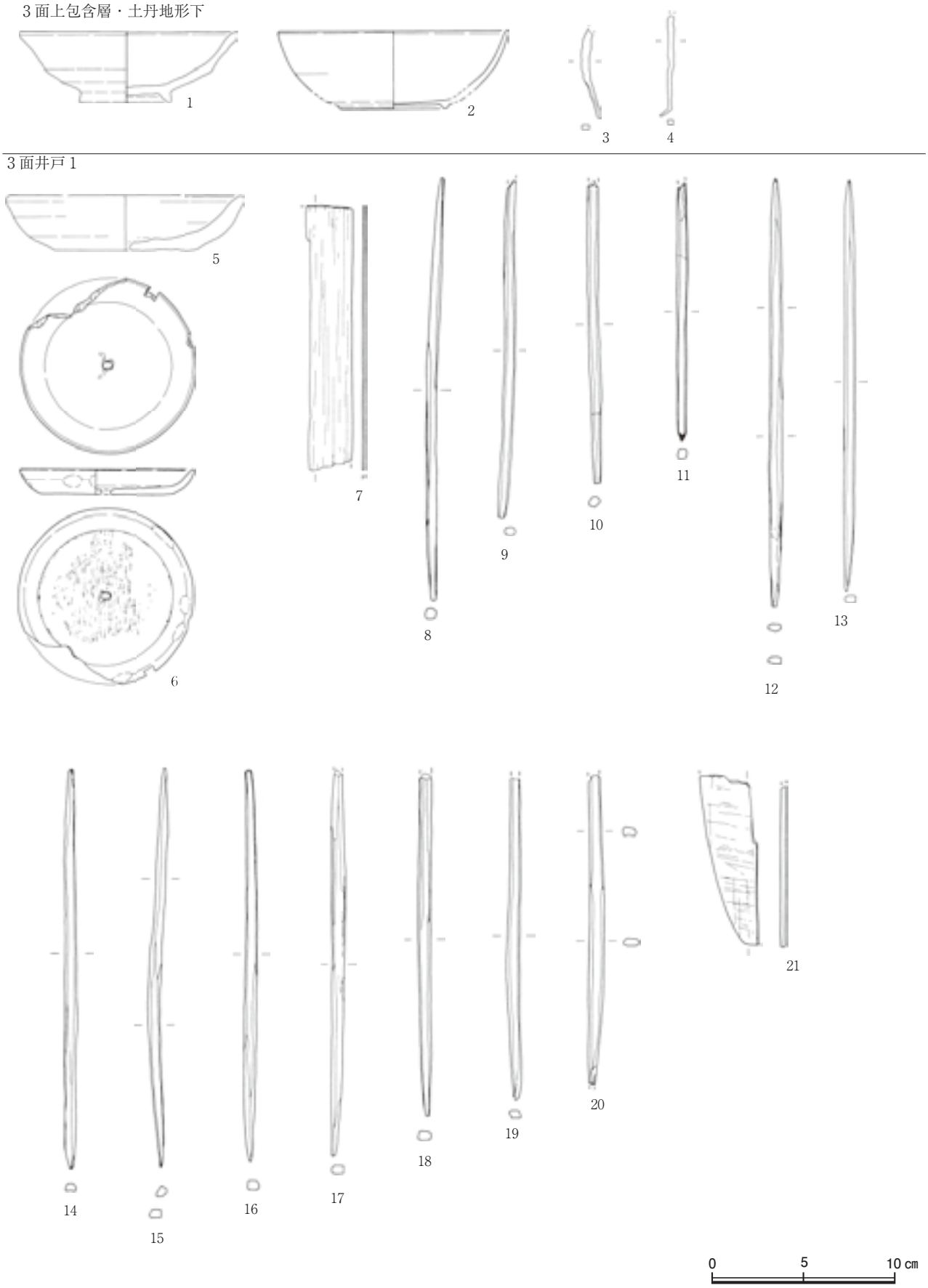

3面上包含層・土丹地形下
1
2
3
4
3面井戸1
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
0
5
10 cm

図25　井戸1出土遺物

溝１出土遺物（図26 ～ 29）

1は溝1下層の溝本体から出土したもの。Ⅱ群かわらけの中皿である。胎土は本遺跡出土の他のⅡ群と異なり、色調橙色を呈し、焼き上がりは硬質だが粉質は強めに感じられる。器壁が非常に薄く、底径の小さい深い形状である。内底中央は凹んでナデ調整が1回施されている。底部の糸切りは糸幅が細い。

図26－2から図29－89までは溝1上層の木器溜まりでまとまって出土したもの。2・3はロクロ成形のかわらけ大皿で、背低の形態をとる。2は直線的に開いて外面中位上の弱い稜を経て口縁部は外反気味。3は器壁厚めで丸みを持って開いている。4は骨製の笄である。以下は全て木製品である。5・6は板杓子で板目に採った材を整形している。7 ～ 13は経木折敷、14は板折敷か。俎板に転用されたものと思われ、刃物痕の残るものが多い。7の先端角と14の右側の一部は炭化している。12は長さが6.8cmと短いが、小型品として折敷に含めた。15 ～ 43は箸で、27までは両端の残るもの、28 ～ 36は先端がわずかに欠けるものの、さほど長さが変わらないものを図示した。27は身に所々炭化する部分が見受けられる。37 ～ 43は欠損部が炭化するもの。44 ～ 46は菜箸と思われる。太さが0.8 ～ 0.9cm程度のものをまとめた。46は上端が丸く整形されて終わっており、片口箸と思われる。47 ～ 56は用途不明の棒状のもの。47 ～ 49は断面の丸いもの。48・49は下端が炭化して終わる。50・51は断面がかまぼこ状になるもの。51は円柱状のものを縦に裂いたものと見え、その後の仕上げが行なわれずに裂け口を残している。52は上側断面かまぼこ状、下側にいくに従い方形断面に整形され細く削られている。53は上側方形、下側円形断面を呈するもので、下端は上半を斜めに切り落とされている。54は傾いだ方形断面を呈するもので、下端は炭化して終わる。55・26は一辺0.4cmの細い角柱状のもの。57 ～ 73には先端を尖らせた何らの工具と思われるものをまとめた。57 ～ 63は篦。58は上端欠損部、62は下端の篦先が炭化している。64は折れた篦を2時加工したものか。形代などの可能性も考えられる。65 ～ 68は小型の篦と考えられるもの。65は上端の左右角を落として三角形に加工、下端は細く尖らせている。66･67は幅0.6 ～ 0.65cm、厚さ0.25 ～ 0.3cmの薄い棒状のもので、66は上端を表裏から斜めに落として尖らせている。下端は細く削られている。67は先端を欠損するも上端は表から斜めに落とし、下端は細く削り尖らせるものと思われる。68は端から下端に向かい厚さを減じるもので、下端を斜めに落としている。69は上下端を表裏から斜めに落として尖らせるもの。70は下端を三角形に加工し、表裏から斜めに落として尖らせるもの。71は経木折敷の残欠にも見えるが、下端を表裏から斜めに落として両刃にしている。72は上側かまぼこ状断面、下側は扁平に薄く削られ下端を斜めに落として尖らせている。73は角柱の下端を削り尖らせるもの。左側面に1箇所、刃物痕が残る。74は板折敷を転用したものか。板状の材の下端を表裏から斜めに落として尖らせている。裏面には刃物痕が残る。右側から下端角にかけては炭化している。75は下駄、76 ～ 80は草履芯である。75は連歯下駄で、左緒穴に木製の楔が打たれている。台部後方には径0.9cmの「◉」状の焼印が7箇所押されている。81は櫛。棟と歯の間に切り込みの入らない作りである。82・83は刀子の柄であろう。83は径2mmの目釘穴が穿たれる。刳り込み面から欠損面にかけては炭化している。84は機織り具･杼と思われる。85 ～ 87は何らの道具になるものかもしれない。85は角柱状の材の表面に斜めに刻みを入れるもの。刻み谷間の平坦部幅は下端で0.5cm、刻み上端は0.8cm程度か。表面に2箇所斜め方向の刃物痕が残っている。86は表裏に窓を持つ穴が、下端から穿たれた穴に貫通している。紐などを通して使ったものか。上下端は表裏から切り込みを入れて折り切っている。87は側面の丸い扁平な材の下端を表裏から抉ってV字状にしたもの。表面に斜め方向の刃物痕を1箇所確認。88は柾目に採った薄い材（経木？）を加工したもの。欠損部に沿って斜め方向の刃物痕が2条見られる。89は板目に採った材を加工したもの。88・89とも用途不明である。

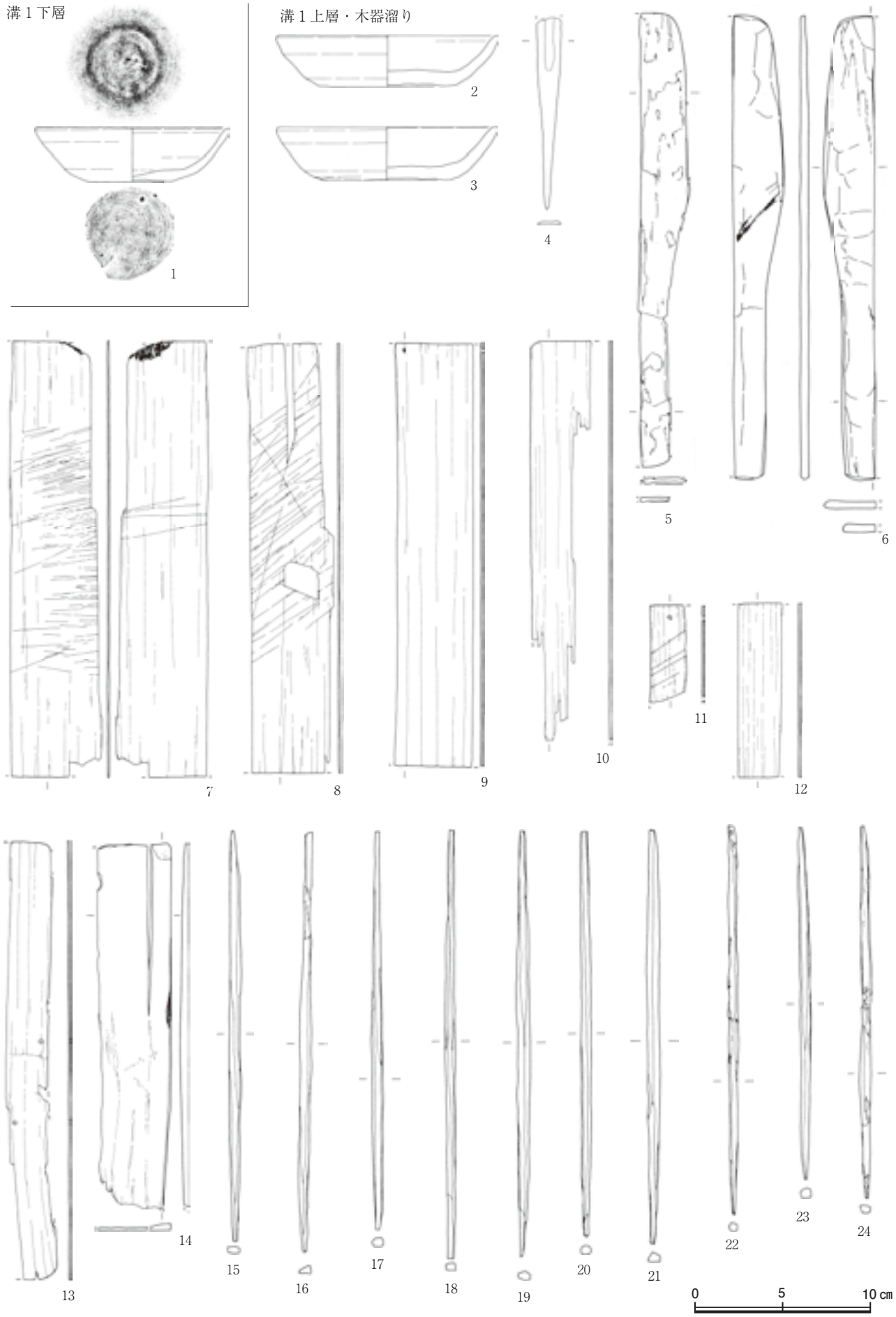

溝１下層
溝１上層・木器溜り
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
0
5
10 cm

図26　溝１出土遺物（１）

25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
0
5
10 cm

図27　溝１出土遺物（２）

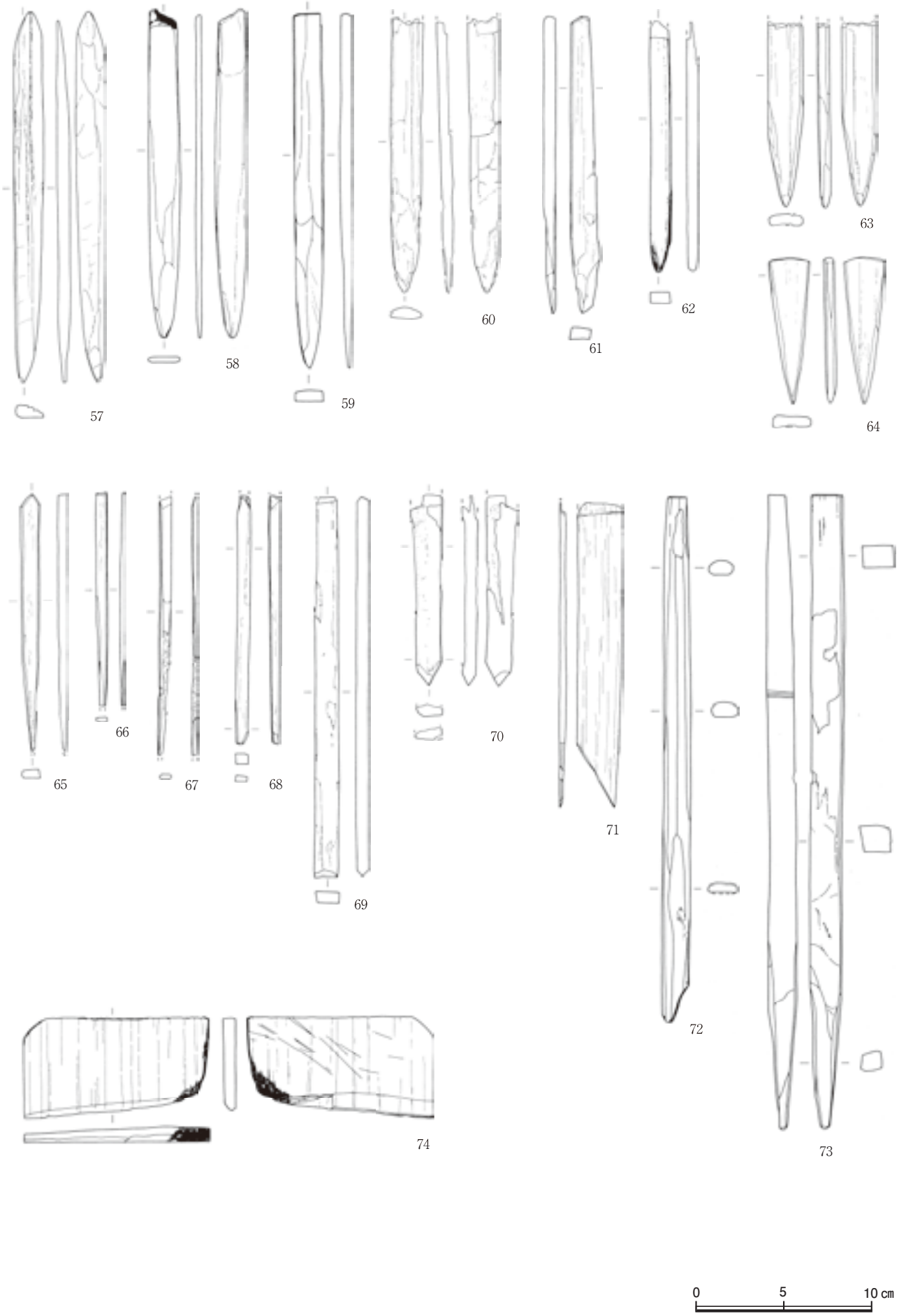


図28　溝１出土遺物（３）

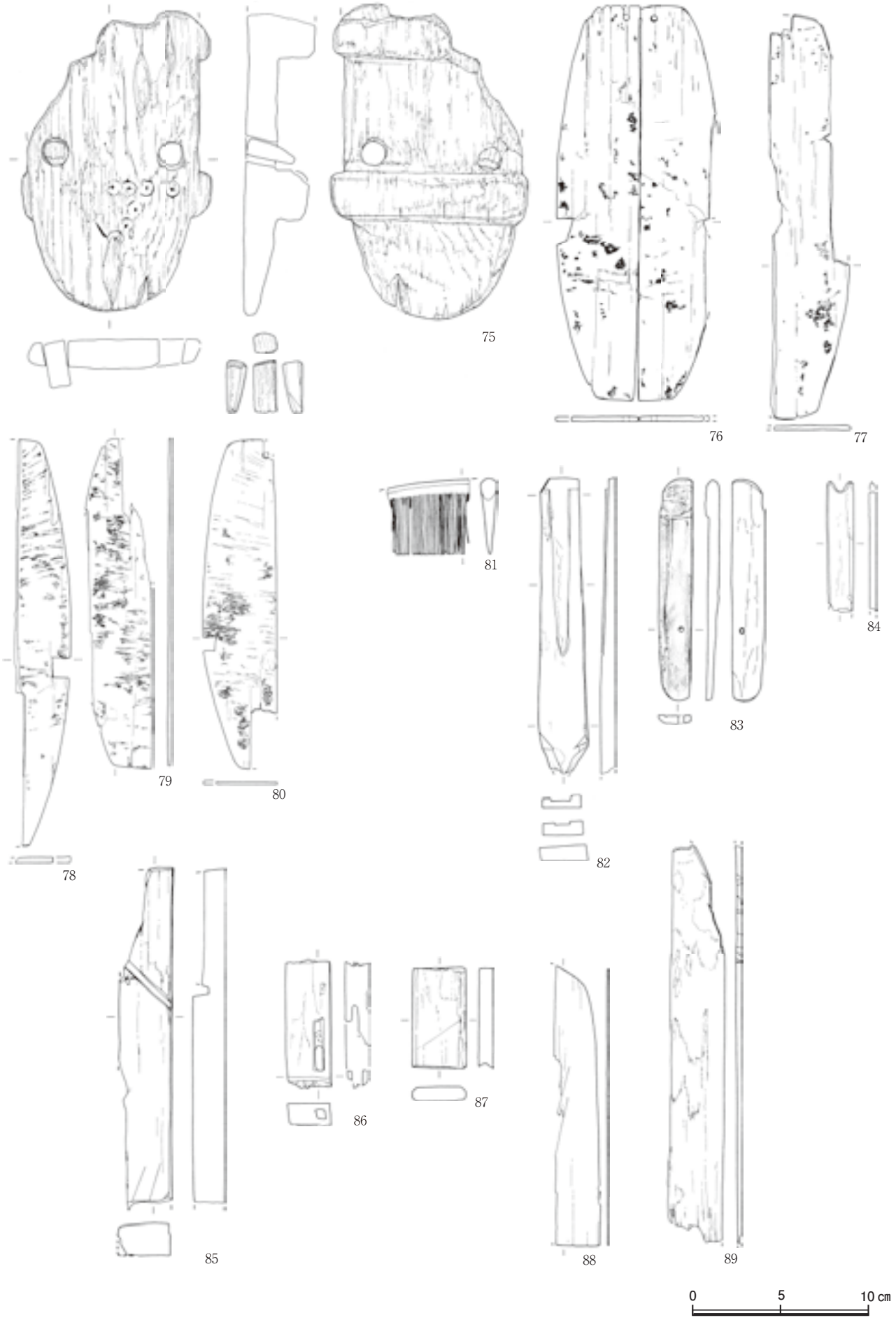


図29　溝１出土遺物（４）

３面構成土出土遺物（図30）

1はロクロ成形のかわらけ小皿である。底径大きく背低で、器壁薄く見込みは折れて直立気味に立ち上がる。口唇部から内面にススが付着している。2～4は木製品である。2は草履芯で繊維痕がかすかに残る。3は表面の側縁角を面取りしている。上下端は角を斜めに面取りし、端から2cmほどの所に溝を穿っている。作りは丁寧で整っている。調度品の類であろうか。

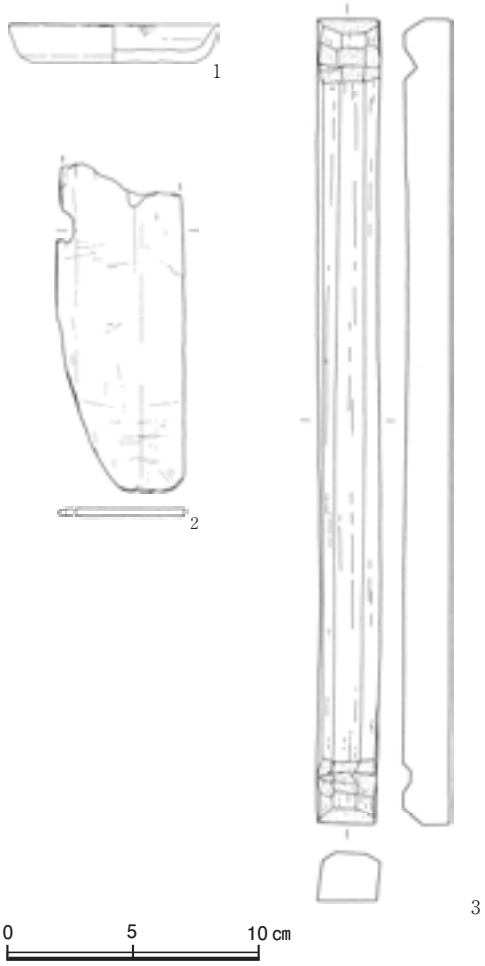


図30　３面構成出土遺物

第３節　古代以前の遺物（図 31）

1は調査区壁土層（図4）41層から出土した。弥生時代後期の壺型土器の口縁部片である。内外面ヘラナデ調整、口唇部は単節LR縄文が施文され、口唇部下端の押捺は縄文原体を使用しているように見える。内面及び外面頸部は赤彩されている。2は土師器・甕である。古墳時代後期で6世紀代の所産と思われる。溝4の覆土中で検出されたものだが、溝4の時期を示しているとは思われない。内面頸部から外面は横位ヘラナデ、内面肩部は指頭痕を残して横位のハケ調整が施されている。3は土師器・甕の口縁部片で、内外面ナデ調整。7世紀後半の所産と思われる。4は古墳時代中期の高杯で脚裾片。外面及び内面脚裾付近まで赤彩、ミガキ調整が施されている。5は須恵器・甕の口縁部片で古墳時代後期以降の所産である。

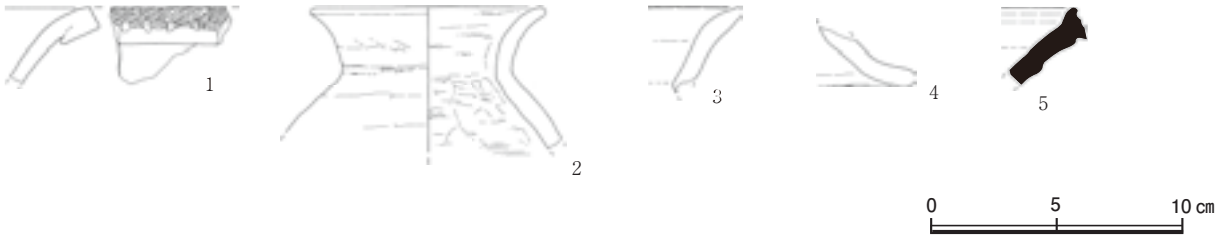


図31　古代以前の遺物

表10　遺物観察表（1）

図	No.	出土位置	種別	残存率	（口径・底径・器高）（長さ・幅・厚さ）			色調・胎土・釉薬・（重さ）外・備考
20	1	表土	かわらけ	口1/3 底1/2	(13.5)	7.5	3.8	淡橙色・混入物少なめ弱粉質土
20	2	表土	かわらけ	口1/4 底2/5	(12.6)	(7.4)	3.4	にぶい淡橙色・混入物含む弱粉質土
20	3	表土	かわらけ	口～底 1/3	(7.4)	(5.6)	1.3	にぶい淡橙色・混入多い弱砂質土
20	4	撹乱	かわらけ	口～底 1/5	(8.0)	(6.2)	2.3	橙色・混入物含む弱砂質土 灯明皿
20	5	表採	かわらけ	口3/5 底全	8.6	5.8	1.8	Ⅱ群　淡褐色・弱砂質良土 内底：弱ナデ2回　糸切り→細い簾状圧痕
20	6	表土	龍泉窯系 青磁蓋	口縁部片				素地：白色微粒子含む明灰白色緻密土 釉調：薄緑色透明・光沢あり
20	7	表土	肥前伊万里 染付碗	口1/6	(7.8)			素地：白色砂質土 釉調：白色透明・細かい貫入／筒型
20	8	表土	肥前伊万里 染付碗	口1/6 底1/2	(11.5)	(6.1)	6.6	素地：微細透明粒子含む灰色砂質土 釉調：青味灰白色透明／広東型
20	9	表採	瀬戸窯 折縁深皿	口縁部片				素地：黄味灰白色砂質土（硬質） 釉調：薄緑色灰釉・細かい貫入
20	10	表土	瀬戸・美濃系陶器 灯明皿	口縁部片				素地：淡黄色弱砂質土 釉調：濃茶色鉄釉
20	11	表土	瀬戸・美濃系陶器 壺	口～体部 片				素地：気孔ある淡黄白色砂質土 釉調：淡黄白色透明釉・細かい貫入
20	12	表土	常滑窯　甕	口縁部片				黒灰色・弱砂質土 器表：暗茶色
20	13	表土	備前窯　甕	口縁部片				赤色・弱砂質土 器表：濃茶～暗赤色
20	14	撹乱	堺系陶器 擂鉢	口1/5 底1/8	(30.8)			灰色・白濁粒多い弱粘質粗土（硬質） 器表：黒～黒赤色
20	15	表土	丸瓦	残欠	5.8 ～	5.6 ～	2.0	明灰色・砂質土（硬質） 器表：黒灰色　凹面鉄分付着
20	16	撹乱	丸瓦	残欠	8.2 ～	7.3 ～	2.2	明灰色・砂質土（硬質） 器表：黒灰色
20	17	表土	平瓦	残欠	7.8 ～	6.4 ～	1.9	白灰色・砂質土（軟質気味） 器表：黒灰色
20	18	表土	木製品 箸		19.9	0.5	0.55	
20	19	撹乱	木製品 円板？		7.1 ～	1.6 ～	0.3	
20	20	表採	木製品 草履芯		23.0	9.6	0.3.	
20	21	表土	木製品 草履芯		23.9	5.5 ～	0.2	
20	22	撹乱	木製品　端材		8.2	3.3 ～	1.9	
20	23	撹乱	木製品　端材		5.2	5.1	2.0	
21	1	1面	かわらけ	口～底 1/4	(12.0)	(7.2)	3.1	褐色・混入物少なめ弱砂質土
21	2	1面	龍泉窯系青磁 双魚文鉢	底部片				素地：明白色精良 釉調：緑青色透明・貫入

遺物観察表（2）

図	No.	出土位置	種別	残存率	（口径・底径・器高）（長さ・幅・厚さ）			色調・胎土・釉薬・（重さ）外・備考
21	3	1面　土坑1	平瓦	残欠	5.2～	5.2～	1.7	灰白色・白色粒子含む砂質土（硬質）
21	4	1面　土坑1	銅製品　銭	完形	径2.4 厚0.05 孔径0.6			重さ1.9ｇ　寛永通宝
21	5	1面　溝2	かわらけ	口1/8 底全	(11.2)	6.4	3.5	淡橙色・混入物少なめ粉質良土
21	6	1面 溝2裏込	かわらけ	口1/5 底6/7	(7.2)	4.2	2.0	淡橙色・混入物少ない粉質良土
21	7	1面 溝2裏込	木製品 用途不明		18.7～	1.0～1.2	0.9～1.3	
21	8	1面　溝3	かわらけ	口1/6 底1/3	(12.8)	(8.0)	3.6	淡橙色・混入物少ない粉質良土
21	9	1面　溝3	かわらけ	口1/8 底1/3	(12.3)	(7.5)	3.3	橙色・混入物少ない粉質良土
21	10	1面 溝3裏込	かわらけ	口～底 3/4	5.4	3.8	1.0	淡褐色・混入物少ない粉質土
21	11	1面 溝3裏込	かわらけ	口～底 4/7	8.7	5.9	1.7	Ⅱ群　淡褐色弱粉質良土 内底：弱ナデ1回
21	12	1面 溝3裏込	かわらけ	口1/4 底2/3	(8.7)	6.1	1.7	Ⅱ群　淡褐色粉質精良土（堅緻） 内底弱ナデ2回　糸切り→細い簾状圧痕
21	13	1面 落ち込み4	かわらけ	口2/5 底1/2	(8.8)	5.8	1.7	Ⅱ群　褐色粉質精良土（堅緻） 内底無調整　糸切り糸幅：広い
21	14	1面 落ち込み4	かわらけ	口1/ 底全	(8.3)	4.5	1.5	Ⅱ群　灰白色粉質精良土（堅緻） 内底無調整
21	15	1面 落ち込み4	丸瓦	残欠	6.4～	6.3～	2.0	橙褐色・白色粒子含む砂質土（硬質） 器表：灰色
21	16	1面 落ち込み4上層	木製品　箆		23.1	1.1	0.65	
21	17	1面　建物1 P22	かわらけ	口2/5 底1/2	(7.6)	4.9	2.1	淡褐色・混入物少ない粉質良土
21	18	1面　建物1 P23	石製品　砥石	下端欠損	(9.85)	3.7	0.75	鳴滝向田産　仕上げ砥
21	19	1面　建物3 P18	瀬戸窯 入れ子	底部片		(4.6)		灰色・砂質土
21	20	1面　建物3 P20	尾張型 山茶碗	口縁部片				灰白～灰色・長石粒・黒色粒含む砂質土
21	21	1面　P27	かわらけ	口～底 2/7	(7.7)	(4.5)	2.1	淡褐色・混入物少なめ弱砂質土
21	22	1面　P27	かわらけ	口～底 2/3	(8.4)	(6.3)	1.6	Ⅱ群　淡褐色・弱粉質良土 内底無調整　糸切り糸幅：広い
22	1	2面 落ち込み5	かわらけ	口1/8 底1/4	(13.7)	(9.0)	3.6	橙色・混入物含む弱砂質土
22	2	2面 落ち込み5	かわらけ	口1/8 底全	(11.7)	6.3	3.6	Ⅱ群　淡褐色・弱粉質良土 内底無調整　糸切り糸幅：広い→指頭ナデ
22	3	2面 落ち込み5	かわらけ	口1部 底全	(7.9)	4.7	1.6	Ⅱ群　淡褐色・弱粉質良土 内底無調整　糸切り糸幅：広い
22	4	2面 落ち込み5	鉄製品　鍋？					重さ57.7ｇ　取手孔径0.55

遺物観察表（3）

図	No.	出土位置	種別	残存率	（口径・底径・器高）（長さ・幅・厚さ）			色調・胎土・釉薬・（重さ）外・備考
22	5	2面 落ち込み5	鉄製品 用途不明		6.2	5.4	1.3	重さ92.9 g
22	6	2面 落ち込み5	木製品　円板		8.7	8.3	0.6～0.4	
22	7	2面 落ち込み5	木製品　箸		15.6～	0.6	0.5	
22	8	2面 落ち込み5	木製品　箸		18.8	0.6	0.35	
22	9	2面　建物4 P3	平瓦	残欠	3.8～	4.6～	1.9	灰白色・白色粒子含む弱粘質土(軟質) 器表：黒色
22	10	2面　柱列1 P17	木製品 用途不明		10.1～	1.2～	1.4～	
22	11	2面　柱列2 P15	木製品 用途不明		6.9～	3.0	1.0	
22	12	2面　柱列2 P31	漆製品　椀	底1/3		(6.7)		
22	13	2面　柱列2 P31	木製品 用途不明		11.2～	4.8～	0.55～ 0.7	
22	14	2面　P10	かわらけ	口1部 底1/4	(12.9)	(8.0)	3.5	にぶい橙褐色・混入物含む弱粉質土
22	15	2面　P35	常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部片				明灰色・長石粒含む砂質粗土
22	16	2面　P11	木製品 板折敷？		10.9～	3.0～	0.15～ 0.2	
22	17	2面　P12	木製品　箸		12.2～	0.6	0.5	
22	18	2面　P14	木製品 経木折敷？		4.8～	3.2～	0.1	
22	19	2面　P14	木製品 用途不明		4.5～	2.25～	0.18	薄板状加工品
22	20	2面　P14	木製品 用途不明		4.7～	2.0～	0.22	薄板状加工品
23	1	2面構成土 上層	かわらけ	口1/3 底1/2	(11.9)	7.5	3.0	橙色・混入物少ない弱粉質良土(硬質)
23	2	2面構成土 上層	かわらけ	口1/3 底3/5	(7.1)	5.9	1.5	橙色・混入物多い砂質土
23	3	2面構成土 上層	かわらけ	口3/4 底全	11.7	6.5	3.3	Ⅱ群　淡褐色・粉質精良土（硬質） 内底無調整　糸切り糸幅：広い
23	4	2面構成土 上層	かわらけ	口3/4 底全	11.6	5.5	3.6	Ⅱ群　淡褐色・粉質精良土（硬質） 内底無調整　糸切り糸幅：広い
23	5	2面構成土 上層	かわらけ	口1部 底2/7	(8.6)	(5.7)	1.7	Ⅱ群　淡橙色・粉質良土 内底無調整　糸切り糸幅：広い
23	6	2面構成土 上層	かわらけ	口1部 底3/4	(7.6)	4.8	1.4	Ⅱ群　淡褐～黒褐色・粉質精良土(堅緻) 内底弱ナデ2回　糸切り糸幅：広い →細い簾状圧痕
23	7	2面構成土 上層	かわらけ	口1/4 底全	(7.8)	5.1	1.7	Ⅱ群　淡橙～暗赤色・粉質精良土(堅緻) 内底無調整　糸切り糸幅：広い
23	8	2面構成土 上層	かわらけ	口2/7 底全	(7.9)	5.7	1.5	Ⅱ群　淡褐色・粉質精良土（堅緻） 内底弱ナデ1回　糸切り糸幅：広い →細い簾状圧痕

遺物観察表（4）

図	No.	出土位置	種別	残存率	（口径・底径・器高）（長さ・幅・厚さ）			色調・胎土・釉薬・（重さ）外・備考
23	9	2面構成土 上層	かわらけ	口1/3 底全	(8.2)	4.8	1.8	Ⅱ群　暗褐色・弱粉質良土 内底無調整　糸切り糸幅：広い
23	10	2面構成土 上層	かわらけ	底全		4.0		Ⅱ群　淡褐色・弱粉質良土 内底無調整　糸切り糸幅：広い
23	11	2面構成土 下層	かわらけ	口1/3	(11.2)			手づくね成形／淡褐色・混入物含む弱粉質土
23	12	2面構成土 下層	かわらけ	口～底 1/3	(12.0)	(7.6)	3.4	橙色・混入物含む弱砂質土
23	13	2面構成土 下層	かわらけ	口1/4 底2/3	(12.2)	7.0	3.3	橙色・混入物含む弱砂質土
23	14	2面構成土 下層	かわらけ	略完形	11.7	7.7	3.1	淡褐色・混入物含む弱砂質土 灯明皿
23	15	2面構成土 下層	かわらけ	口1/6 底1/4	(7.5)	(5.5)	1.4	淡褐色・混入物含む粉質土（軟質）
23	16	2面構成土 下層	かわらけ	口2/5 底全	(7.4)	5.1	1.4	暗褐色・混入物含む弱粉質土
23	17	2面構成土 下層	かわらけ	口1/4 底全	(11.6)	6.0	3.4	Ⅱ群　にぶい褐～橙色・弱粉質土 内底無調整
23	18	2面構成土 下層	かわらけ	口1/3 底3/4	(12.1)	6.5	3.2	Ⅱ群　暗褐色・弱粉質良土 内底無調整
23	19	2面構成土 下層	かわらけ	口1/4 底全	(11.2)	6.0	3.3	Ⅱ群　淡褐色・粉質精良土（硬質） 内底無調整　糸切り糸幅：広い
23	20	2面構成土 下層	かわらけ	完形	11.3	5.8	3.6	Ⅱ群　淡褐～暗褐色・粉質良土 内底無調整　糸切り糸幅：広い
23	21	2面構成土 下層	かわらけ	口1/4 底全	(8.1)	5.0	1.9	Ⅱ群　淡褐色・弱粉質良土 内底無調整　糸切り糸幅：広い
23	22	2面構成土 下層	かわらけ	口1/5 底1/4	(8.2)	(5.8)	1.5	Ⅱ群　淡褐色・弱粉質良土 内底弱ナデ１回
23	23	2面構成土 下層	かわらけ	口１部 底全	(8.3)	5.4	1.8	Ⅱ群　褐～暗褐色･弱粉質精良土(硬質) 内底無調整
23	24	2面構成土 下層	かわらけ	口1/6 底2/5	(7.9)	(5.5 ？)	1.9	Ⅱ群　淡橙色・粉質精良土（硬質） 内底弱ナデ2回まで
23	25	2面構成土 下層	かわらけ	口2/5 底1/4	(8.1)	(5.5)	1.6	Ⅱ群？　暗褐色・弱粉質良土 内底調整・糸切り幅：不明
23	26	2面構成土 下層	かわらけ	口1部 底1/3	(7.8)	5.7	1.6	Ⅱ群　淡褐色・粉質精良土（硬質） 内底弱ナデ１回　糸切り糸幅：広い
23	27	2面構成土 下層	かわらけ	口1部 底1/3	(7.9)	(5.6)	1.7	Ⅱ群　淡褐色・粉質精良土（硬質） 内底無調整　糸切り糸幅：広い
23	28	2面構成土 下層	かわらけ	口1部 底2/5	(8.1)	(6.0)	1.8	Ⅱ群　にぶい淡橙色・弱砂質良土 内底弱ナデ１回
23	29	2面構成土 下層	かわらけ	底全		3.8		Ⅱ群　淡橙色・粉質良土 内底ケズリ痕・小穴（２次加工）
24	1	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口～底 1/3	(12.3)	(7.0)	3.0	淡褐色・混入物多め弱粉質土
24	2	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口3/4 底全	12.9	7.9	3.7	淡褐色・混入物少なめ弱粉質土
24	3	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口～底 1/3	(12.9)	(8.2)	3.2	淡褐色・混入物含む弱粉質土

遺物観察表（5）

図	No.	出土位置	種別	残存率	（口径・底径・器高）（長さ・幅・厚さ）			色調・胎土・釉薬・（重さ）外・備考
24	4	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口1/3 底全	(12.5)	7.9	3.3	橙色・混入物多め弱砂質土
24	5	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口2/5 底全	(12.2)	6.1	4.0	Ⅱ群　淡褐色・弱粉質良土 内底無調整
24	6	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口1/2 底全	10.8	6.0	3.3	Ⅱ群　淡褐色・弱粉質良土 内底無調整
24	7	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	略完形	11.1	6.0	3.3	Ⅱ群　淡褐色・弱粉質良土 内底無調整
24	8	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	略完形	10.7	6.0	3.3	Ⅱ群　淡褐色・弱粉質良土 内底無調整
24	9	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口～底 2/7	(10.8)	(6.0)	3.2	Ⅱ群　淡褐色・弱粉質良土 内底無調整
24	10	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口1部 底3/4	(8.4)	5.0	1.8	Ⅱ群　淡褐色・粉質精良土（硬質） 内底無調整
24	11	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口1部 底全	(7.9)	5.0	1.5	Ⅱ群　淡褐色・粉質精良土（硬質） 内底弱ナデ1回
24	12	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口1/3 底3/5	7.7	4.7	1.7	Ⅱ群　暗褐色・粉質精良土（硬質） 内底無調整
24	13	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口3/4 底全	8.4	5.2 ？？	1.6	Ⅱ群　淡褐色・弱粉質良土 内底無調整
24	14	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口～底 1/3	(8.3)	(5.0)	1.7	Ⅱ群　にぶい淡褐色・弱粉質良土 内底無調整
24	15	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口1/3 底1/2	(8.7)	5.0 or 6.0	1.6	Ⅱ群　淡褐色・弱粉質良土 内底弱ナデ1回
24	16	2面構成土 かわらけ溜	かわらけ	口1/3 底3/5	(7.7)	5.0	1.7	Ⅱ群　淡褐色・弱粉質良土 内底無調整　糸切り糸幅：広い
24	17	2面構成土 上層	軒丸瓦	残欠	4.5～	5.2～	2.3	淡橙色・白色粒多い砂質土（気孔多く軟質） 器表：暗灰色
24	18	2面構成土 上層	骨製品　笄	先端欠損	8.6～	1.45	0.25	
24	19	2面構成土 上層	木製品　箸		15.2～	0.5	0.5	
24	20	2面構成土 上層	木製品　箸		18.9～	0.7	0.35	
24	21	2面構成土 上層	木製品 格子子		13.5～	2.0	1.15	
24	22	2面構成土 上層	木製品 用途不明		8.1	2.5	0.15～ 0.3	
24	23	2面構成土 下層	白磁印花文皿		(9.4)	(4.5)	1.1	素地：白色緻密土 釉調：白色透明
25	1	3面	吉備系 土師器碗	口1/2 底1/4	11.7	(4.8)	3.9	黄白色～暗灰色・弱砂質土 胎芯：暗灰色
25	2	3面	漆製品　椀	口1/4 底2/5	(12.5)	(5.9)	(4.2)	
25	3	3面	鉄製品　釘		(4.9)	0.4	0.25	1.8 g
25	4	3面	鉄製品　釘		(5.7)	0.3	0.25	1.7 g
25	5	3面 井戸1	かわらけ	口～底 2/5	(12.6)	(7.8)	3.0	にぶい淡橙色・混入物含む弱砂質粗土

遺物観察表（6）

図	No.	出土位置	種別	残存率	（口径・底径・器高）（長さ・幅・厚さ）			色調・胎土・釉薬・（重さ）外・備考
25	6	3面 井戸1	漆製品　皿	口1/4欠	9.4	7.3	1.4	底部穿孔　0.5×0.3
25	7	3面 井戸1	木製品 経木折敷		14.3～	2.5～	0.08	
25	8	3面 井戸1	木製品　箸		23.0	0.6	0.6	
25	9	3面 井戸1	木製品　箸		18.4～	0.55	0.45	
25	10	3面 井戸1	木製品　箸		16.5～	0.6	0.6	
25	11	3面 井戸1	木製品　箸		14.0～	0.5	0.55	下端：炭化
25	12	3面 井戸1	木製品　箸		23.3	0.7	0.4	
25	13	3面 井戸1	木製品　箸		22.4	0.6	0.4	
25	14	3面 井戸1	木製品　箸		21.8	0.65	0.45	
25	15	3面 井戸1	木製品　箸		21.8	0.7	0.5	
25	16	3面 井戸1	木製品　箸		21.3	0.65	0.5	
25	17	3面 井戸1	木製品　箸		21.0～	0.7	0.45	
25	18	3面 井戸1	木製品　箸		18.7～	0.65	0.5	
25	19	3面 井戸1	木製品　箸		17.4～	0.7	0.45	
25	20	3面 井戸1	木製品　箸		16.9～	0.85～ 0.6	0.4	
25	21	3面 井戸1	木製品 草履芯		9.2～	3.1～	0.25	
26	1	3面 溝1下層	かわらけ	略完形	10.8	4.6	3.1	Ⅱ群　橙色・粉質精良土（堅緻） 内底1回ナデ
26	2	3面　溝1上層 木器溜	かわらけ	口1/3 底全	(12.3)	7.8	2.9	淡橙色・混入物含む弱砂質土
26	3	3面　溝1上層 木器溜	かわらけ	口2/5 底全	(12.4)	7.5	3.1	暗褐色・混入物含む弱粉質土
26	4	3面　溝1上層 木器溜	骨製品　笄	上半欠損	10.9～	1.35	0.2	
26	5	3面　溝1上層 木器溜	木製品 板杓子		25.65	2.7～	0.25	
26	6	3面　溝1上層 木器溜	木製品 板杓子		26.1	2.9～	0.45	
26	7	3面　溝1上層 木器溜	木製品 経木折敷		24.7	5.1～	0.08	表裏面：斜位の刃物痕・上端：炭化
26	8	3面　溝1上層 木器溜	木製品 経木折敷		24.3	4.8～	0.08	表裏面：斜位の刃物痕

遺物観察表（7）

図	No.	出土位置	種別	残存率	（口径・底径・器高）（長さ・幅・厚さ）			色調・胎土・釉薬・（重さ）外・備考
26	9	3面　溝1上層 木器溜	木製品 経木折敷		23.0	4.5～	0.1	
26	10	3面　溝1上層 木器溜	木製品 経木折敷		22.6～	3.4～	0.1	
26	11	3面　溝1上層 木器溜	木製品 経木折敷		5.5～	2.0～	0.05	小孔あり・表裏面：斜位の刃物痕
26	12	3面　溝1上層 木器溜	木製品 経木折敷		6.8	2.5～	0.1	
26	13	3面　溝1上層 木器溜	木製品 経木折敷		24.9	2.3	0.08	
26	14	3面　溝1上層 木器溜	木製品 板折敷？		20.5～	4.1	0.45	右測：炭化
26	15	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		23.3	0.65	0.45	
26	16	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		23.7	0.7	0.45	
26	17	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		22.6	0.6	0.5	
26	18	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		24.3	0.65	0.45	
26	19	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		24.2	0.75	0.55	
26	20	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		23.0	0.55	0.5	
26	21	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		23.5	0.7	0.5	
26	22	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		22.0	0.5	0.5	
26	23	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		20.0	0.6	0.55	
26	24	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		21.2	0.6	0.5	
27	25	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		22.0	0.7	0.6	
27	26	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		23.2	0.65	0.6	
27	27	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		23.5	0.65	0.45	身：炭化
27	28	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		(22.8)	0.5	0.5	
27	29	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		(23.7)	0.7	0.5	
27	30	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		(21.2)	0.6	0.35	
27	31	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		(22.6)	0.65	0.4	
27	32	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		(21.4)	0.6	0.6	身：炭化

遺物観察表（8）

図	No.	出土位置	種別	残存率	（口径・底径・器高）（長さ・幅・厚さ）			色調・胎土・釉薬・（重さ）外・備考
27	33	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		(23.9)	0.75	0.4	
27	34	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		(21.5)	0.65	0.5	
27	35	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		(20.5)	0.6	0.4	
27	36	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		(20.8)	0.55	0.4	
27	37	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		18.7 ～	0.65	0.4	欠損端：炭化
27	38	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		16.2 ～	0.7	0.35	欠損端：炭化
27	39	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		12.1 ～	0.6	0.45	欠損端：炭化
27	40	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		21.1 ～	0.65	0.4	欠損端：炭化
27	41	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		16.0 ～	0.6	0.3	欠損端：炭化
27	42	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		16.8 ～	0.55	0.55	欠損端：炭化
27	43	3面　溝1上層 木器溜	木製品　箸		9.5 ～	0.55	0.5	欠損端：炭化
27	44	3面　溝1上層 木器溜	木製品 菜箸？		20.2 ～	0.85	0.85	
27	45	3面　溝1上層 木器溜	木製品 箸？		16.1 ～	0.9	0.65	
27	46	3面　溝1上層 木器溜	木製品 菜箸？		14.8 ～	0.8	0.65	
27	47	3面　溝1上層 木器溜	木製品　円柱状 用途不明		5.7 ～	1.1	0.9	
27	48	3面　溝1上層 木器溜	木製品　円柱状 用途不明		13.8 ～	1.3	0.8	先端：炭化
27	49	3面　溝1上層 木器溜	木製品　円柱状 用途不明		10.2	2.2	1.9	先端：炭化
27	50	3面　溝1上層 木器溜	木製品　円柱状 用途不明		31.8 ～	0.9	0.65	
27	51	3面　溝1上層 木器溜	木製品　円柱状 用途不明		13.7 ～	0.9	0.5	先端：炭化
27	52	3面　溝1上層 木器溜	木製品　棒状 用途不明		22.4 ～	1.45	1.0	
27	53	3面　溝1上層 木器溜	木製品　角柱状 用途不明		22.2 ～	1.3	1.15	
27	54	3面　溝1上層 木器溜	木製品　角柱状 用途不明		13.3	1.05	1.0	先端：炭化
27	55	3面　溝1上層 木器溜	木製品　角柱状 用途不明		15.0 ～	0.4	0.4	
27	56	3面　溝1上層 木器溜	木製品 篦状工具		31.4 ～	0.45	0.35	

遺物観察表（9）

図	No.	出土位置	種別	残存率	（口径・底径・器高）（長さ・幅・厚さ）			色調・胎土・釉薬・（重さ）外・備考
28	57	3面　溝1上層 木器溜	木製品 箆状工具		21.0	1.6	0.7	
28	58	3面　溝1上層 木器溜	木製品 箆状工具		18.6	1.8	0.3	上端：炭化
28	59	3面　溝1上層 木器溜	木製品 箆状工具		20.1	1.6	0.65	
28	60	3面　溝1上層 木器溜	木製品 箆状工具		15.5 ～	1.8	0.65	
28	61	3面　溝1上層 木器溜	木製品 箆状工具		16.7 ～	1.5	0.65	
28	62	3面　溝1上層 木器溜	木製品 箆状工具		14.3 ～	1.1	0.65	先端：炭化
28	63	3面　溝1上層 木器溜	木製品 箆状工具		10.4 ～	2.0	0.7	
28	64	3面　溝1上層 木器溜	木製品 用途不明		8.3	2.3	0.65	
28	65	3面　溝1上層 木器溜	木製品 箆状工具？		14.5 ～	1.0	0.5	
28	66	3面　溝1上層 木器溜	木製品 箆状工具？		12.05 ～	0.6	0.25	
28	67	3面　溝1上層 木器溜	木製品 箆状工具？		14.7 ～	0.65	0.25	
28	68	3面　溝1上層 木器溜	木製品 箆状工具？		14.1 ～	0.7	0.6 ～ 0.3	
28	69	3面　溝1上層 木器溜	木製品 箆状工具？		21.5	1.35	0.7	
28	70	3面　溝1上層 木器溜	木製品 箆状工具？		10.9 ～	1.75	(0.75)	
28	71	3面　溝1上層 木器溜	木製品 箆状工具？		17.2 ～	2.5	0.3 ～ 0.35	
28	72	3面　溝1上層 木器溜	木製品 箆状工具？		29.5	1.0 ～ 1.5	0.8	先端：炭化
28	73	3面　溝1上層 木器溜	木製品 箆状工具？		35.7	1.7	1.6	
28	74	3面　溝1上層 木器溜	木製品 用途不明		5.7	10.5	0.8 ～ 0.45	裏面：刃物痕　測縁：炭化
29	75	3面　溝1上層 木器溜	木製品　下駄		17.1 ～	12.3	3.5	緒穴：楔遺存
29	76	3面　溝1上層 木器溜	木製品 草履芯		22.3	8.8 ～	0.3	
29	77	3面　溝1上層 木器溜	木製品 草履芯		22.9	4.3 ～	0.3	
29	78	3面　溝1上層 木器溜	木製品 草履芯		23.1 ～	3.1 ～	0.3	
29	79	3面　溝1上層 木器溜	木製品 草履芯		18.7 ～	3.7	0.15	
29	80	3面　溝1上層 木器溜	木製品 草履芯		17.6	4.1 ～	0.2	

遺物観察表（10）

図	No.	出土位置	種別	残存率	（口径・底径・器高）（長さ・幅・厚さ）			色調・胎土・釉薬・（重さ）外・備考
29	81	3面　溝1上層 木器溜	木製品　櫛		(4.2)	4.6～	0.9	
29	82	3面　溝1上層 木器溜	木製品 刀子・柄		16.7～	2.7～ 2.15	0.65～ 0.8	径2㎜目釘穴あり
29	83	3面　溝1上層 木器溜	木製品 刀子・柄		12.5	1.85	0.7	刳り込み面：炭化
29	84	3面　溝1上層 木器溜	木製品　杼		7.4～	1.5	0.35	
29	85	3面　溝1上層 木器溜	木製品 用途不明		19.3～	3.0	1.8	
29	86	3面　溝1上層 木器溜	木製品 用途不明		7.3	2.4	1.3	
29	87	3面　溝1上層 木器溜	木製品 用途不明		5.7	3.0	0.8	
29	88	3面　溝1上層 木器溜	木製品 用途不明		15.8	2.9～	0.1	表面：刃物痕
29	89	3面　溝1上層 木器溜	木製品 用途不明		22.3～	3.2～	0.3	
30	1	3面構成土	かわらけ	口1/5 底3/7	(8.1)	(6.1)	1.5	淡褐色・混入物含む弱砂質土 口縁部内外スス付着
30	2	3面構成土	木製品 草履芯		11.8～	5.0～	0.3	
30	3	3面構成土	木製品 用途不明		31.5	2.2～2.4	1.6～1.8	
31	1	調査壁土層 4 1層	壺型土器	口縁部片				淡褐色・砂粒（白色粒多い）含む／ 内外面：赤彩
31	2	溝4	土師器甕	口3/4	9.0			橙色・砂粒（白色粒・白針多い）含む
31	3	表土	土師器甕	口縁部片				黄橙味白色・細砂多い
31	4	3面	土師器高坏	脚部片				淡橙色・細砂少量／内外面：赤彩
31	5	表土	須恵器甕	口縁部片				暗灰色・白色小礫含む 器表：灰茶色

第五章　まとめ

第１節　古代

落ち込み１・２は、層位的に中世の開発以前の所産と思われるが、本文中でも述べた通り、人為的な遺構と言えるものかどうかわからない。覆土中からは古墳時代後期以降の土師器・甕の小片が出土しており、それ以降の年代を与えられるが、詳細な時期は不明である。

調査で発見された遺物は弥生時代後期から８世紀代のもので、中世期の遺構覆土や表土層に混入されたものが多い。調査区壁土層の41層から出土している弥生時代後期の壺（図31－１）は、小袋谷川の氾濫等理由により流入された可能性もあり、その層の堆積年代を示すかどうかはわからない。

第２節　中世

出土した遺物はかわらけと木製品が大半を占め、詳細な年代を伺える資料に乏しい。数少ない移入品をみると、3面上包含層出土の吉備系土師器碗（図25－1）、1面遺構出土の尾張型の山茶碗（図21－20）が13世紀中葉、2面遺構出土の常滑窯片口鉢Ⅰ類（図22－15）は13世紀第3四半期の所産である。瓦は水殿瓦窯の製品の他、永福寺Ⅲ期に比定されるもの（図21－15・図24－17）が1面遺構と2面構成土中から出土している。かわらけは「Ⅱ群」とした通常出土するものと異なるものが半数以上を占めるなど、相対的な年代を計れるものはわずかだが、手づくね成形のものは2面構成土中から出土した1点に限られ、ロクロ成形のものは胎土に混入物を含む背低気味のものが多い。その中で1面遺構からは「薄手丸深」に近い形態のもの（図21－5・6・17）などが出土しており、新しい要素が現れている。本調査地における中世期の開発年代は、最も旧い遺物を指標とすれば13世紀中頃となるが、それほど時期をさかのぼれるかわからない。3面・2面は13世紀後半代を中心に考えたい。2面は造成土中で1点出土している瓦を採れば13世紀後葉以降の可能性がある。1面は13世紀末から14世紀前半代と思われる。1面検出遺構の中で、土坑1、落ち込み3、単独ピット及び建物群については、第1生活面で開口している、より新しい時期の遺構と考えられ、表土層中で採集された常滑窯の甕口縁部片（図20－12）などの示す14世紀後半以降の年代を与えられるかもしれない。第1生活面に伴う溝2･3、落ち込み4は、それ以前（2面･3面）、以後（1面建物１～３など）の遺構と軸方向を違えており、この時期に周辺で地割りの変更等、変化があったことを示すもの思われる。その他、遺構の検出はなかったものの、表土層他より中世期終末頃から近世に至る時期の遺物が10点出土している。

遺物は中世期のものに限り集計表（表11）を作成した。また、3面溝1上層の木器溜まり出土のものについては、きわめて一括性の高いものと思われるため、組成割合を別表（表12）に示した。以下、今回の調査で得られた特記すべき成果として、本文中で「Ⅱ群」としたかわらけについて、これまでの検出例と比較しながらまとめておく。

第３節　Ⅱ群かわらけについて

今回の調査では発見されたかわらけの52.3％が本文中で「Ⅱ群」とした内外底面の調整が通常のものと異なるロクロ成形のかわらけであった。本調査地で出土したものに近しい特徴を持ったかわらけは、これまで今小路西遺跡内の（図32）の御成町200番2地点（以下地点1）･御成町171番1地点（以下地点2）で、まとまった量が出土している他、千葉地遺跡（地点3）の3面と4面、御成町625－3地点（地点4、御成小学校内）で少量報告されている。本調査地点を除く出土地はJR鎌倉駅の西方で、300m程の範囲

図32　Ⅱ群かわらけ出土地点

にかたまって位置している。本調査地周辺では本地から20m程しか離れていない山ノ内字瑞鹿山393番地点（図１－⑥）、山ノ内字瑞鹿山393番３地点（図１－⑤）の２カ所で発掘調査が行われているが「Ⅱ群」と考えられるかわらけは出土していない。

本文中でも述べたが、「Ⅱ群」の名称について再度説明しておくと、地点１では本遺跡ので出土したⅡ群かわらけに近しい特徴をもったものをA類とし分類しているが、地点２や今回の調査（地点５）で発見されたかわらけには、細かい部分でA類と異なる特徴が見受けられるため、まとまった出土量を持つ３つの地点で包括される内容を設定し、一群のかわらけを特定する名称としたものである。分類は以下の方法で行っている。かわらけを手づくね成形とロクロ成形のものとで種別した上で、ロクロ成形のもののうち、通常見受けられるものを「Ⅰ群」、内外底面の調整が通常と異なるもの＝1．内底面のナデ調整がないか、あっても軽く１～２回程度のもの。2．外底面に糸切り後のスノコ痕と呼ばれる板状圧痕が見られない。ものを「Ⅱ群」とした。その中には外底面の糸切り痕の糸幅の広狭など、細部の相違による集合が存在している。その他、Ⅱ群の属性として、胎土が精良であること、器壁が薄いことが本調査地と地点１・２で共通している。なお、「○群」の名称は地点１の「○類」との混乱を避けるために与えた便宜上のものに過ぎず、かわらけの分類を目的としたものではないことをお断りしておく。

図33は各地点で出土したⅡ群かわらけを摘出したものである。

・地点１（御成町200番２地点　図33－１～24）

13世紀中葉頃に廃絶されたとする3面の池3から、Ⅱ群かわらけがまとまって出土している。出土位置は池3の覆土中に限られ、他の生活面や遺構では検出されていない。ここでは、それらをA類と分類した上で以下の特徴をあげている。

A類：轆轤成形で、器壁は薄く仕上げられている。外底面には糸切り痕を残すがスノコ痕を残さず内底面にはナデを施さず未調整で中央部が凹状に窪むものが多い。胎土は非常に精良で、焼成も良く、叩くと高音を発する。としている。(観察表によれば、内底中央に弱いナデ調整が施されるものも少数含まれている。)

・地点２（御成町171番１地点　図33－25～54）

1面から4面にかけての中世面でⅡ群かわらけが出土しており、3面遺構面では糸切りかわらけの半数近くがこのタイプのかわらけであったと報告されている。ここで出土したⅡ群かわらけは、粉質精良土で、外底面に残る糸切りの糸幅が広く、スノコ状圧痕と呼ばれる圧痕が見られず、内底面の指頭によるナデ調整がないか、あってもごく簡単なナデが1回なされるだけのもの。とされ、糸切りの糸幅が広いことが地点1のA類と異なる他、内底中央が窪むものもほとんど見受けられない。また、内折れの器形を呈する極小品が数多く出土しているのがこの地点の特徴と言える。出土したⅡ群かわらけの大多数がこのタイプのもので占められるが、4面上包含層で少数出土している、糸切り幅は広くないが粉質精良土で薄い器壁が開きながら立ち上がるとされるもの（図33－45～49）もⅡ群に含まれそうである。その他にⅡ群以外で、4面の土坑199から内外底面に通常の調整（ナデ調整・板状圧痕）が施されるものの、胎土・器形が、糸切りの糸幅が広いタイプと同様のもの（図33－50～54）が出土しており、「工房の違いなどがあるのかもしれない」と報告されている。各面の年代は、第4面：13世紀第2四半期から中葉、第3面：13世紀中葉から14世紀前半、第2面：14世紀前葉から中葉、第1面：14世紀後半以降である。

・地点３（御成町15－５地点　図33－55～58）

3面から1点（56）、4面から3点（55・57・58）、Ⅱ群あるいはそれに近いものが出土している。胎土は粒子がやや粗く、砂を含むが焼成は良好とされ、いずれも内底面無調整と記載されるもので、内底中央に窪みがある。外底面については57・58は外周を5㎜ほどの幅で削り取っているとされており、拓本を見る限りでは板状圧痕が見られずⅡ群に含まれるものと思われる。その他、55は外周に削り調整が施されず、拓本に通常の板状圧痕が残るもので、56が同タイプのものとされている。

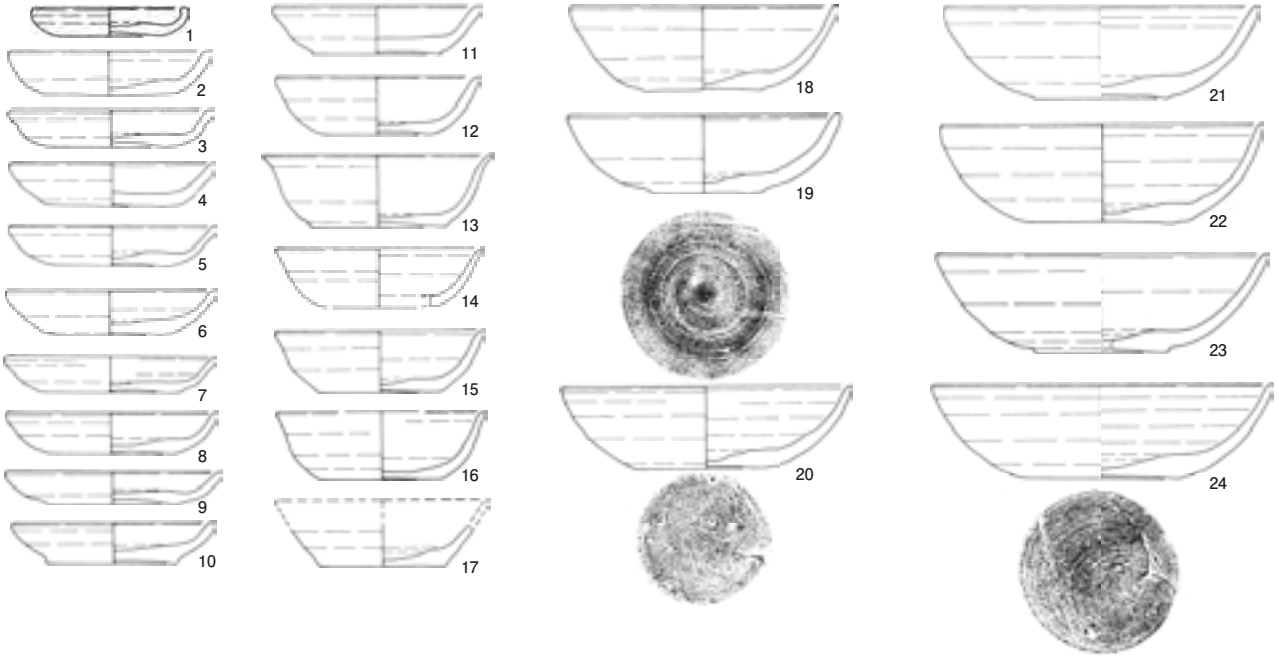
・地点４（御成町625－３　御成小学校内　図33－59～61）

北谷3面から3点出土している。「ロクロ作りで糸切り底、内底のナデ調整は無い。胎土は微砂質で肌色に近く、軽くて割合硬い焼きである。」とされ、他地域（なんとなく鎌倉より北の方）から移入されたものではないかとの感想が述べられている。

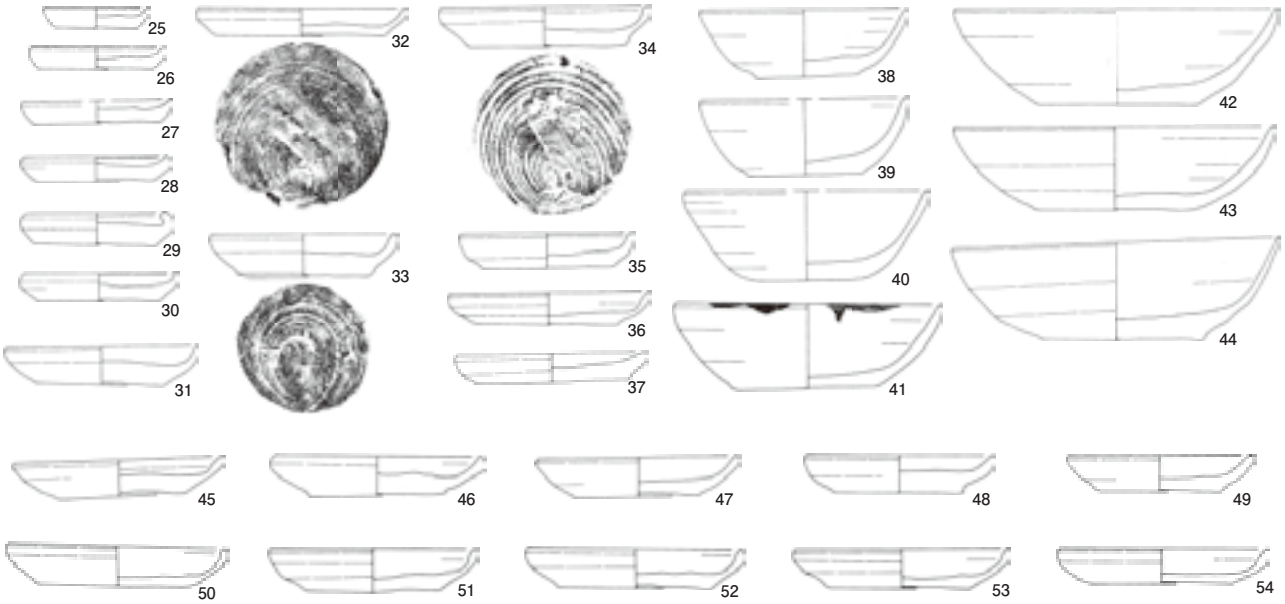
・地点５（本調査地点　山ノ内字瑞鹿山398地点）

本調査地点では、Ⅱ群かわらけのうち地点2と同タイプと見られるのものが多く出土しているが、糸切りの糸幅はさほど広くないものも相当数含まれている。全般に広めのものが多いよう見受けられるが、明らかに広いものは1/3程度にとどまる。また、他の地点で見られない技法として、外底の糸切り後に細い簾状の圧痕を残すもの（図21－12）が含まれており、その他に3点（図21－5、図23－6・8）わずかではあるが同様の細い痕跡が認められた。また、2次使用の例として内底面に加工痕を残す（図23－29）の他、焼成後に外底の全面を擦ったものが1点出土している。(写真図版11)

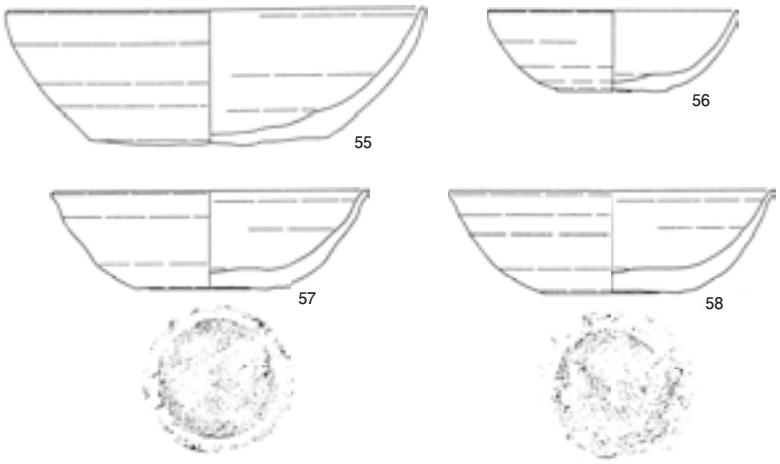
地点１（御成町 200 番 2）



地点２（御成町 171 番 1）



地点３（御成町 15－5）



地点４（御成町 625－3）

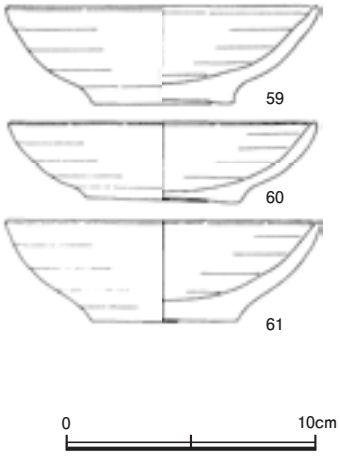


図33　Ⅱ群かわらけ

この一群のかわらけは近隣の調査で全く検出されておらず、調査区の北半（Ⅰ区）ではほとんど出土していないことから、遺跡周辺で通有的に使用されていたものとは思われない。Ⅱ群かわらけのほとんどは2面造成中に1回で廃棄された可能性が高いものと考えられ、1面や2面遺構の覆土中で発見された個体も、2面構成土を掘削したために混入されたと思われる出土状況を示している。Ⅱ群かわらけのうち、これらと層位を隔てて検出された個体は、3面・溝1から出土した6点（内1点は上層木器溜まり出土）にすぎないが、その内の3点（図26－1を含む）に、糸切りの糸幅が狭く、内底面の中央が窪んでいるなど、地点1のA類と見なし得る特徴が認められた。

5つの地点で出土しているⅡ群かわらけを見ると、大型品・中型品はきれいな碗型器形を採るもののみで構成され、小型品は皿形のものを主体に碗型が少数含まれている。本調査地で出土した小型品は皿形のものに限られるが、全体の形状がわからないとした径の小さい底部片（図23－10・29）が、碗型を呈するものになるかもしれない。小皿については、地点2において極小品の器形をひくことが示唆されている。地点1では、小皿の底部と体部の厚さにさほど変化が見られず、丸みをもった器形が多く感じられるが、地点2や本調査地では厚手の底部から薄い体部が屈曲して立ち上がるものが多く見受けられ、ロクロ上での手法に極小品との共通点が見い出せそうである。

地点1では池3北東隅で出土したかわらけを一括性の高いものとして、タイプ別に出土点数を提示している。それによると総かわらけ数605点のうち、A類（Ⅱ群）は124点（大型80点・中型14点・小型30点）、通常のロクロ成形のもが444点（大型219点・小型225点）、手づくね成形のものが37点（大型4点・小型30点、他不明）とあり、A類のみに中型が含まれている。報告書を見る限りでは、北東隅に限らず池3全体の出土遺物を見ても、A類以外に中型が見当たらない上に、碗型の器形も出現していない。A類の大型・中型は全て碗型器形で、小型は浅い皿型が多いものの、碗型を呈するものも少量見受けられ、「薄手丸深」型の登場を待たずして、この時期に碗型器形を呈するかわらけの大・中・小が揃っている。

地点2では中世の数時期にわたりⅡ類かわらけが出土しているが、共伴するかわらけに手づくね成形ものが含まれる時期に出現し、「薄手丸深」型が盛行する時期まで残っている。

本遺跡で出土したⅡ群かわらけを観察したところ、胎土は砂粒等の混入物を含まず精良で、白色針状物質（海面骨針）と雲母が少量含まれており、通常のかわらけに比べると硬く焼き締まっている。その中を更に細く見ると、粒子の粗密により砂質気味で比較的軟質に仕上がるものから粉質で硬質に仕上がるものまで個体差がある。観察表に（堅緻）と記載したものは特に緻密で堅く、やや質の異なる土のように見受けられるもので、溝1から出土した3点のA類は全てこの土である。また、色調についても全般に淡い褐色系のものが多い中で、溝1出土の3点は淡い橙色を呈しており、特に実測された1点（図26－1）は橙色味が強く感じられた。いずれも水簸された精良土だが、粒子の粗密、焼き上がりの硬軟の他に、鉄分の多寡（一般に土器の色調は素地の組成割合で鉄分の多いもの程赤味が強くなるとされている。）による色調の違いなどで細分できそうである。地点1のA類については、実測されている80点の大半が橙色ないし黄橙色とされているが、淡い褐色系の可能性がある浅黄色・灰黄色とされるものも8点含まれていた。

検出例の少ない中での予察となるが、今回調査の成果を見る限りでの所見をまとめておくと、Ⅱ群かわらけは大きく地点1タイプ（A類）と、地点2タイプに分けられるものと思われ、両者の相違点は胎土や器形の細部に求められるかもしれない。更に、地点2タイプは糸切りの糸幅により細分ができ、通常の糸幅のものは本調査地2面構成土中と、地点2の4面包含層でのみ検出されている。これまで発見されているⅡ群かわらけは、出土地により同群内での組成に偏りが見られるが、その理由として、空間的

な差（使用目的を含めた場の違い）と、時間的な差の2つの可能性が考えられる。今回調査では、地点1タイプが層位的に地点2タイプに先行する状況で発見されているが、それが両者の存在時期を反映しているとは言い切れない。今後、新たな検出例を期待したい。

参考文献

原廣志・宇都洋平　2006「今小路西遺跡（N0.201）御成町200番2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22』鎌倉市教育委員会

菊川英政・宗臺富貴子ほか　2008『今小路西遺跡発掘調査報告書－御成町171番1他地点－』株式会社　斉藤建設

手塚直樹ほか　1982『千葉地遺跡』千葉地遺跡発掘調査団

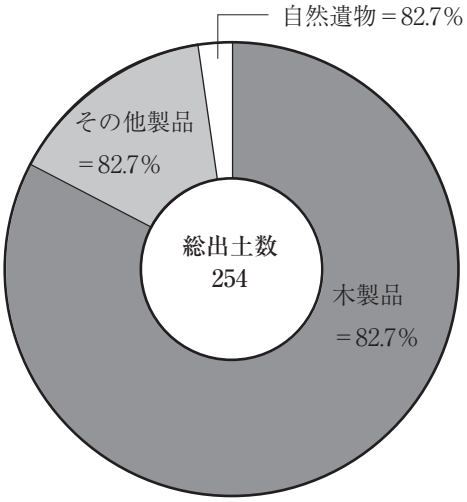
河野真知郎ほか　1990『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』今小路西遺跡発掘調査団

表11　中世遺物集計表

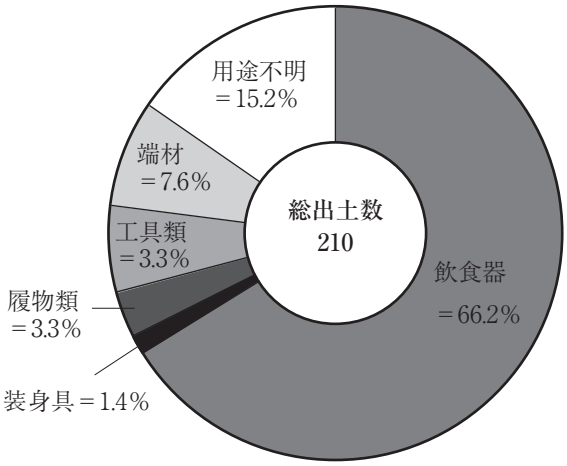
		表土・撹乱・他	1面まで	1面遺構	2面遺構	2面～3面	3面遺構	3面構成土	計
かわらけ（ロクロ成形）	Ⅰ群	89	30	69	103	368	59	5	723
	Ⅱ群	21	7	156	68	537	6		795
かわらけ（手づくね成形）						1			1
白かわらけ					手づくね1				1
常　滑	甕・壺	9		2	5	6		1	23
	片口鉢Ⅰ類				1				1
	片口鉢Ⅱ類	2			1				3
瀬　戸		折縁深皿1		入れ子1					2
山茶碗				尾張型1		尾張型1			2
土製品	土師器碗					吉備系1			1
	瓦	1		1	2	2			6
	瓦質火鉢					1			1
貿易陶磁	青磁	酒合壺1	双魚文鉢1			折縁鉢1			3
	白磁	口兀皿1		口兀皿1		印花文皿1			3
石製品	砥石			1					1
	滑石					鍋1			1
金属製品	鉄製品				鍋1・不明1	釘2			4
骨製品						笄1	笄1		2
漆　器					1		1		2
木製品		7		2	13	6	228	2	259
自然遺物	獣骨			1		1	1		3
	種子						3		3
		132	38	235	196	930	301	8	1840

表12　溝1上層・木器溜まり出土遺物

木製品以外の遺物		木製品					
自然遺物	製　品	飲食器	装身具	履　物	工具類	端　材	用途不明
獣骨：1 種子：3 玉石：2	かわらけ：37 骨製品：1	板杓字：2 経木折敷：12 板折敷：2 箸：123	櫛：1 刀子柄：2	下駄：1 草履：6	ヘラ：12 織物具：1	板材：16	
6	38	139	3	7	13	16	32



木器溜まりの出土遺物の構成



木器溜まり出土木製品の構成

用途不明品 32 点の内容

棒状のもの

断面形		先端を尖らせるもの
丸形	27 図 47（菜箸？） 27 図 48（菜箸？） 27 図 49	
カマボコ形	27 図 50 27 図 51	
方形	27 図 54 27 図 55（細いもの） 27 図 56（細いもの） 実測外：3	28 図 73
長方形 （扁平）	実測外：6	28 図 69　（ヘラ？） 28 図 70 28 図 72 実測外：1
方形から 変化するもの	27 図 52 27 図 53	
	19 点	5 点

先端を尖らせた薄板状のもの

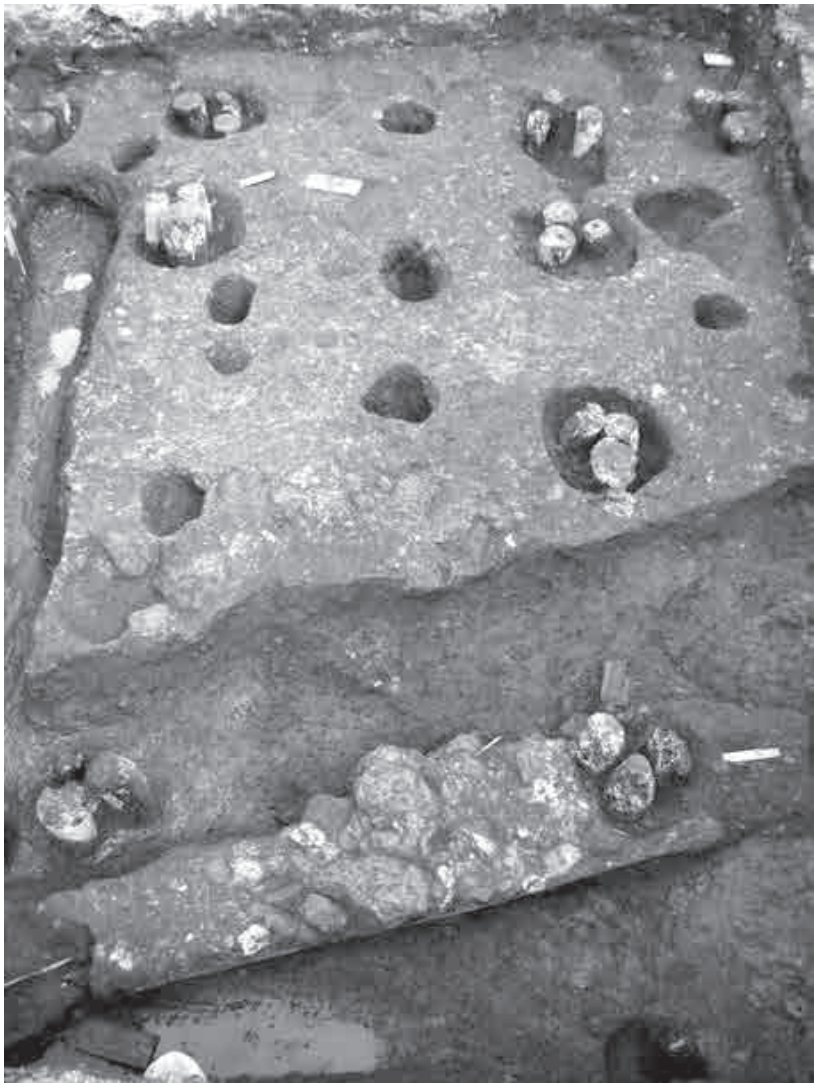
28 図 71（経木折敷残欠？）
28 図 74（板折敷残欠転用？）
2 点

何らの形態を意図したもの（形代？）

28 図 63
29 図 88（経木）
29 図 89（薄板）
3 点

何らの道具と思われるもの

28 図 85
29 図 86
29 図 87
3 点

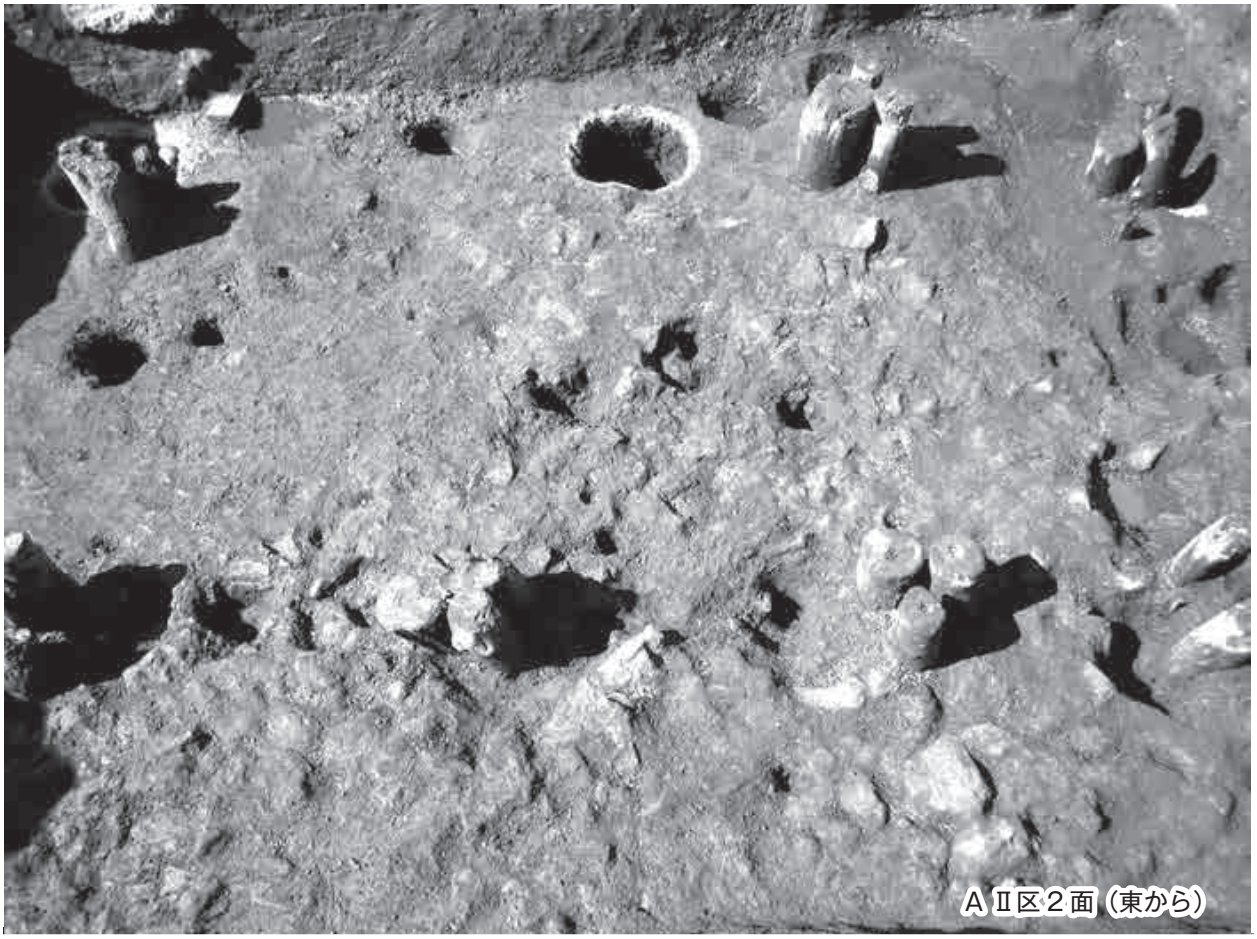


◀A Ⅱ区１面（南から）

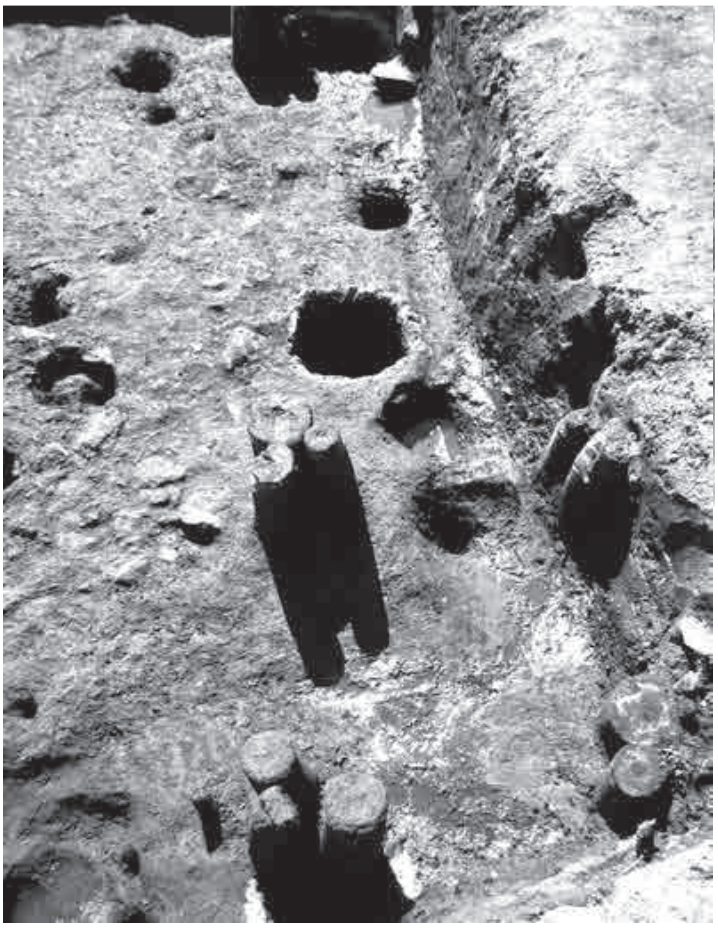
▼B 落ち込み４、溝２（東から）

▼C 落ち込み４、溝３（東から）

図版２



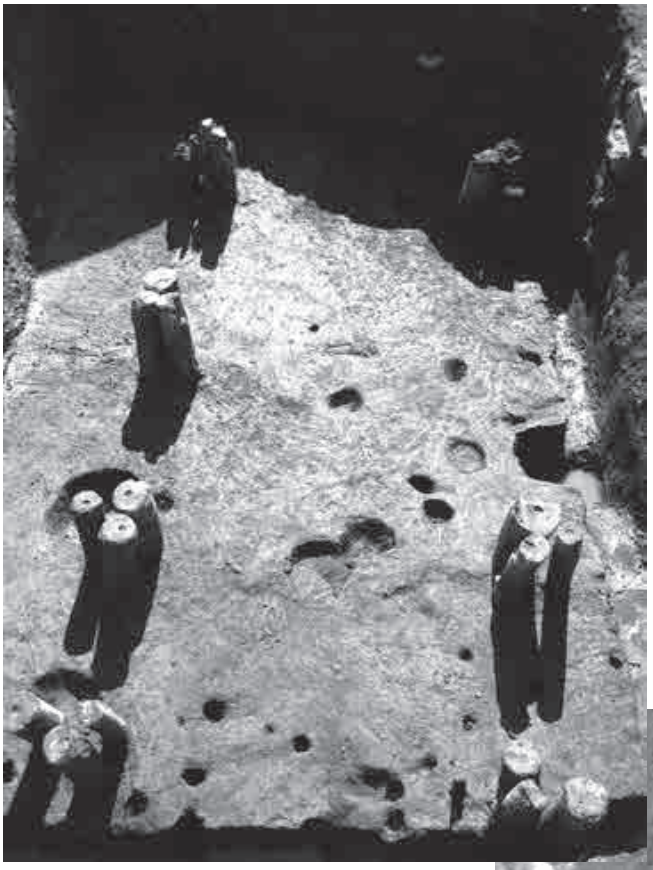
ＡⅡ区２面（東から）



▲C 柱穴列２・P31（北から）

◀B 柱穴列２（北から）

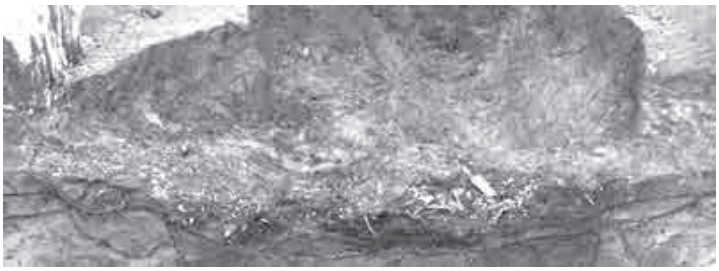
◀A かわらけ溜まり（西から）



◀B Ⅱ区３面（北から）

▼C 井戸１（東から）

図版４



◀A 木器溜まり（南から）

▼C Ⅰ区溝１（南から）

▲B 木器溜まり・溝１（北から）

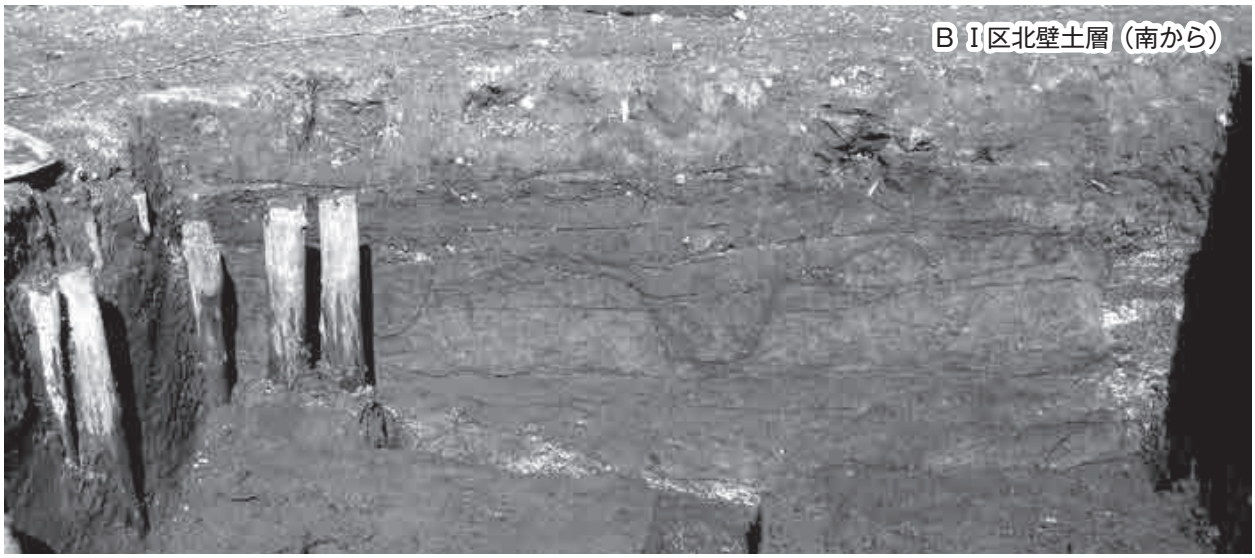
Ⅱ区溝１（北から）D▶

◀A Ⅰ区落ち込み１・２（南から）

◀B Ⅱ区落ち込み１（北から）

▼C Ⅱ区最終トレンチ（南から）

図版６



◀C Ⅱ区東壁土層（西から）

Ⅱ区南壁土層（北から）D▶

20−6

21−2

24−23

20−8

20−11

20−13

21−15

21−18

26−4

20−14

22−4

22−5

25−1

溝３

31−2

２面構成土

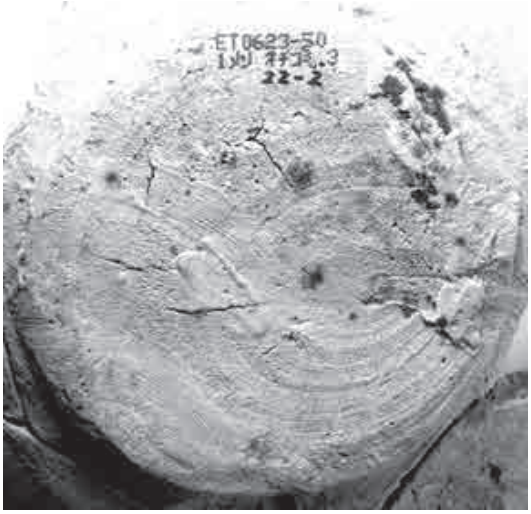
木器溜まり

図版８

26－1

▲26－1 外底面

◀26－1 内底面

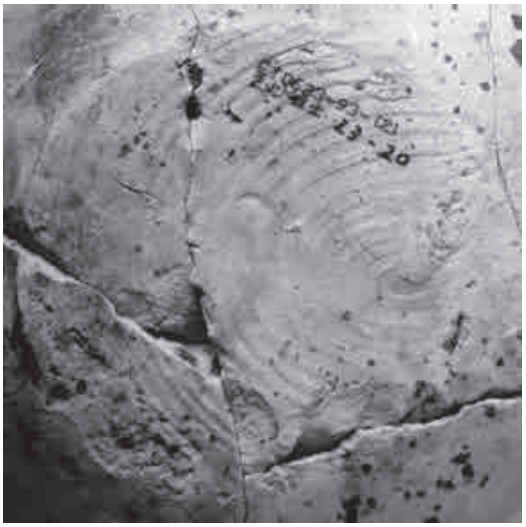


22－2 外底面▶

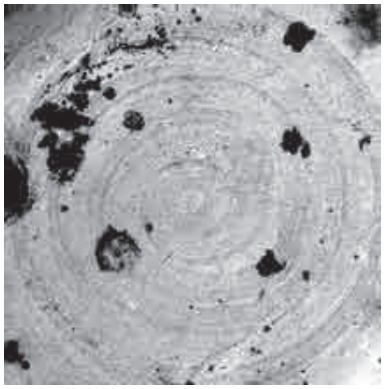
21－12 外底面

21－13 内底面

23－20



▲23－20 外底面

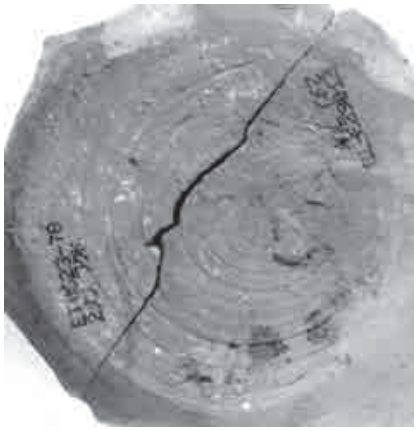


24－7 内底面

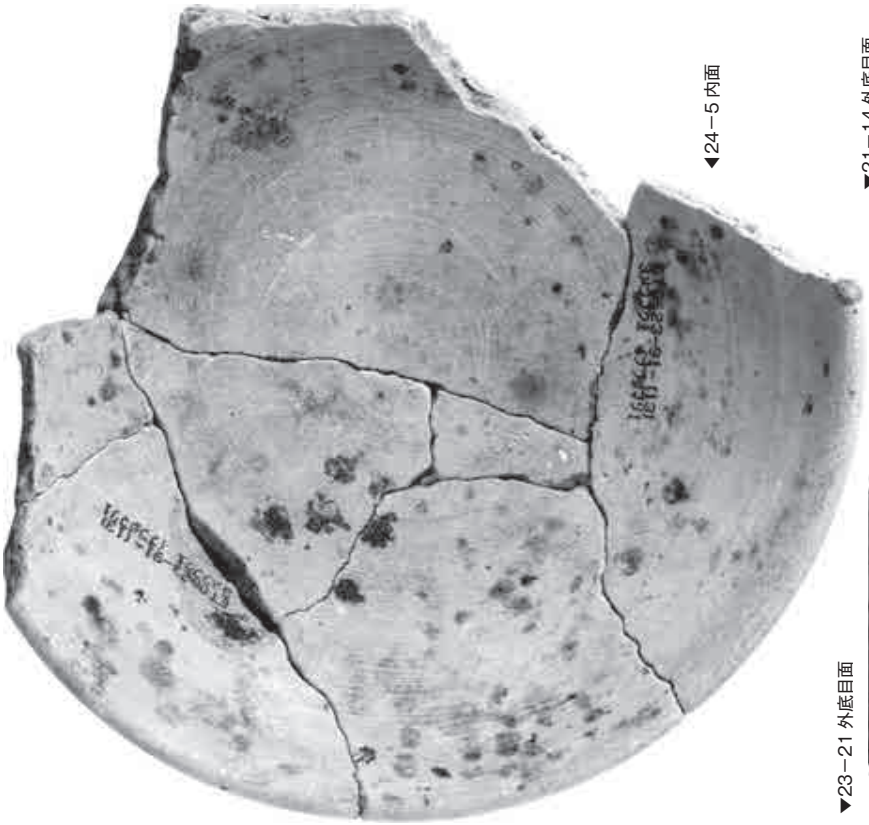
▼23－8 内面

▼23－8 外底目面

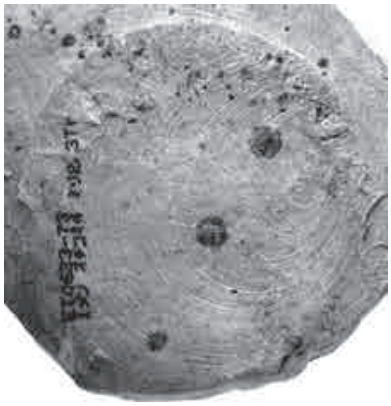
▼23－7 内面



▼23－7 外底目面



◀24－5 内面



▼21－14 外底目面

▼23－21 外底目面

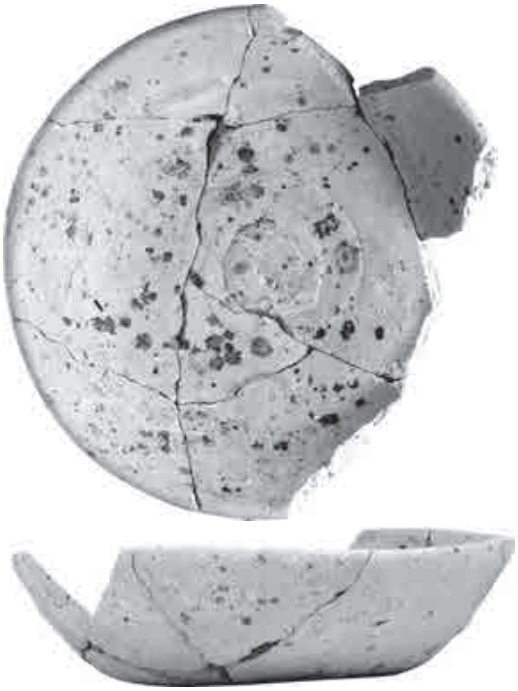
図版10

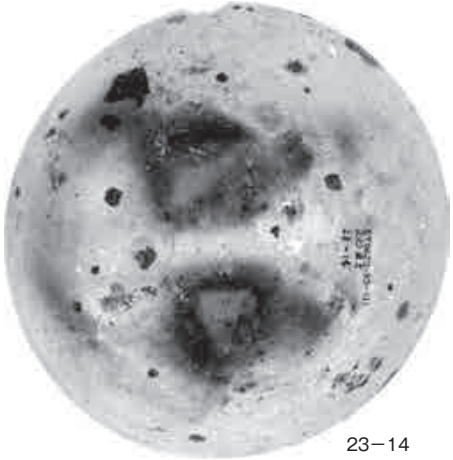
21−6

21−10

21−17

23−2

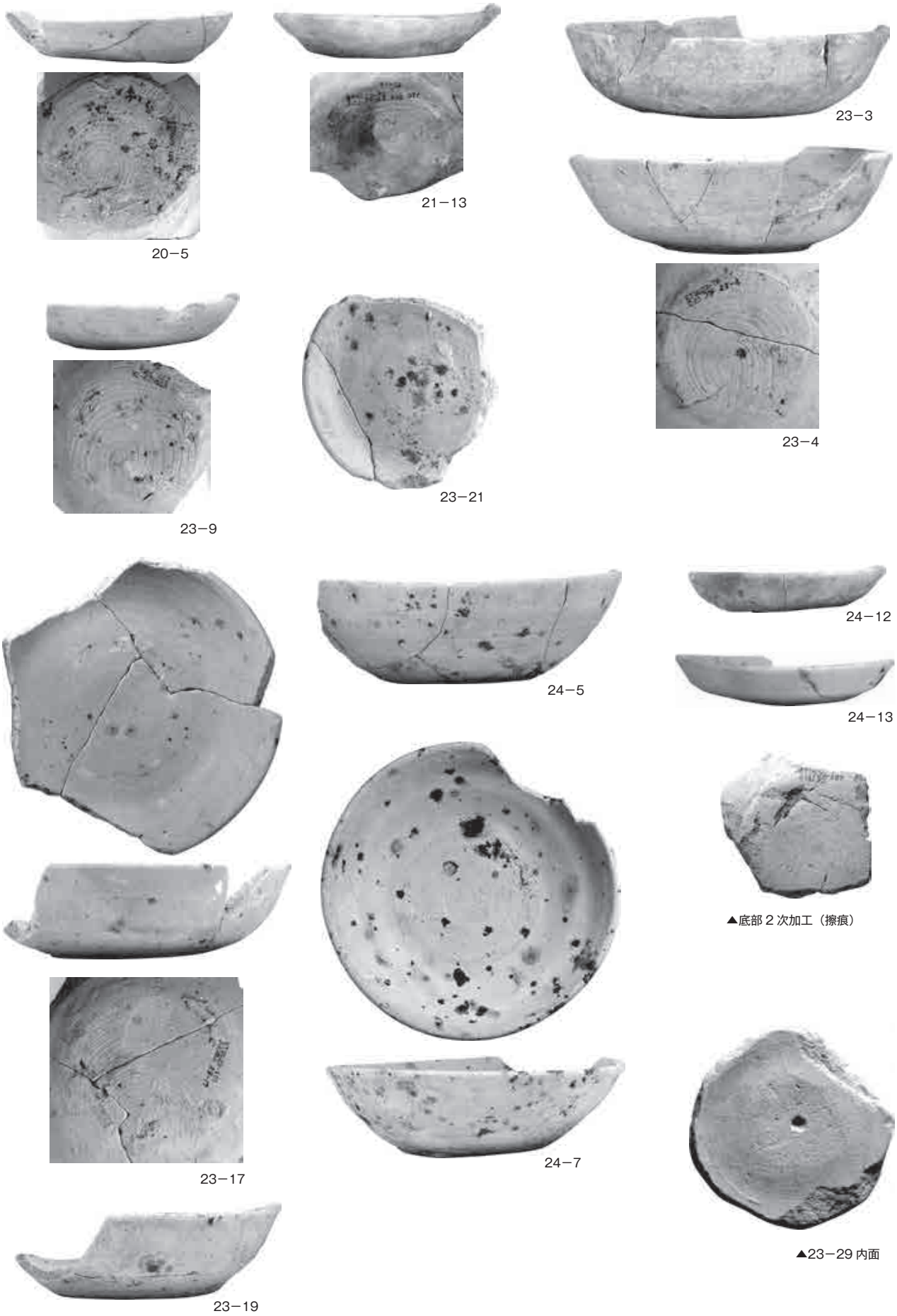

24−2


23−14

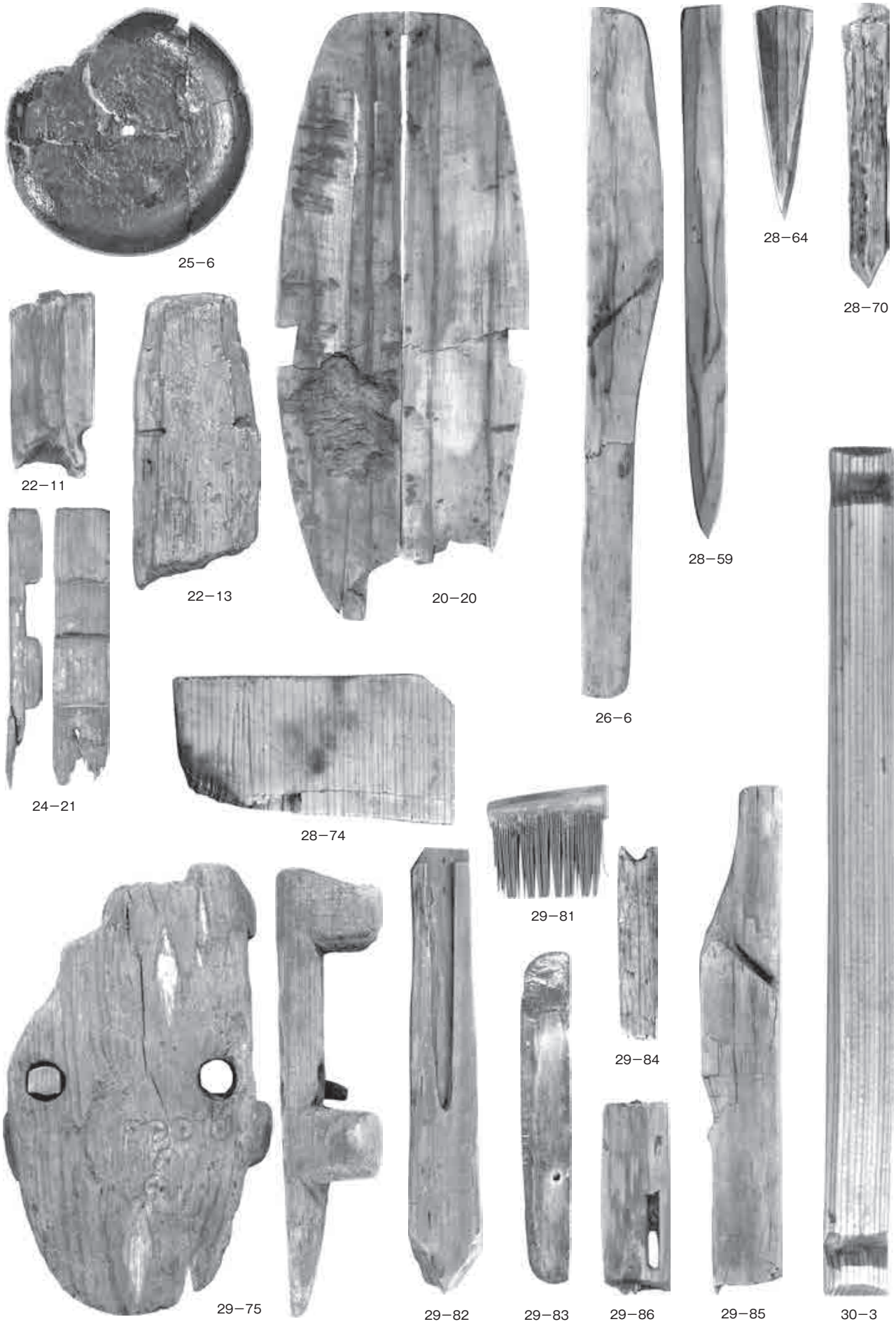
24−4

25−5

26−3


20−5
21−13
23−3
23−4
23−9
23−21
24−12
24−5
24−13
▲底部２次加工（擦痕）
23−17
24−7
▲23−29 内面
23−19

図版12


25−6
20−20
26−6
28−59
28−64
28−70
22−11
22−13
24−21
28−74
29−81
29−84
29−75
29−82
29−83
29−86
29−85
30−3

玉縄城跡（No.63）

植木字植谷戸 48 番 6 地点

例　言

1．本書は、鎌倉市植木字植谷戸48番6地点における個人住宅建設に伴う地盤の柱状改良に対する事前の埋蔵文化財の緊急調査発掘調査報告である。

2．発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成19年9月12日～9月26日である。

3．調査団の編成は以下の通りである。

調査の主体　　鎌倉市教育委員会
調査担当　　滝澤晶子
調査補助員　　安達澄代・菅野篤博
調査協力者　　田口康雄・金丸義一・佐野吉男（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）

4．本書の執筆・編集は滝澤晶子が行った。

5．本書の図版および写真撮影は次のものが行った。

遺構図版　滝澤晶子　　遺構写真　滝澤晶子　　遺物写真　滝澤晶子

6．本書の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。(各々の図にスケールを載せている)

遺構図　1／60（遺構図の水糸高は海抜高を示す）

7．遺構実測図には次の記号が使用されている。

釉の限界線 -·—·—·- 調整の変化点 -————- 使用痕の範囲 ←——→ 加工痕の範囲 <- - - ->
撹乱の範囲 -————- 推定ライン -------- 調査限界ライン -·—·—·-

8．発掘調査に際して御理解・御協力を賜った、建築主及び関係者の方に深く感謝の意を表す。

目　次

本　文　目　次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 288

1．調査地の位置
2．歴史的環境
3．周辺地域の発掘調査

第二章　調査の概要 …… 291

1．調査の経緯と経過
2．調査区の位置とグリッド配置
3．基本土層

第三章　検出遺構と出土遺物 …… 293

第1面

第四章　まとめ …… 295

挿　図　目　次

図1　遺跡周辺図…… 288
図2　調査区位置図…… 291
図3　調査区の位置…… 292
図4　グリッド配置図…… 292
図5　遺構配置図…… 293
図6　溝1・落込み1出土遺物 …… 294

図　版　目　次

図版1 …… 296

A．遺跡全景（北より）
B．同上（南より）

図版2 …… 297

A．遺跡全景（北西より）
B．調査区東壁土層断面（C－C’）

図版3 …… 298

A．溝1土層断面（A－A’）
出土遺物

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

図１　遺跡周辺図

１．調査地の位置（図１）

本調査地は鎌倉市植木字植谷戸48番６地点（図１－１）に所在し、玉縄城跡（№63）の遺跡指定範囲内に位置する。調査地はＪＲ大船駅から西方約1.3ｋｍにあり、地勢的に見ると、標高最高80ｍ、平均50ｍの低丘陵地で、相模の台地の先端に当る。この丘陵地の東には南に向かって柏尾川、北から西へ柄沢川が廻る。その丘陵地の中心部に玉縄城の主郭があり、（現在は鎌倉女学院）その南際に調査地は位置している。

玉縄城は主郭を土塁と空堀で防御し、その周辺に曲輪と支城を配置している。主郭を中心に西に「くいちがいの曲輪」、北に「お花畑曲輪」、北西に「出丸（花見堂）」、南西に「円光寺※曲輪」、南に「御厩曲輪」

がある。また、主郭を囲む土塁は自然の稜線を利用し加工したもので、南北に１ヶ所づつ切れ目があり、南が「大手」、北が「裏口」となっている。調査地点は主郭の南側、「御厩曲輪」の地区に当り、南の土塁の切れ目「大手」の南東に位置している。

支城は北側に「長尾砦」、西側に「二伝寺砦」・「高谷砦」・「おんべやま砦」があった。

その他周辺地域には玉縄城に関連すると考えられる字名が「城廻り」「植谷戸」「城宿」「清水小路」等、残っている。

※円光寺そのものは現在南方、字相模陣付近に移動している。

２．歴史的環境

玉縄城は戦国時代の典型的な山城で、永正9年（1512）北条早雲により三浦半島に勢力を持っていた三浦道寸攻略のために築かれた城である。初代城主北条氏時から為昌・綱成、氏繁、氏舜の5代にわたって小田原北条氏の傘下に配された城である。その間、永正15年（1518）上杉朝興、大永6年（1526）里見義豊、永禄4年（1561）上杉謙信との計3回の合戦に落城することなく、天正18年（1590）豊臣秀吉による小田原征伐に際して開城された。小田原北条氏滅亡後、元和5年（1619）頃に廃城となるまで存続していた。

玉縄城廃城後は寛永2年(1625)頃には城の南に陣屋が設けられ、元禄16年(1703)頃まであったらしく、調査地南の坂は「陣屋坂」、坂の下には「相模陣」との字名が現在も残っている。

３．周辺地域の発掘調査（図１）

調査地付近はこれまでの発掘調査から、縄文時代～近世にわたる遺跡が確認されている。当然ながら玉縄城関連の遺跡が多く調査されている。本項ではその内ごく近隣に限って紹介したい。

図１－２地点の調査（未報告）

1978年7月～8月に清泉女学院図書館用地の発掘調査が実施されている。溝、井戸、土坑、柵列、柱穴が検出され、16世紀の国産陶磁器類、中国産陶磁器類、かわらけ、鉄製品、漆器、つぶて石等が出土した。

図１－３地点の調査（鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書２１）

植木字相模陣425番3外地点で平成14年7月15日～8月14日にかけて実施された。15世紀～16世紀前半にかけての3時期にわたる溝状遺構、平場、土塁、Pit、通路状遺構が検出され、16世紀前半の遺物が出土した。

図１－４地点の調査（玉縄城跡発掘調査報告）

城廻字城宿357番2、15地点で平成11年7月24日～8月13日にかけて実施された。3段の平場が検出され、「くいちがいの曲輪」の南西端付近に位置していることが報告されている。

図１－５地点の調査（相模玉縄城）

城廻字打越165地点で1980年3月1日～5月20日、1981年3月7日～5月30日にかけて実施された。縦堀、平坦面、堀切等の城郭遺構が検出されている。

図１－６地点の調査（未報告）

植木字植谷戸66番1外地点で実施された。15世紀後半～16世紀後半の石垣状遺構、掘立柱建物柱建物、やぐら、柱穴、溝、井戸、土坑等が検出された。

図１－７地点（鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書２０）

植木字植谷戸70番1外地点で平成13年5月25～6月14日にかけて実施された。15世紀後葉～16世紀頃の3段の平場等が検出された。

図１－８地点（鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20）

植木字植谷戸198番の一部地点で平成13年9月25日～10月31日にかけて実施された。戦国期～江戸前期、計5期にわたる遺構群が検出された。

図１－９地点（玉縄城跡発掘調査報告書）

植木字相模陣374番他地点で1987年7月27日～1988年4月9日にかけて実施された。主郭外南東側に当り、戦国期を中心に縄文～近世にわたる遺構群が検出された。戦国期の遺構としては、土坑、テラス状遺構、畝、溝状遺構、平坦面、掘立柱建物、礎石建物、柱穴列、井戸、方形竪穴遺構等が検出された。

図１－10地点（未報告）

植木字相模陣370番地点で1989年8月～1990年3月にかけて実施された。弥生時代、戦国期～江戸時代（16世紀～18世紀）にかけての遺構が検出された。

図１－11（未報告）

鎌倉グリーンマンション用地地点で1978年10月に実施された。段築状の平場や切岸が検出され、天目茶碗が出土している。

図１－12（未報告）

城廻字城宿340－1地点で実施された。井戸、Pitが検出された。

図１－13（鎌倉考古第４号に概報）

玉縄城南西外郭部発掘調査として1980年6月～7月に実施された。段築状の平場、土塁状遺構が検出された。

図１－14（鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15）

城廻字清水小路673番10地点で平成9年8月18日～8月28日にかけて実施された。平坦面、溝が検出され、溝は屋敷の周囲を巡る溝であろうと報告されている。

図１－15（鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書４）

城廻字中村654番1他地点で昭和62年4月27日～5月19日にかけて実施された。中世～戦国期にかけての遺構群が検出された。戦国期（16世紀初頭～17世紀初頭）の遺構としては曲輪状遺構、切岸、段状遺構、通路状遺構、階段取り付け遺構、溝等が検出された。

上記の他に確認し得た範囲で3カ所の調査が実施され、戦国期～近世の遺構が確認されている。

各々の調査地点についてほんの概略について羅列したが、未報告のものも多く含まれ、ややまとまりに欠けるが、これらの調査の「玉縄城跡」からは切岸、堀切、平場、土塁といった城郭施設、あるいは掘立柱建物、礎石建物、溝等、城に付随する施設が多く発見されている。

＜参考文献＞

「鎌倉事典」白井永二編　東京堂出版　平成4年
「鎌倉の地名由来辞典」三浦勝男編　東京堂出版2005年9月
「玉縄城跡発掘調査報告書－植木字相模陣374番他地点－」玉縄城跡発掘調査団　1994年3月
「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　4」鎌倉市教育委員会　昭和63年3月
「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　15」鎌倉市教育委員会　平成11年3月
「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　17」鎌倉市教育委員会　平成13年3月
「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　20第1分冊」鎌倉市教育委員会　平成16年3月
「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　21第2分冊」鎌倉市教育委員会　平成17年3月
「相模玉縄城　城廻字打越165地点の発掘調査」鎌倉考古学研究所　1986年5月
「玉縄城跡発掘調査報告書　鎌倉市城廻字城宿357番2、15」玉縄城跡発掘調査団　2000年8月
「鎌倉考古第4号」鎌倉考古学研究所　1980年11月25日

第二章　調査の概要

１．調査の経緯と経過

調査は鎌倉市植木字植谷戸48番6地点における個人住宅に伴う調査として実施された。平成19年6月12日～13日に鎌倉市教育委員会により確認調査が実施され、その結果、現地表下100cm前後から第1面が確認され、現地表下2ｍまでに中世後期の溝または堀と思われる土層が確認された。それを受け、平成19年9月12日～平成19年9月26日にわたって本調査が実施された。調査対象面積は22.4㎡である。遺物は3点出土した。

確認調査（図3）

確認調査は敷地内、図3に示した位置に設定し、現地表下2ｍまで掘削して行われた。現地表下150cm以下は湧水があった。現地表下100cmに「人為的な加工痕を確認した。土層断面の確認のみであるが、おそらくは溝または堀と思われる。出土した遺物は少量であるが、調査地域と土層から勘案して中世後期と考えられる。」と報告された。

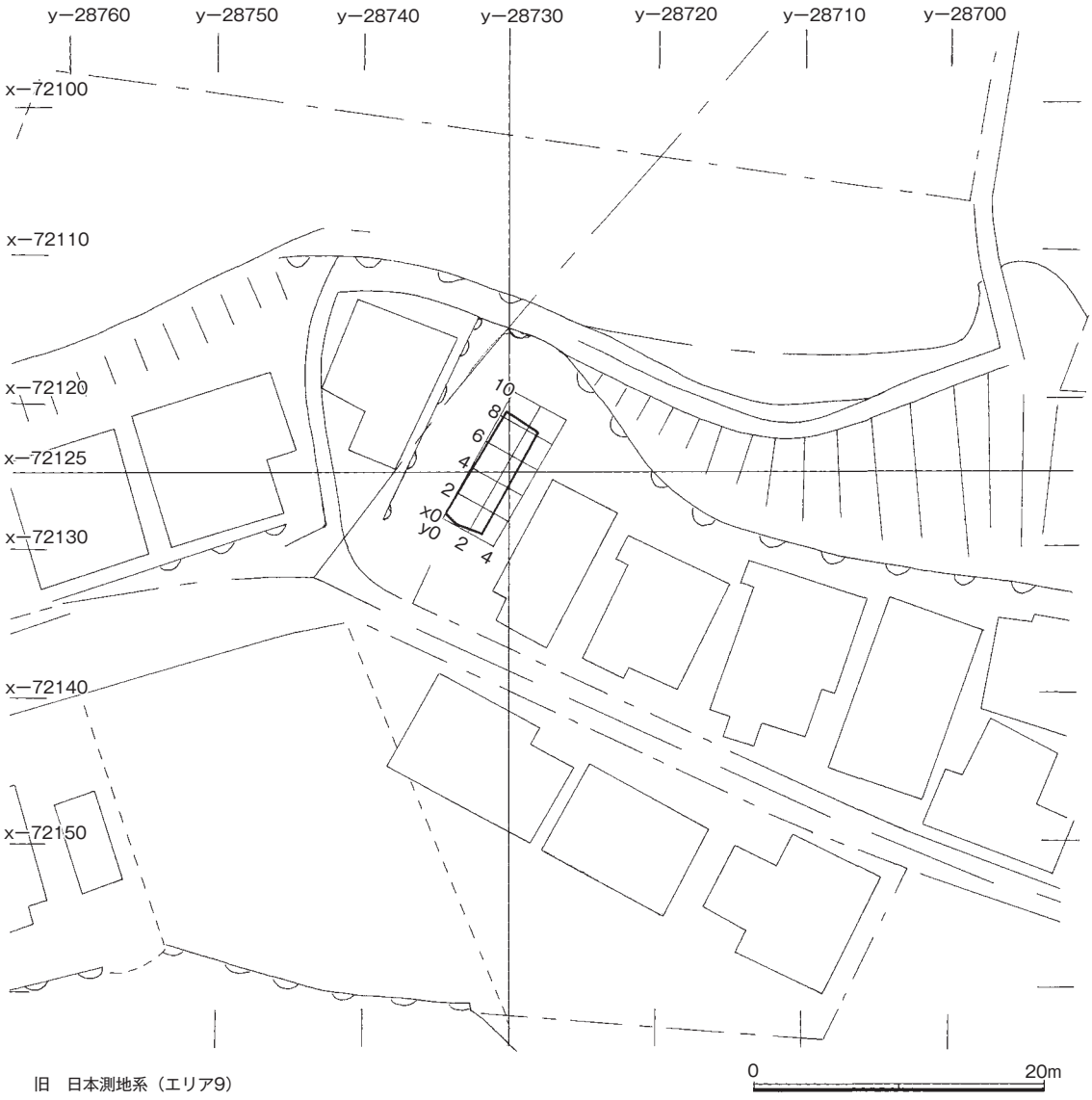


図２　調査区位置図

調査経過

調査経過は以下のとおりである。

平成19年 9月12日　重機による表土掘削後、人力による調査開始。

9月13日　試掘坑再掘。

9月14日　表土・撹乱除去作業。

9月18日　溝土層断面撮影・測量。

9月21日　溝検出作業

9月25日　測量基準点移動。全景撮影。測量。

9月26日　現地調査終了、撤収。

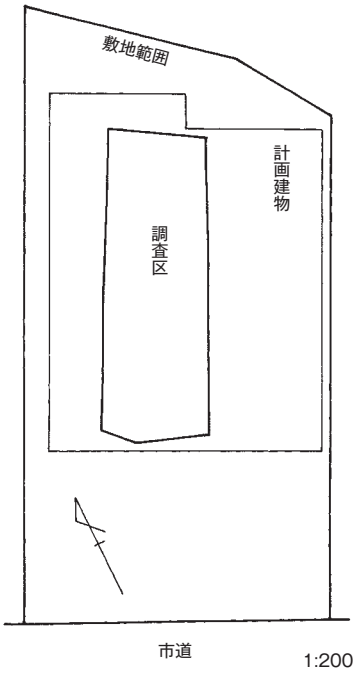


図３　調査区の位置

２．調査区の位置とグリッド配置（図２・３・４）

敷地と建築範囲と調査区の関係は隣地との関係及び安全性を考慮し、図3に示したように設定された。位置は北緯35度21分9秒、東経139度30分50秒である。

グリッドは調査区の形状に合わせて任意に設定した。(図2・4) グリッドと国土座標（エリア9）の関係は以下の通りである。世界測地系には国土地理院提供のソフトを使用して変換した。

A地点：グリッド（ｘ8.534、ｙ0.361）＝国土座標［旧日本測地系］（X－72120.833、Y－28730.000）＝国土座標［世界測地系］(X－71764.027、Y－29023.297)

B地点：グリッド（ｘ0.124、ｙ5.081）＝国土座標［旧日本測地系］（X－72130.477、Y－28730.000）＝国土座標［世界測地系］(X－71773.671、Y－29023.297)

C地点：グリッド（ｘ3.382、ｙ－0.315）＝国土座標［旧日本測地系］(X－72125.000、Y－28733.116）＝国土座標［世界測地系］(X－71768.194、Y－29026.413)

D地点：グリッド（ｘ5.347、ｙ3.189）＝国土座標［旧日本測地系］（X－72125.000、Y－28729.091）＝国土座標［世界測地系］(X－71768.194、Y－29022.387)

グリッドｘ軸は北から30度東に傾いている。なお、本文中では便宜上、グリッドｘプラス方向を北として呼称し、正確な方位は各図に矢印で示している。

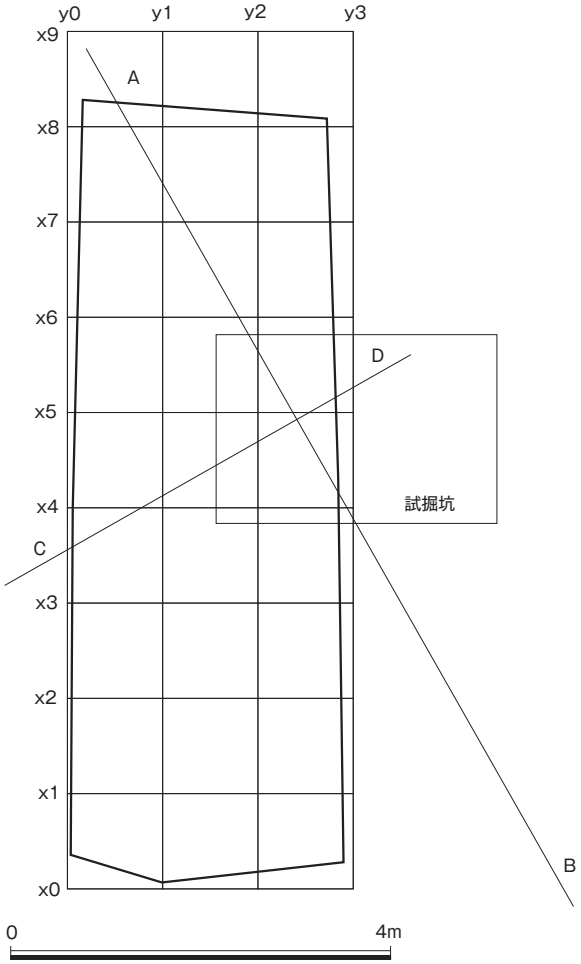


図４　グリッド配置図

３．基本土層（図５）

基本土層Ｃ－Ｃ´は図5に記してある。現地表は海抜51.6ｍ前後のほぼ平坦面。表土層は現地表から80cm前後であった。海抜50.8ｍ付近に地山が検出された。土層注記は第3章で詳細を記す。

第三章　検出遺構と出土遺物

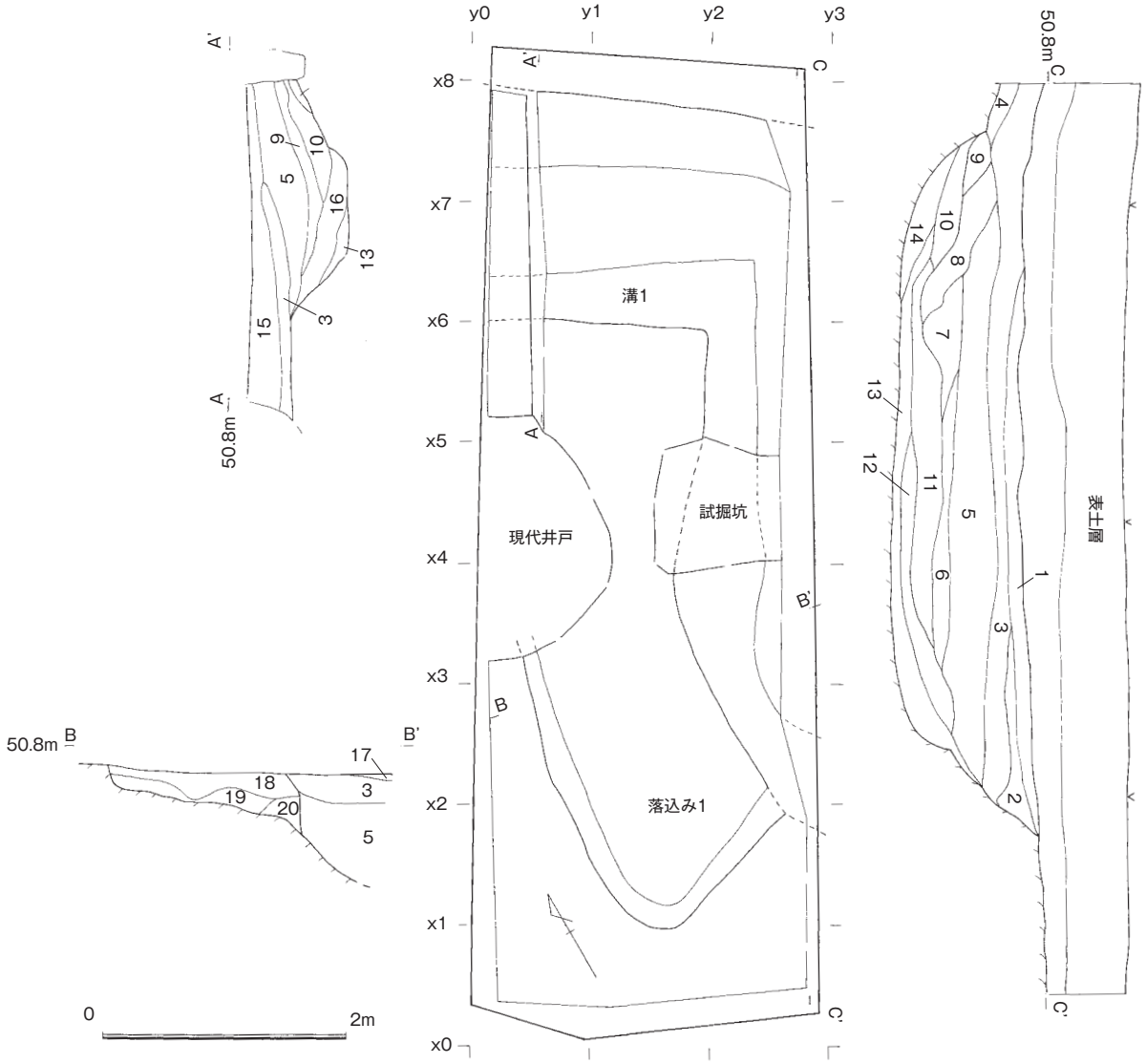


図５　遺構配置図

第１面（図５）

当調査区は約90cmの表土を取り除いた海抜50.6ｍ前後に南部に関東ローム層の平坦面が検出された。ただし、この平坦面は上層が削平されてしまっている可能性が高い。遺構はＬ字型の溝、落込み１ヶ所が検出された。

溝１（図５）

溝１は海抜50.3ｍ～ 50.6ｍ付近で確認された。調査区北部を東西方向に走り、調査区東端で南にＬ字型に曲がっている。検出された範囲で溝の南端は立ち上がっており、そこからさらに東に折れ鉤型を呈する可能性が高い。溝の断面形は逆台形を呈し、幅は東西方向部分で上端幅190cm、下端幅80cm、深さは検出面から60cm前後を測る。南北方向部分は東部は調査区外で、西岸しか検出されなかったため、幅は不明だが、深さは検出面から78cm前後を測る。検出し得た範囲で、底レベルは東西方向部分で西

から東へ16.6㎝下り、コーナーで南北方向部分へ17.5㎝下がる。南北方向部分については調査区外のため最底部まで検出されなかったので、高低差は不明である。土層注記は以下表のとおりである。

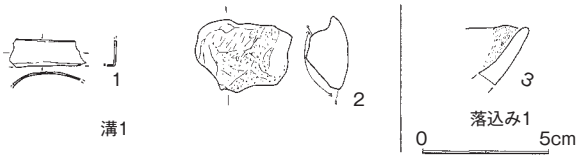


図６　溝１・落込み１出土遺物

溝１出土遺物（図６－１・２）

図６－１・２は溝１の東西部分下層出土遺物である。１は鉄製品である。小破片のため用途は不明。ごく薄い板が緩い弧を描き、一辺が直角に折り曲げられている製品である。２は土製品。片面の表面が溶融している。鞴の羽口の可能性があるが、小破片のため詳細は不明。

落込み１（図５）

落込み１は調査区南部を抉るように深さ10㎝前後の落ち込みが検出された。溝１（南北方向部分）に切られている。（Ｂ－Ｂ´層参照）土層注記は以下表のとおりである。（18層・19層・20層）

落込み１出土遺物（図６－３）

図６－３は落込み１から出土したかわらけである。口縁から内面が部分的に溶融しており、とりべとして使用している。口縁端が外反し、胎土は肌色を呈し、微石粒を多く含みやや粗い。小破片のため詳細は不明だが、16世紀代のかわらけであろう。

番号	色調	土質	内容	粘性	締り
1	暗茶褐色	粘土層	1～3㎝大の土丹	あり	よい
2	橙茶褐色	粘質土層	小土丹粒（微量）・炭化物（微量）	あり	わるい
3	黄褐色～灰褐色	粘質土層	0.5～5㎝大の土丹（多量）	つよい	よい
4	茶褐色	粘質土層	土が0.5㎝以下の小ブロック状の土層	あり	わるい
5	黒灰褐色	粘質土層	0.5～5㎝大の土丹（多量）	つよい	わるい
6	黒灰褐色	粘質土層	0.5～1㎝大の土丹（多量）・木の枝	つよい	よい
7	黒灰褐色	粘質土層	10㎝大の土丹（やや多）・木の枝	つよい	よい
8	黒灰褐色	粘質土層	3～5㎝大の土丹・右下部には10～20㎝大の大土丹が集中	つよい	よい
9	黒褐色	粘土層	－	つよい	よい
10	黒褐色	粘質土層	小土丹（少）	つよい	よい
11	黒褐色	粘質土層	3㎝大の土丹・木の枝・粒子粗くざらついている。	つよい	よい
12	黒褐色	粘質土層	5～10㎝大の土丹（多量）・木の枝（多量）	－	よい
13	青味黒灰色	粘土層	小土丹（少）・木の枝（少）	つよい	よい
14	黒灰色	粘質土層	0.5㎝以下の土丹(少)･木の枝(少)･粒子粗くざらついている。	－	わるい
15	黄褐色～灰褐色	粘質土層	0.5～5㎝大の土丹（多量）	つよい	よい
16	黒灰色	粘質土層	0.5㎝大の土丹・粒子粗くざらついている。	つよい	よい
17	暗褐色	粘土層	焼土粒（ごく少）	－	よい
18	赤味茶褐色	粘土層	小土丹粒（やや多）・炭化物（少）・土がブロック状の土層	－	わるい
19	赤味茶褐色	粘土層	小土丹粒・焼土粒（やや多）	つよい	とてもよい
20	青味黒灰色	粘土層	小土丹粒（少）	つよい	とてもよい

第四章　まとめ

玉縄城付近は極めて大まかな時期区分として玉縄城築城（永正9年（1512））以前・玉縄城期・玉縄城廃城（元和5年頃（1619））後と3時期に分けられよう。今回の調査では玉縄城期と考えられる遺構が検出された。

調査地点が位置する「御厩曲輪」は東西80～100ｍ、南北30～40ｍの平場で、四方を土塁に囲まれ、その土塁には4カ所の切れ目があり、北は主郭、東は「七曲坂」、東南は「えんしょうぐら」、西は「城宿」に通じている。また、北側の土塁の南（主郭南辺土塁）下には堀があったらしい。※

さて、今回検出されたＬ字型溝は調査地点が「御厩曲輪」のなかでも玉縄城主郭の大手口に近いことから東から回ってきた溝が大手口に向かって鉤型に折れた可能性は高い。となると、土塁外側にめぐる堀が想定できるが、検出された溝は堀と呼ぶにはあまりにも規模が小さかった。しかし、表土を取り除いた直下が地山であったことからも、上部が削平されてしまった可能性は高く、位置的には堀の下部であると考えたいが、断定はできない。

今回の調査区は狭小であり、また、周辺地域の調査での傾向に漏れず、出土遺物が小破片3片とごくわずかではあったため、確定的なことは述べられないものの、今回の調査で、この地の玉縄城期の様相の一端が解明されたといえよう。詳細については今後、新たな調査による発見を期待している。

≪参考文献≫

※「玉縄城跡発掘調査報告書－植木字相模陣374番他地点－」1994年3月　玉縄城跡発掘調査団　「Ｉ玉縄城について・中心部の縄張り」大河内勉著による。

図版１

▲A．遺跡全景（北より）

▲B．同上（南より）

▲A．遺跡全景（北西より）

▲B．調査区東壁土層断面（C－C’）

図版３

▲A．溝１土層断面（A－A’）

図６－１

図６－２

図６－３

出土遺物